の總務長官に進み、出でて清國特命全權公使となり、とう〳〵外務大臣ときで漕ぎ付けたのが彼が大臣になつた始めである。

子爵 齋藤實

幼い時林子平の海國兵談を讀んで、海軍々人たらんと志し、兩親の絶對的反對にも屈せずして、能く初志を貫徹したる齋藤は、自ら天の與へられたる職を洞見してゐたかの觀があり、頗る興味を感ぜられる、彼は十六歳にして海軍の門に入り、常に首席を占め儕輩を驚かし、官位累進して遂に大臣となるに及んでも五代の内閣を通じて海相の地位を獨占した、今は朝鮮總督として老體を國家に捧げ、治績亦大に見るべきものがある。

父の爲せし嚴格な家庭教育

岩手縣の水澤町から二人の大臣を出した、一人は後藤新平で、一人は齋藤實である、一は伯爵で他は子爵、いづれも華族とまで出世し、此二人によつて水澤町の名が世に知らるるに至つ

た、父は馨と呼び竹堂と號して、該地方の老儒であつた、竹堂は古今の人物を品隲するに妙を得、決して尋常儒生の如き口吻を帶びなかつた、彼は實に當時の儒林中に於て、卓越せる傑物として世の畏敬を受けて居た、父の竹堂が既に斯る人物である、さうして悴の實は父にも優る天稟の才物で、所謂青は藍より出で〻藍より濃しといつた方、幼時より嚴格なる家庭の教育を受けた、父は常に源爲朝を引證し、論じて曰く『英雄の材を抱いて小人の心を持せし者は賴朝であつて、而して爲朝は卽ち英雄の材、君子の心を持せし者である、是れ寔に英雄の本領である』と、而して家學の神髓は實に是にあるのだと說き聞かせて、大に將來を戒めたといふことだ。

伜の海軍志願に親は反對

實は安政五年に生れ、幼名を富五郎といつた、斯る學者の常として父は清貧に甘んじてゐたので、實が十三四歳の折、水澤町に膽澤縣が置かれた時、彼は或人の周旋で縣廳の給仕となつた、其時同鄕同年輩の後藤新平も矢張り給仕になつてゐて、いづれも給仕などには勿體ない秀

才兒、廳内での噂は高く、どちらも將來に嘱望されて居た。

これより先、齋藤は頻に林子平の海國兵談や、三國通覽を繙いては夢中になつて讀んでゐる、その結果何でも自分は軍艦に乘るのだと云つて、親の前や友達に放言壯語した、しかし親の身になつてみれば、其頃極邊鄙の地方とされた水澤で、海と云ふものを見たことのない齋藤が、海軍を志願すると聞いては、こりやア全く林子平の説に引入れられたものだ、さなきだに子平は幕府から愚民を惑はす者なりとあつて、禁獄されたといふことを記憶してゐる、といふ譯で悴の海軍志願には絶對的不承知を唱へた。

有志が折角の奔走も効なし

此事を聞き傳へた水澤の有志たちは、齋藤の決心と着眼とを賞めて、是非彼に新しい學問をさせてやりたいと大分騒がれた、そこで有志は大參事に願つて縣の學生にしてもらはうと云ふことになり、後藤などと一緒に採用方を願ひ出でた、然るに其頃の大參事は安場保和で、後に後藤の岳父となつた人、熊本縣出身で多くの書生を養成したことに於て世に知られたくらゐの

人だから、直ぐ贊成はして呉れたものゝ、此場合縣費を割いて學生を養成することは縣經濟が許さぬといふわけで、餘儀なく縣の出張所員といふ名目の下に、やつと縣廳の給仕に採用された次第であるのだ。

此等英傑の卵は縣廳にあつても暇を偷んでは讀書に餘念なく、夜は薄暗い行燈の下で深更まで勉學してゐた、ところが後藤は何か心に期するところがあつて飄然として縣廳を去つてしまつた、そこで齋藤に學問をさせたいといふ篤志家の心は、皆齋藤の一身に集中するやうになつたが、幸か不幸か茲に膽澤縣が廢されて水澤縣が置かれ、それと同時に有志等が柱とたのむ安場大參事が、岩倉具視に隨行して渡歐することゝなつた。

何うしても兩親が承知せぬ

さア斯うなると有志の奔走もおしまひとなり、安場が居らぬとすれば最早萬事休すの形だと彼は決心して上京の途に就いた、其目的とするところは、今一勉强して海軍に身を委ねんとの志望であつたのだ、しかしながら別に學資のあるわけでもなく、給仕の時分に貯めた少

しの金と、有志から餞別に貰つた小遣錢くらゐなもの、さて着京して知人を物色すると、彼が給仕時代に縣廳に奉職してゐた某が、矢張り安場の推薦で東京府廳の役人となり、市中に住まつてゐるのを知つた、そこで早速其人を訪ねて厄介となり、いろ〳〵世話を受けて勉強してゐると、恰も好し、海軍兵學寮で生徒募集の廣告が出た、早速志願してみると、美事な成績で合格したのである。

齋藤を寄食させて、弟の如く息子の如くに親切に世話してゐた東京府の某役人は、吾が事のやうに喜んで、早速右の趣を國許へ知らせた、ところが兩親は相も變らず不同意も不同意大々的の不同意で、

『御好意の程は實に感謝いたします、御禮の言葉もありませんが、何うも海軍志願だけは困りますから、他のものを志願させていただきたい、若し他に志願の途がないとすれば、呼戻したいと存ずるに依つて、是非共本人を歸國させて下さい』

といふ返書が來た、これには某役人も弱つた、兩親の承知しないものを押通してやれとも言ひかねて、暫く思案投首の態。

縣知事を煩はして漸と承諾

本人の齋藤も途方に暮れた、折角入學試驗にパスして、己が志望に向つて進むの途を捕へながら、兩親が許さぬとは如何にも殘念だと、それから親類の者共を說得するの方策をめぐらしてゐると、棄てる神あれば拾ふ神ありとやら、水澤縣出身の增田といふ人が、事情を聞いて氣の毒がり、度々書面を以て兩親に說いた、けれども親爺の老儒者は頑として更に應ずる氣色が見えぬ、增田も親切な人で、一度乘りかゝつた舟だ、どうしても彼岸に漕ぎつけねば承知しないと、時の水澤縣知事に逐一の事情を具陳して、直接に父親を說いてくれるやう懇願に及んだ、知事は早速承知して件の志望を容れてやるやう說き勸めたので、老人は不承不精ながら納得した、齋藤は大に仲介者の勞を感謝しつゝ、喜び勇んで兵學寮の學生とはなつた、これが明治六年で、齋藤が十六歲の時である。

彼は遂に其志を大成したり

斯の如き難關を通過して、やつとの事で目的の第一歩を踏み出した齋藤は、入學以來專心勉强、性來眞面目の彼は人々の恩義に感奮し、何時も優等の成績で首席を占め、明治十二年には海軍少尉となり、十七年には海軍省軍事部出勤を命ぜられ、此年中尉に昇進し米國へ差遣された、歸朝後間もなく大尉となり、二十七年日清戰役には侍從武官として、出征軍慰問の爲に聯合艦隊へ差遣されたが、間もなく和泉副長に任じ、續いて聯合艦隊司令官參謀に任ぜられた、然るに當時齋藤はまだ少佐であつたから、左程に其名も知られてゐなかつたが、其學識と才幹とは海軍部内の認むるところとなり、其必ず榮進すべき器なることを豫期されて居た、果せる哉、三十九年一月、第一次西園寺内閣の成立を見るに至り、前内閣の海相たりし山本權兵衛は次官の齋藤を海軍大臣たらしむべく首相に說き、閣僚も認めて彼は大臣の位に上つた、其後四たび内閣は代つても彼は海軍大臣を獨占し、今は老齡尙ほ矍鑠として朝鮮總督の職に盡してゐる。

子爵 岡部長職

公卿や諸代の外樣大名であつた人達のうち、内閣大臣の椅子を占めたものは數多くない、岡部は舊大名の身を以て、其才識と器量は正に大臣たるの材なりと認められ、貴族院議員としては研究會の牛耳を執つて勢力上院を壓し、大名あがりの人には珍らしい腕のある人と稱せられ、司法大臣となつても相當の好評を博した、それは第二次桂内閣の時で、在職三年餘に亘つた。

彼は大政奉還の先覺者

岡部長職は舊岸和田の藩主で、從五位下美濃守岡部長發の長子、安政元年十一月城中に生れた、幼少の折から學問が好きで、早くも洋書を修めたさうである、彼は安政三年六月、伯父に當る正五位岡部長寬の養子となり、明治元年十二月には、和泉國岸和田五萬三千石を襲封した、何を申すも大名生活の事とて、別に變つたこともなく、二年正月には從五位美濃守に任ぜられたが、翌月上奏して版籍奉還に及んだ。

此時大名であつたものは何れも其舊藩の知事に任命されたもので、岡部も御多分に漏れず岸和田藩の知事を拜命した、彼は幕末に際し他藩に率先して、徳川幕府の羈絆を脱し、大政を奉還するの意見を持つてゐたといふ、明治政府が成立して車駕東上するに及び、明治四年三月、岡部も上京して東京府屬となつた、後日東京府知事となつたのも、是れが蓋し因緣かも知れぬ。

殿樣には珍らしい活動家

明治八年米國留學を思ひ立ち、單身亞米利加に赴いて、マサチューセッツ州を始めとし、コンネチカット州などを漫遊し、ニューヘヴン、エール大學に入つて法學を修めた、やがて同校を卒業すると、今度は各州の風土人物を視察する旅に上つた、又十五年には河岸を變へて英國に行き、ケンブリッチ大學に籍を置き、序を以て歐洲各地を巡遊して、翌年十月歸朝の途に就いた。

大名殿樣としては珍しい此海外留學と、各國への旅行に、シコタマ歐米文明の新空氣を詰め

込んで來た岡部は、當時政府が切りに新材を要求して居る矢先ではあるし、それに祖先の勳功やら政略上やらで子爵を授けられ、十九年三月公使館參事官に任官した、これこそ適任と政府も認め、又自分も許したであらう、早速英國公使館在勤を命ぜられ、花の都の倫敦で切りに日本紳士の外交振を發揮した、やがて二十二年には歸朝して、其暮には外務次官にと榮進した、それから貴族院議員となり、司法大官となつた。

楠瀬幸彦

同僚は既に師團長となつて巾を利かして居るのに、彼は閑職に押込められて不遇を嘶ちしも、長閑に容れられざりしが爲であつた、山本權兵衞さんは彼を池中より引上げて天に上らしめ、其手腕を伸ばさしめた、彼は高知出身の剛膽もの、山縣や寺内は彼を喜ばなかつた、然も時は到つて一躍大臣となつたのは、彼も好運の寵兒と言ひ得るであらう。

學生時代はテイトく

高知縣の出身で、山内家の藩士楠瀬正志の長男、安政五年三月を以て城下に生れ、幼名を康太郎と稱した、長ずるに及んで藩の兵學校に入り、勉強家の評判を取つて成績も優秀であつたが、明治四年廢藩置縣と共に兵學校も廢されたので、山内家は更に東京芝山内の某寺に海南學校と名づけたものを創立し、十七八歳の秀才を選拔して入學させた、其際楠瀬も入學を許されて上京した、此校でも彼の記憶力の優れてゐるのと、何時も成績が好いので、大に將來ある青年と譽められてゐた、彼は少年時代から馬鹿に大きい人並すぐれた頭顱の持主で、學生仲間では彼にテイトといふ綽名をつけ、誰も本名を呼ばないで、テイト〳〵と呼ばれたのには閉口したといふ、テイトといふのは佛蘭西語で頭顱のことをいふので、つまり頭の大きいところから、こんな異名をつけられたのだ。

長閥の疲弊て彼の出世

其後陸軍幼年學校に入り、明治十年優等で卒業すると、直ぐ陸軍士官學校に入學し、やがて十二年には砲兵少尉となり、十四年佛國留學を命ぜられ、十五年には中尉、十八年には大尉となつた、翌年乃木川上兩將軍が歐洲へ派遣された時には、其隨行員として渡歐した、明治二十三年五月陸軍砲兵少佐に進み二十七年中佐に、三十年には大佐となつた、彼は朝鮮の公使館武官として在勤中、かの王妃暗殺事件について嫌疑を受け、廣島監獄に入れられたこともある、由來彼は剛膽率直の人で、一度言ひ出したら決して後へは退かぬと云ふ風な性質だから、それが累を爲して、同僚は既に師團長となつて居たにも拘らず、彼は山縣や寺内などのお氣に召さず、陸軍技術審査部長といふ閑職に押込められて、十分に手腕を現はすことが出來ぬ境地にあつたが、時は到れり、蛟龍は遂に池中のものにあらず、長閥は疲弊して山本内閣となり、薩派政友の得意時代を迎へるに及んで、彼は一躍大臣の位に上つた。

仲小路　廉

父兄と共に東都に上りて、然も父兄は相踵いで他界し、彼は老母を養ふの資なく、學に勵むの暇なくして能く大學を優等で卒業する程の苦學を重ねた、堅忍不拔、學才衆を拔くの人物である、彼の行動はキビ〳〵として常に潔く、司法官增俸問題を揭げて活動した時の有樣などは、彼にして始めて爲し得るものなりと

首肯せしめた、彼は第三次桂内閣の時農商務大臣となり、寺内内閣の時再び農相となつた。

双璧と謳はれた秀才の兄弟

仲小路は山口縣の出身で、兒玉源太郎將軍と鄕地を同じうし、慶應三年德山城下に呱々の聲をあげた、父は藩の庫御用人を勤めて居つて、明治の初年に召されて大阪に赴いた、其際彼も父に從つて大阪に往き、同地の某學校、今の中學程度のものへ入つて、そこを卒業すると兄弟揃つて上京し、今の高等學校の前身である開成學校に通つた。

兄の市三はなか〳〵の秀才で、後には大學に入つて佛法を修め、何時も首席を占めて居たくらゐの人物、卒業後は佛人アツベールの鑑識によつて、一躍大學の助教授にと拔擢せられた、彼は開成學校時代に高見照陽の門に漢學を修めて、出藍の譽れを博し、詩文を能くし、時事を談じ、政策を說き、將來恐るべき傑物として、先輩知己の畏敬を受けて居たが、天彼に長壽を假さず、間もなく病に殪れてしまつた。

弟の廉は東京に上ると、間もなく父に死なれる、續いて兄に逝かれてしまつて、誰一人賴

みとする人もない、家は貧しうして食ふのにも困る、遊學どころか勞働苦學、その上母を養はねばならぬ、彼は尋常ならぬ艱難と鬪つて苦學を續け、優等の成績で卒業した、後日大臣の位に上り得たのも、其學其才蓋し凡俗を超越して居たには相違ないが、斯る艱難辛苦を嘗めて、能く堅忍不拔の氣象を陶冶したにも因るのであらう、艱難爾を玉にするの實例を彼に見るではないか。

司法官增俸問題で大に戰ふ

大學を卒業したのが年齒僅に二十一の時、法學士の稱號を取つて一人前の紳士となり、早速司法官試補を拜命して神戸裁判所の檢事となり、次で橫濱の裁判所檢事となり、更に東京の地方裁判所へ轉じたのが明治二十九年の頃であつた、彼の所說は嶄新にして辯舌さわやかに、盛んに辯護士と舌戰して彼の名を知らしむるに至つた、其在職中に金玉均暗殺や、東京市不正鐵管事件の檢擧に於て、最も辛辣なる手腕と、勇邁なる快辯を揮つて、一躍法曹社會の花形役者となつた。

彼は此時司法部内に於て前途に多大の望を囑せられ、司法省參事官に昇進して、遣外法官九人組の一人として英國に派遣された、歸朝後彼は八人の法官同志を率ゐて、司法官增俸問題を揭げ、清浦法相を動かして議會に提出したが、衆議院は之を否決した、そこで全國の裁判は休止される、世論は益々喧しくなつて來る、仲小路は金子法相に迫つて、再び增俸問題を提出せしめ、議會壇上で大に雄辯を揮ひ、提案の理由を說明したけれども、是亦僅かの差を以て否決されたので、斷然責を引いて辭職するなど、其意氣の壯にして男らしい遣り方は、仲小路の仲小路たる所以は玆にありと思はせた。

官を罷めて後暫く世に隱れてゐたが、一たび風雲に乘じて遞信省に官房長となり、二三の局長を經て、次官から大臣とまで潛ぎ付けた手腕は、仲小路其人にして始めて見受けられる、彼は農商務大臣たること二回、例の米騷動の時に處して、毀譽褒貶の的となつた。

男爵 阪谷芳郎

毅然なる父君、賢明なる母堂は此秀才を敎化し薰育して、藩より第一に選ばるゝ光榮を擔はしめ、拔群の

成績を以て大學を卒業し、大藏省に入りて以來其昇進は著しく、法學博士として學界に重きを爲し、大藏大臣として其辣腕を認められ、功を以て男爵を賜はり、後東京市長に推薦せられたる好運の人であつて、世人は其後楯に澁澤子爵のあるを云爲するも、彼は確に自ら其地位を開拓した腕の人であり、德の人である。

賢母の德風に敎化せらる

法學博士として學界に重きを爲し、一たび臺閣に入つては藏相として其辣腕を認められ、桂冠して幾何もなく尾崎の後を繼いで東京市長となつた坂谷は、好き運命の下に生れた人だ、おまけに富豪澁澤の娘を貰つて妻とするなぞ、コンナ幸福な男は餘り多くはあるまい、備中の藩に坂谷希八郎といふのがあつて、其妻京子との間に五人の子供をもつてゐた、長を禮次郎といひ、次は次雄、三男が辰三郎で、末子が卽ち芳郎であつた、希八郎は藩の儒者で弘城館の敎授を勤め、朗廬と號して名望は藩內に高く、妻の京子も嫁して以來自ら灑掃應對の事に當り、薪水の勞を勤め、傍夫君を助けて子弟の薰育に盡し、鄕人をして其德風に悅服せしめた賢夫人であつた、或年此地方は凶作に會うて、藩士に至るまで何れも冗費を省き　節約を旨として其

急を慮した、希八郎もそれが爲に養ふべき子弟を減じて、一家の困難を救はうとした、ところが妻は百方其不可なるを說いて、懇に夫を諫めた上に、自分は髮の物までも賣つて其費を助け儉約に儉約を重ねて、內顧の憂なからしめたとか、かゝる兩親の膝下に、嚴格なる敎養を受けたる阪谷が、天稟の英才を磨いて今日の地位を得るに至つたものである。

第一に選ばれた藩の秀才

ところで父の希八郎は、漢學者だけに苟も暇あれば、青年を集めて漢籍の講義をして聞かせた、阪谷も藩黌から歸つて來ると父の講義を傍聽し、又折々は父と相對して忠孝節義の道を說き聞かされ、又いつも『禮に非ざれば爲す勿れ』『禮に非ざれば享くる勿れ』云々と、『非禮』の愼しむべく且つ戒むべき所以を、懇々と訓へられたとか。

又彼は幼時より馬琴の八犬傳を讀ませられた、それには勸善懲惡の道を說いてあるので、彼は讀むたび毎に、人間といふものは、正しい道を履まねばならぬものであるといふ觀念を吹き込まれたので、從つて之に感化されたのである、やがて藩に於ては、藩士の子弟中より秀才を

拔いて、東京に遊學せしめることになつた、さうしてイの一番に拔擢されたのが此阪谷で、彼は東京に上つて大學豫備門に入り、進んで今の東京帝國大學で經濟學を專攻した、在學中は何時も優等の成績で、卒業すると直ぐ大藏省の役人となつた。

婿選びに及第した好運兒

日本の實業界を代表する澁澤さん、先夫人との仲に二人の娘があつて、長女は法學界のオーソリチー穗積陳重博士に嫁いだ、次女は誰の嫁に呉れてやらうかと、兩親は其婿選びに頗る頭を捻つた揭句、流石商略に拔目のない澁澤は、大學出身の學才兼備し、さうして男振りのよい男を婿にしてやらうと考へついた、然も家族の者等に己が意中を漏らさずに、或日秘書に命じて、何月何日拙宅に於て小宴を催し、諸君の御卓論を拜聽致したいと存ずる、萬障御繰合せの上、當日は枉げて御尊來を煩はしたいといふ意味の手紙を方々へ出させた、此案內狀を受取つた若手の學士連、未だ一面識もない澁澤から招かれて、大に光榮の次第なり、何を措いても往かずんばあるべからずと、定めの時刻には悉く出席した、やがて澁澤が一場の挨拶を述べて、

どうか御遠慮なく御高説を陳べられたいとやつた、中には、吾輩が演説したとて澁澤にわかるものか、無駄なこつた、それよりウンと飲んで食つてやれなどといふ連中もあつて、演説したのは一人か三人、宴酣なる頃、澁澤は夫人と娘に今夜の宴會の趣旨を耳打ちして、襖の際から覗見させた、宴席では劍舞をやる者もあれば流行唄を唸るもあり、口角泡を飛ばして互に論じてゐるのもあつたが、獨り眞面目くさつて正坐してゐる阪谷が、夫人を始め娘も親父ものお眼にとまつて、四五日經つと緣談の申込、彼は澁澤の女婿となつて、當夜列席の面々に指をくはへさせた幸運兒となつた。

伯爵 加藤高明

數多き大學出の人材中、最初の總理大臣となり、又自力を以てする帝大出身頭の華族となつた加藤高明、彼は豐臣秀吉と鄕地を同じうし、共に微賤の家に生れて、一は戰國時代の英雄として其名を竹帛に垂れ、一は平和時代の宰相として譽れを靑史に貽した、加藤は三菱の女婿たることが大成をなした一因であらう、けれども天の成せる美玉を勉强の力に依つて磨き上げたのも事實である、年十三にし助敎師となり、幾多

の學生を敎へたるが如き、彼が非凡の人物であつたことは、此一事で首肯かれる。

足輕の次男に大正の太閤

國世の英雄豐臣秀吉を出し、武名一世を風靡した加藤淸正を產んだ尾張國海部郡佐屋村は、明治大正に涉りて典型的宰相と呼ばれた加藤高明を生誕せしめた、萬延元年正月三日、郡奉行の足輕服部重文の次男として產聲をあげた赤ン坊こそ、後の內閣總理大臣正二位大勳位伯爵加藤高明であるのだ。

父親の重文は身の丈高い偉丈夫で、資性沈着にして純良なる人物として、一點非難なき人であり、母は賢明な性質と、美貌の持主として知られ、當世輕薄婦女子の如く愛想を二三にするやうな女でなく、寧ろ無愛想に過ぎるくらゐの婦人であつた、加藤は幼名を房吉と稱し、父の美點と母の特質を享有して、幼い時は極めて溫和な性質であつた、然も沈着で悠揚迫らざる態度を持し、子供仲間で喧嘩するなどといふ餓鬼大將ではなかつた。

父に代つて祖父に仕ふ

房吉は佐屋村の儒者に就いて、四書五經の素讀を習つたが、其頭腦の明晰と、思慮の縝密とは、幼い時から群童中に卓越し、此兒は將來有望の偉才だと、師匠をして舌を卷かしめたが、時に世は明治維新となつて、尾張藩の廢止と共に、佐屋村の陣屋も解かれることゝなつて、房吉の家も此處に居住する見込がなくなつたから、一家を纏めて鄕里を引拂ひ、父親は鹿兒島縣廳に出仕して判任官となつたが、どうも思はしくないので間もなく止め、信州伊那縣の權大屬官を勤めることゝなつて、家族を連れて信州鹽尻へ移つた、房吉は祖父と共に名古屋市に些かな家を構へて、專ら修學に親しむことゝなつた、此時房吉は漸く十歳、然も父に代つて祖父に能く仕へ、殊勝の行跡が多かつたといふ、さうして毎日尾張藩の儒者吉田東吉郎の私塾に通つて、漢學の習得に餘念なかつた。

加藤家の養嗣子となる

彼が祖父と共に名古屋に移つてから、まだ一年も經たない明治三年の一月に、鹽尻に住へる母のひさ子は病死した、さうして十三歳の春、彼は服部家の親戚に當る舊尾張藩士、加藤武兵衛の養嗣子となつて、加藤家を相續し、姓を加藤と改め、名を高明と變へた。加藤家は御弓役として永世祿七十俵を取り、初代の武兵衛は弓術の達人で、昔時、百本の的を九十九本まで的中し、之を三年間當て通したものは、弓の名人として召出され、永世祿の恩賞にあづかつたと云ふ、武兵衛は實に此恩賞を受けた尾張藩の勇者であつた、加藤の養父は四代目武兵衛で、三十六歳で早世したので、加藤は其五代目を繼いで、加藤高明と名のるに至つたのである、さうして養家は武兵衛の逝去後、養母のせい子は離緣したので、加藤は依然服部家に身を留め、孜々として學業に勵むのであつた。

東都遊學の念禁ずる能はず

加藤は舊尾張藩の設置した明倫館で、漢學を學ぶ一方、英語學校に英學を勉强した、英語學校は正則科と變則科とがあつて、彼は正則科に入り、英漢の學を研鑽すること數年に及んだが

何時も成績は抜群で、爲に十三歳の白面少年は、門前學校といふ監督學校の稱ある學校の、助教師を拜命して、教壇に幾多の門生を指導する身となつた、しかしながら是れは彼の素志とするところではない、世は明治維新直後の創成期に臨んで、人材登用の門戸は開かれ、又英才養成の學府は東京に設けられる等、時勢は一變して新人の奮起を俟つの狀態と化した、未來の宰相ともなるべき炯眼の少年高明は、いづくんぞ井中の蛙たるに甘んぜんやで、教壇に鞭を揮ひつゝも、遙に東の空を望んで他日志を伸すの考へに耽り、只管東都遊學の機會を窺ひつゝあつた。

叔父の盡力で初志を貫く

加藤の叔父に安井讓と云ふ人があつた、加藤の實父重文の妹が嫁いだ夫で、非常に明敏透徹の偉材であり、明治中葉の司法界に其名を謳はれ、漢學の造詣も極めて深かつた、此叔父夫婦は高明を我が子の如くに愛し、其人物を見拔いて、將來大臣になる人物ぢやとエつた、さうして父の重文を說きつけ、此子には確かり力を入れて學問を仕込み、是非大學を卒業させよと

極力すゝめた、又高明に向つては、學校の成績を質して、大に勉强して將來大人物になれ、國家有爲の偉材となつて、大臣になる決心がなくては不可ぬ、などと刺激奬勵したものだ、此懇篤なる安井の勸告は、遂に父をして高明少年を大學に入れる決心をなさしめ、又高明をして發奮せしめる衝動を胸に刻み込ませた、そこで明治六年、優等の成績を以て英語學校を卒業した時、安井の叔父の勸告に依つて、愈々東都遊學の途に上ることゝなつた。

慈母は既に在ます、祖父亦他界して、彼を見送るものは父親ばかり、物淋しき出立も、前途の光明に輝ける加藤には實に嬉しかつたであらう、十四歳の少年は叔父に連れられて帆前船に乘つたが、途中難船に遭うて、已むなく東海道の長旅を續けた。

ムツツリ屋で詩吟の名人

着京後、外國語學校、英語學校を經て現今の東京帝國大學の前身たる、神田一ツ橋の開成學校に入學した、此學校はまだ大學の學制が設けられない時、政府は一時此學校を設けて、各藩からの英才を此處に集め、專ら豫備教育を行つたものである、世間では加藤が當時藩の貢進

生となり、月々六圓の貸費を受けた如く言はれてゐるが、事實はさうでなく、學費は大學の支給と實父より時々送られたもので、此時代の加藤は、性來の如く、剛直、ムツツリ屋で、寒中に單物一枚重ね着のまゝで、如何なる嚴寒も押し通し、一生懸命に勉強した、詩吟は非常に好きで、學校内でも加藤の詩吟は名物の一つに數へられたくらゐ、而も其朗々たる美しい聲は、多くの學生を羨ませた。

大學時代特性のいろ〳〵

開成學校は幾許もなく大學々制の發布と共に廢校されて、在學生は全部東京帝國大學に移されることゝなり、茲に最高學府の門を叩くことゝなつたのが、明治十年で加藤が十八歳の時であつた、大學は法科、文科、理科の三科で、加藤は法科の學生として入學した、當時の大學生は破衣短袴、大酒を飲んで天下狹しと濶歩したものであるが、加藤はそんな風に染まず、衣服などは何時もキチンと着て、專心學業に精勵し、理路整然、論議堂々たるものがあつた、爲に學生仲間に於ても一目置かれて、學生委員等に擧げられ、何時も議長席にフンゾリ返つて、人

に羽振をきかしてゐた、其時から彼は熱心と几帳面な特質を備へ、新聞や書物を讀んで、自分が見知らぬ文字に出會すと、何時も指で空中に其字畫をかいて、これが記憶に努めたものである、さうして自ら强ひて友を作るなぞといふ肌合の人ではなかつた、彼は學生時代から非常にフケて見え、從つて友人にも年上のものが多かつた、仙石貢なども加藤より年長の上級だつたが、當時から親密な交際をしてゐた。

彼は又學生時代から人の頭に立つといふ趣があり、その上議論家であつたから、何か學生仲間で文部省などに掛合ふことでも起ると、きまつて其談判の先陣をつとめ、友人四五人連れのうちで、自ら其代表となつて堂々と事理を辯じ立てるといふ風で、加藤が行くと話が巧く纏まると、學生仲間から大に尊重されてゐた。

首席で卒業して三菱へ入る

彼が大學を卒業したのは明治十四年の七月で、二十二歳にして首席の好成績を占めたのであつた、時恰も維新の鴻業其緒に就かんとし、歐米先進國の文明を輸入して、明治維新帝國を建

設するの急務を控へて、而も明治七八年頃より爵勅たる勢を以て擡頭し來れる民間の政治熱は、自由民權の聲と共に各地に沸騰して、政治結社生れ、板垣の愛國公黨組織、江藤新平の佐賀の亂等、言論危激、暴動頻出の狀を呈し、遂に明治十四年の大詔煥發となり、十五年には伊藤博文の歐洲特派を見るなど、文物制度の創設期に直面せる一方、經濟界に於ては國立銀行の設立、民間普通銀行の增設に加へて、民間有力者の會社創立も弗々見えた、斯くて世は政治的にも、外交的にも、經濟的にも一變するの形勢を呈して、當時の大學卒業生なるものは、官界重用の時期に際會したので、多くは其立身の途を官界に求め、自ら好んで實業界に投ずるが如きものは極めて尠かつた、然るに加藤は學生時代からの變り物であり、又何か期するところあつたものゝ如く、彼は自ら進んで實業界に投じ、十四年七月卒業と同時に、三菱會社の一社員として勤務することゝなつた。

俊才を認められ英國留學

當時岩崎彌太郎は、事業の擴張に際して人材を天下に求め、大學卒業生中から加藤を拔いたのであるが、彼の三菱入りは確に榮達の一因をなしたと首肯かれる、彼は初め三菱會社函館支店詰となり、後小樽出張所詰となつたが、其時出張巡視の彌太郎に認められて、遣らうといふ金時計を突返し、爲に見込まれて岩崎の女婿になるに至つたと云ふ巷說もあるが、それは無根の事で、小樽勤務中の青年社員高明は、身に襤褸服を着けて、法律を敎へて遣るなんて、始終理窟ばかり言つて、仕末におへぬ見習若社員であつた、そして或日副支配人が見て居るとも知らず、其副支配人谷田榮之助の事を「無能」とか「青べうたん」とかいつて、社長宛に手紙を書き上げたのを、副支配人が見て立腹し、遂に口論の末、僅三ケ月に滿たずして神戸支店の方に轉勤させられた、當時彼は足繁く遊里に通ひ、丸辰樓の君子といふのに熱くなつてゐたと云ふ、ところが間もなく東京本店詰となつて勤務しつゝあるうちに、其才氣煥發の英才を社長彌太郎に認められて、明治十六年四月英國留學を命ぜられ、兼て三菱倫敦支店詰勤務となつた、此時彼は漫遊滯在中の陸奥宗光に知られ、其才幹を愛せらるゝに至つた。

遂に我を折つて三菱の女婿

斯くて倫敦に留ること足掛三年、明治十八年八月歸朝して、再び三菱本店詰となり、同年十月日本郵船會社創立と同時に同社に入社した、當時加藤は神田駿河臺に小さな家を一軒借りて大學醫科別科の通學生である實弟成堅と共に住ひ、一人の婆やを雇つて會社に通勤してゐた、ところが加藤の歸朝する半年前に、岩崎彌太郎は病死した、其臨終に際して、娘の春路を加藤の嫁にするやうにと遺言して此世を去つたので、此時圖らずも其結婚談が持ち上つた。

然るに頑固一徹の加藤は、その話は眞平御免ちや、と一も二もなく斷つてしまひ、釣合はぬは不緣の固だ、と云つて何うしても承知しない、そこで當時三菱の重役だつた莊田平五郎が、加藤と幼馴染の永井久一郎、此人が內務省衞生局の書記官をしてゐたのに賴んで、加藤の本當の意思はどうなのか、春路孃が氣に入らないのかどうかを、聞き質して貰ひたいといふ交渉があり、又加藤が少年時の明倫館の敎師であつた兼康某も、此緣談の中に入つて、頑固に反對してゐた加藤を遂に口說き落した。

昨日に變る今日の豪勢

彼れ是しと骨を折らせた緣談も目出度く纏つて、遂に結婚式を擧げられ、加藤は天下の富豪三菱の女婿として緣戚を結ぶに至つた、流石に岩崎彌太郎の眼は高い、將來國家有爲の人物になる英才の加藤を夙に看拔いたのである、所謂一代の偉人は克く一世の俊傑を見出したのであつた。

加藤と春路との結婚當時、卽ち明治十九年頃に、加藤は實弟の成堅と一緒に淋しく暮らしてゐた家を引拂つて、神田駿河臺鈴木町の高臺にある堂々たる邸宅に移り、抱への車夫を置いて綱引きの勢ひすさまじく外出する有樣は、結婚前の生活にくらべて、餘りに急激な變りかたほんたうに雲泥の差であつたと稱せられてゐる、斯くの如くにして、加藤が他日大成をなし得るに至つた裏面には、そこに富豪岩崎の後援が大にあづかつて力あつたと、世間に唱へられたのも强ち噂ばかりではないらしい。

三菱を出て官途に就く

間もなく加藤は心機一轉、飜然實業界を去つて官界に身を投じ、華やかな外交官生活に入

ることゝなつた、これは前にも述べた通り留學中陸奥宗光に知られて、歸來陸奥から官界入りをすゝめられたのと、今一つは加藤の性格として、三菱の女婿でありながら、漫然三菱の會社に留つてゐるのを心中屑しとしないに加へて、官海の前途洋々たるものあるを認めて、遂に外交畑に游泳すべく決心するに至つたものらしく想像される。

彼は明治二十年一月外務省に入りて、公使館書記官兼外務省參事官に任ぜられ、奏任官三等に叙し、總務局政務課勤務を命ぜられ、幾何もなく同年三月兼任外務省取調局次長に任じ、同四月には法律取調委員書記、同十一月に法律取調報告委員を仰付られ、又文官普通試驗委員を命ぜられた、當時は伊藤博文が最初の總理大臣となつた内閣の時で、井上馨が外務大臣の椅子を占め、鳩山和夫が取調局長となり　加藤は其次長であつたのだ、さうして入省後一年餘にして、雷大臣は加藤の偉材を認め、兼任政務課長に任ぜられた。

鯉は龍門に向つて進み行く

有名な癇癪持ちの井上も、加藤の剛愎にして率直な性格を愛し、加藤も亦種々！献策を怠らなかつた、彼が性來の頑固一徹は當時に於ても何等變りなく、大臣でも局長でも遠慮なく、剛直を發揮して一歩も讓らなかつたといふ、而して彼の條約問題で井上が辭任し、伊藤が外相を兼ねるようになつて、加藤の人物が伊藤に知られ、尋で大隈に認められて新に外務大臣秘書官となり、奏任二等に叙せられた。

然るに伊藤内閣は條約改正問題より端なくも倒れ、黒田内閣成立し、次で三條兼攝内閣一時生れ、山縣内閣其後を承けたが、此間加藤は暫時外交畑に青木周藏外相の下に働き、山縣内閣の藏相松方正義に、其人物の非凡なるを見拔かれて、乞はれるがまゝに大藏省に轉じ、新に理財の方を此處に養ふことゝなつて、前後三ケ年の外交官生活を離れ、明治二十三年九月、大藏省參事官に任ぜられ、玆に其新鋭を揮ふことゝなつた。

子爵　大浦兼武

大浦は明治四年東京に始めて警察機關を設置せられたる時、年二十二にして邏卒小頭を命ぜられ、翌年牛

迅樞區長となり、司法省小警部となり、爾來警視廳に在ること八年、大阪府警部長に任ぜられ、島根縣知事となり、明治三十一年四十九歳にして警視總監に陞任し、後遞信大臣となり、爾來農商務、內務の兩大臣に任ぜらるゝこと二回に及んだ、彼は官海に於て異類の榮達を爲し、政界にありては、或は官僚の謀主となり、或は政黨界の闘將となり、子爵に陞叙された明治大帝以來の功臣である。

大浦家は薩摩藩の陪臣

大浦は嘉永三年五月、鹿兒島縣薩摩郡宮之城に生れた、宮之城は大町村で廣袤數里に亘り、總戸數二千七百、鹿兒島の西北十一里にあつて、所謂百二都城の一である。

薩藩の制度として、宗主島津家が鹿兒島に居て、其支族又は重役であつた老臣を薩摩、大隅、日向三州の各要地に居らしめ、之を總稱して百二都城と云つた、百二都城の各領主は、常に鹿兒島に居て宗家に仕へ、期限を定めて領地に歸るといふ、恰度幕府の參覲交代と同じ制度であつた、而して鹿兒島に居る士は各領主と齊しく島津家の直參で、領主の臣下は陪臣と稱せられ、多くは半農半兵で、彼の屯田兵の如きものであつたから、鹿兒島士民との間には尊卑の別あり、直參は陪臣を賤視すること甚だしかつたといふ。

大浦家は代々宮之城領主たる島津圖書の家來で、所謂陪臣であつたが、大浦は七代目兼友の二子に生れ、幼名を十次郎、また均と稱した。

薩州人のスパルタ式教育

鹿兒島人士が尙武の風俗は、彼のスパルタ以上と稱せられ、其通常一般の氣風は實に左の如きものであつた。

(一)凡そ武士の家に生れたる男子は、一藩の公人にして一家の私すべきものに非ず、隨つて獻身奉公の精神を尙び、藩主も亦國寶として優遇し、而して子弟また自ら深く愛重す。

(二)忠孝一本、身を立て道を行ひ、名を傳へ父母を顯すを孝の極とし、若し家名を穢すべき罪科を犯すあれば、一門協議して自刄せしむ。

(三)戰場に出でたる場合如何とは、父兄が平素子弟を訓練する唯一の鞭也、されば常に戰陣に出づるを目標とし、衣食共に簡素を旨とし、困苦窮乏に堪ふべく鍛錬す。

(四)遲けを取るなと云ふを武臣の套語とし、小兒の喧嘩するも、負けて還るあれば、刀を與へ

之をもつて返報し來れ、然らずんば之を以て屠腹せよと激勵す。

(五)虚言を禁ずること亦甚だ嚴なり、凡て士人は辭少うして氣膽あるを尚ぶ。

大浦は陪臣ではあつたが、幼時より斯の如き氣風の裡に敎養されたのである。

武技に勵み文事に勉む

大浦は幼い時眉目秀麗、殆ど人形のやうな可愛らしい子供であつたが、頗る腕白者で、亂暴な惡戯ばかりやつて居た、或時母親が純白の麻の衣物を着せて遊びに出したところが、暫くして脊中に墨黑々と大の字を書いて、得々として歸つて來たのには、母親も呆れて開いた口が塞がらなかつたさうだ、さうして餘り惡戯が過ぎる時には、裏庭の柿の樹に大浦を縛り付けたといふことで、後年大浦が榮達した時、母親は手紙を送つて曰く、

『人間は本を忘れてはなりません、お前は今大臣になつたからと云つて、むかし柿の樹に縛られたことを忘れてはなりません』

と、さうして毎年其柿の樹に實つた柿を大浦に贈つたといふ。

當時宮之城に嚴翼館といふ武技を敎へる所と、盈進館といふ文學を授ける所があつて、大浦は八歳から十四歳まで此兩館に通ひ、文武兩道を勵む傍、大磯彦兵衞といふ劍客に天眞流の劍法を敎はり、且つ七歳の頃から鄕村の儒者に就いて漢籍を學んだが、彼の得意とするところは武技であつた、然かも當時の風習として、多くは武を尙び、學問の方は第二に置かれたけれども、大浦は自分の好む武技に偏せず、日々竹刀を肩にして、密に脊中へ書物を藏し、儒者の許へ通つたさうである。

感ずるに餘りある彼の母堂

父の兼友は食祿僅に三十石であるのに、稍過度の生活をやつて家計が次第に苦しくなつたおまけに平生多病で湯藥に親しむといふ有樣であつたから、稀有の女丈夫と稱せられた母親のとき子は、毎夜二時三時までも仕事をして三男三女を養ひ、其間具さに世の辛酸を嘗めたが、彼女は常に藩主島津日新の作つたいろは歌を誦して、自ら戒め且つ子女を訓へた、大浦が後年堅忍不拔の精神に富めるは、母堂の賜物と云つてよからう、彼女は自ら用を節し、辛苦して貯

へた金は、大浦の好める書籍の代に惜氣もなく出して、若し足らない場合には、溫言を以て大浦を諭し、苟くも彼の志を阻むが如きことは無かつたといふ。

大浦が官位榮達した時に、屢母を東京に迎へようとしたが、どうしても承知しない、そこで大浦は家計を助けるべく金を贈つたが、是亦刎ね付けられた、母は曰く、

『人は立身するに隨つて總ての費用が多く要る、妾は幸に慣れた職があつて、食べるに不自由はしません』

と、そこで大浦も何とも致方がないので、位階陞進等の場合に、祝意と稱して金品を贈るとそれだけは納めて呉れたさうだ。

領主久治の感化を受く

大浦は稍長じて刀劍を嗜好するやうになつた、父の兼友は彼の嗜好を充たすべき餘裕のないのを心配しだした、そこで母のとき子は大浦の將來を慮つて、百方奔走の末、彼を領主の御小坊主にして貰つた、これが彼の十四歳の時で、領主島津久治は常に鹿兒島に居て、領地へは

一年に一二回歸り、滯留する事長くも一二ケ月に過ぎない、其往返毎に大浦は御供をして、鹿兒島宮之城間十一里の道を、徒歩又は騎馬で往來した、大浦が却々騎乘に得意であつたのは蓋し斯んな事に原因するのだらう。

領主久治は英邁の人で、和漢の學に通じ、兼ねて西洋の事情には精しく、机上には所謂薩摩辭書なる英和辭書があり、懷中時計を掛け、筆算なども頗る熟達してゐた、大浦が其左右に侍つて、感化を受けたことは少くなかつた、間もなく彼は料理番頭に任ぜられ、料理の事を覺え込んだ、後日彼が魚や鼈の料理を巧者にやつて人を驚かし、薩摩鮨を作るのに得意であつたのも此のためであらう。

邏卒小頭が出世の緒

戊辰の役に、宮之城では兵一小隊を編成し、私領四番と稱して本藩の兵と共に出征した、大浦は時に年十九、强て從軍を志願し、八月鹿兒島灣を出船して新潟に上陸し、米澤へ行つてから各地に轉戰し、九月東京に凱旋して、戰功に依り朝廷より金拾壹兩を賜はつた、明治二年

鹿兒島軍務局から宮之城に常備隊三小隊を置き、大浦を其二番小隊の小頭に任じた、小頭とは下士であつて今日の軍曹に相當したものだ、常備隊は藩の行政及び軍事を管掌し、威望勢力強くして四民を慴れしめたが、當時兵亂の氣が未だ去らずして、百二都城總て警戒を嚴にし、深夜警鐘を亂打して、不意に常備隊の全員を召集し、以て其懈怠を戒める等、緊張の意氣が全藩に充ちて居た。

明治四年十月廢藩置縣と共に、東京府に屬せる府兵を廢して、外國の制に倣ひ府下に取締組五千人を置くに決し、內鹿兒島縣から三千人を募ることゝなつた、取締組は即ち警察機關で、組子は邏卒である、これは西鄕隆盛の意見に依つて設置されたもので、大浦は東京府取締組の徵募に應じ、上京して邏卒小頭となつた、是れ大浦が中央政府に出仕した初めであつて、時に二十三歲であつた、翌年六月には權小區長となつて牛込區を管理し、尋で司法省小警部に任ぜられた。

濱尾新

溫厚篤實の君子人、明治初年の洋行歸り、こんなことが彼が出世の因と見らるべく、彼が事に當つては熱心と誠實とを以て始終し、終に對者を屈せしむるに至る態度は、他人の一寸眞似られないところであらう、その文部省の一屬吏より段々に昇進して、能く大臣とまで漕ぎ付け、華族に列せられたのは、蓋し異數のことゝ申すの外はない、併し彼が不慮の死を遂げたのは誠に氣の毒であつた。

拔擢された有爲の青年

文部省の一小屬吏から順次に昇進した三大敎育家といへば、辻新次と久保田讓と此濱尾とである、彼等は學者としては餘り名を成さないにも拘らず、新進の學士博士が雲の如き敎育界に勢力を振うたのは、いづれ一種の特色を有つてゐたからであらう、而して濱尾は溫厚な性質で然も事に當つては熱心と誠實とを以て押し通す、爲に如何に不平を起す男でも、彼の手にかゝつては遂に降參せざるを得なくなる、それにしても彼が文相の地位に立つに至つたのは、最も

親切に引立てゝくれた加藤弘之と、彼の温厚誠實を愛して、宜しく之れを利用した九鬼隆一とがあつたからだ。

濱尾は但馬豊岡藩士で、父を嘉平治といひ、嘉永二年四月に生れた、幼名を定次郎と稱し、長ずるに及んで藩黌に和漢學及び和算を學び、傍武術をも修業した、やがて明治維新前には洋式練兵が行はれたので、全國各藩から少壯有爲の青年を選拔し、京阪並に江戸に遊學を仰せつかつた、其時彼も拔擢されて遊學生となつた、何分歐米文明國の新空氣が輸入さるゝ抑もの始めだから、心ある青年は切りに玆に留意し、彼も將來を洞察して、英語や佛語の研究をやつた。

初期の洋行歸りが出世の因

元來濱尾は若い時から至つて眞面目な、至つて勤勉な人と言はれて居た、從つて彼には何等の珍談もなければ奇行もなく、孜々として勉强するのが彼の平生であつた、さうして慧眼なる彼は、明治元年に早くも米國に留學し、五六年間の勉學を卒へて歸朝すると、當時政府は切りに人材を要求してゐた折柄とて、洋行歸りの彼の志望を聞き、直ぐ樣文部省出仕を命ぜられて彼の役人生活が始まつた。

其頃大學南校は官立學校隨一のものとせられ、これに入らなければ立派な學者になれない、立派な政治家にもなれないかの如く思はれてゐた、外國仕込みの濱尾は語學には堪能であり、おまけに溫厚な勤勉家であるところから、文部省出仕で大學南校の監事を兼ねた、明治七年、大學南校は東京開成學校と改稱されて、濱尾は一躍校長心得を命ぜられ、校務の整理に當つた、尋で明治十年には東京大學が設けられて、彼は法理文學部の綜理補に任ぜられ、其後文部大書記官や、權參事院議官補となり、更に文部大書記に任じ、十八年には東京大學副總理に榮進し、二十二年元老院議官となり、翌年は貴族院議員に勅選されて、三十年十一月第二次松方內閣の時、蜂須賀茂韶の後を承けて文部大臣の位に上つた、つまり彼は時勢を見るの明があつて、夙に米國に留學したのが主なる出世の因をなしたらしい。

犬養毅

憲政の神様といはれる犬養は、十四歳の時父に死なれて以來、全く自分の腕一つで食つたり勉强したり、自尊心の强き彼は毫も他の援助を受けずして、學を修め智を磨き、終に政治界の大立物となるに至つた、彼は初期の議會より今日に至るまで、選擧毎に故郷より選ばれて代議士となり、明治三十一年文部大臣に任ぜられ、爾來國民黨を率ゐて政界を馳驅せしが、大正十二年遞信大臣となり、同十四年再び遞相となり現に政友會總裁として活躍してゐる。

十四歳にして父を喪ふ

犬養は安政二年四月を以て岡山縣賀陽郡庭瀬に生れた、父は當齋といふ漢學者であつたから、彼は六歳の頃から漢籍の素讀を始めた、當時森田節齋の弟月瀬が家塾を開いてゐたので其塾に通うて敎へを受けることになつたか、月瀬は梁川星巖の門人で詩文を得意とした人、さうして彼は庭瀬の藩醫でありながら、醫者としてよりも學者として推重せられ、其塾には醫學を修業する者一人もなく、總て普通の漢學を習つたといふ風で、犬養は七歳から十二歳まで其

塾へ通つた、然るに父親は犬養を經學者にしようといふ希望を持つて居たので、永く月瀬の塾に通ふのを嫌つて、犬飼松窓の門弟となし專ら經學にいそしました。

ところが犬養が十四歳の時、恰度明治元年の夏に、父親が急病で亡くなつた、假令貧乏は貧乏でも、父親の存在中は何の心配もなく專心勉强が出來たけれども、かうなつて見ると第一家計の問題が頭上にふりかゝつて來た、跡取りの長男は當時まだ十八歳、五人の兄弟があるのだから、從來通り犬養が修業を續けて行くことは到底不可能となつた。

自活の爲に寺子屋を開く

そこで犬養は、これはどうしても自活の方法を立てゝ、兄の厄介にならずに勉强するの外はないと考へた、其頃は浪人者などが、よく寺小屋を開いて、どうやらかうやら食つていけたんだし、犬養は經學を修める傍ら、御祐筆の家塾で手習の稽古をして、塾中一番の能筆だと言はれたものだから、寺小屋ぐらゐは自分でやつていけるといふ自信もあるし、彼は父親の亡くなつた翌年、即ち十五歳の時、門側の一棟で寺小屋を開いた、そして松窓の家塾に通ひ大に勉學

に勵んだ、ところが決心といふものは恐ろしいもので、父親が亡くなつてからの勉強は、奮發心が違ふものだから、自分ながら驚くほどメキ〳〵と上達した、かうなると一層勵みが出て、課業は勿論のこと、課外の書物も手當り次第にドシ〳〵讀破した、そのうちに松窓が倉敷の明倫館に聘せられたので、犬養は其處から一里ほど隔てた伯父の家に寄寓して勉強を續けた。

志を立てゝ江戸に上る

その頃、江戸隨一の經學者として、安井息軒の名が非常に高かつた、そして息軒の塾には犬養の知人も居るしかたがた、是非安井の門弟になりたいとの希望が抑へ難くなつたが、偖江戸へ出るには相當の費用を用意しなければならない、母親の實家は頗るの資産家だが、とても學費など出してくれさうもない、何うしたものかと種々考へた揚句、曩に習字を敎はつた御祐筆の近藤が、小田縣廳の役人をしてゐるのを思ひ出して、其人に相談して見たところが、地祭課の書記ならロがあるといふので、早速伯父の家を去つて其處へ勤めることゝなつた、斯くて彼は幾らかの學費を貯へて江戸へ出で、安井塾へ入るつもりであつたのであるが、給料は月に六

圓しか呉れない、如何に物價の安い時代であつても、これでは貯蓄どころの騒ぎか、下宿料にもあぶないことがあつた。

上京はしたし金は出來ず、彼は勃々たる雄心を抑へて途方に暮れてゐると、先輩の學友某が例の資産家の伯父に話してくれて、三十兩だけ出してくれることになり、商人の姉婿は後はどうにか工夫するから、兎も角も上京したらよからうと言つて呉れたので、それを頼りに愈愈上京の途に就いた。

窮すれども一向通ぜず

明治八年、彼は二十一歳にして始めて東京の地を踏んだ、さうして湯島にある共慣義塾へ入つたが、此塾は賄料は安いが、それはひどい粗食で犬養は閉口したさうだ、然しそれよりも困つた事は學費のなくなつたことで、國を立つ時伯父からは半分の十五兩しか呉れず、頼りにして居る姉婿は放蕩の爲に禁治産、殘金十五兩だけでは何時までも續く譯のものでない、學資の見込は全く絶えてしまつたが、一旦郷里を出た以上は、如何なる事ありとも空しく歸らな

い決心で、親しい友人にも、母の重病以外は何事も知らしてくれるな、と頼んで來たくらゐだから、どんなに苦しくとも其志は枉げないと、全く命懸けで開展策に腐心した。

その頃東京には、英學數學漢學と列べ書きの看板を掛けた小さな學舍が澤山あつたから、大養は一つ小塾の漢學教師を受持つて、その代りに英語を教へて貰はうといふ窮策を案出し、小塾の看板の見當り次第、交換教授を交渉したこと十數軒に及んだが、何處の塾でも取り合つてくれる者がない、自分ではボロ塾の漢學先生には勿體ないと威張つてゐるが、先方では生意氣な田舍書生奴がと思つたのだらう、そんな狀態で彼の困憊其極に達し、國から持つて來た行李を机に代用し、蚊帳の代りに風呂敷を被つて寢るといふ始末、それでも猶學業を續けて行くことが出來なくなつて來た。

原稿料で慶應義塾に入る

流石の犬養も全く弱りぬいてゐると、或日途中で偶然出會したのが小田縣の官吏であつた山口某、どうしてゐるかと問はれたから、實は斯く斯くの次第だと、現在の窮狀を有りのまゝ物

語ると、それでは僕の從兄の林茂吉（後の藤田茂吉）といふ者があるから、一度會つて見てはどうだと言つてくれたので、直ぐ同道して林を訪ねた、當時彼は慶應義塾を出て報知新聞の主筆をしてゐたが、まだ下宿住居をしてゐた、其後一二回會つてゐるうちに、僕は近いうちに家を持つことになつたから、どうだ僕の處へ來ないかと言はれて、早速林の食客となつた、林は犬養が漢學の素養あることを知つて、何か報知新聞に書いて見ては何うかと勸められて、試みに一文を草して見せると直ちに採用せられ、其學識を認められたので時々論說の代作もした。

或時林から、報知新聞に寄稿して其原稿料で慶應義塾に入つてはどうだい、と云ふ話があつたので、その事に決めて、一行何錢と云ふ約束の下に、報知新聞の寄書欄に論說を書くことゝし、その原稿料を學費に充てゝ、明治九年慶應義塾に入つた、さうして日本橋區濱町から三田まで毎日通つたが、往復に相當の時間を空費するのみならず、犬養の外に三人も居る書生に漢學の講義をしてやるので、勉强の時間や原稿を書く暇を潰されるのに閉口して、間もなく塾に寄宿する事となつた。

學問を抛つて從軍記者

ところが報知新聞社から貰ふ原稿料は月六圓くらゐのもので、塾の方は如何に節約しても手一杯である、それから塾の規則として、夜は十時になると消燈せねばならず、その時刻には塾監が見廻りに來るものだから、それ以上起きてることは出來ない、けれども御規則通りにやつて居れば到底間に合はないから、洋燈を机の下へ持つて行つて、火光の外に漏れないやう莫蓙で取り卷き、その中で毎夜遲くまで原稿を書いたものだ。

こんな風で長い間睡眠不足で押し通し、畫は畫で一心不亂に書を讀んで、一生懸命に勉强したから、菓子を買つたり牛肉屋へ上つたりする仲間には入らず、同室の學生にすら偶に口を利くくらゐのもので、一切交際をしないといふ風であつた、また他の學生も、本ばかり讀んでゐる貧乏書生に、强ひて交際を求めるものもなく、犬養は全く孤立の有樣であつたから、勉强には却つて好都合であつたさうだ。

兎角するうちに明治十年の戰役が起つて、彼の學業の上に一頓挫を來した、それは藤田茂吉

から、

『一つ戰地に出かけて戰況を通報しては何うだ、危險を冒して往くことであるから、若し君がやつてくれるならば、社主に交渉して、歸つてから後の學費は、社から毎月十圓づつ、卒業まで出させることにする』

といふ相談を受けた、犬養は喜んで承諾し、從軍記者として戰地に赴くことになつた。

戰地の活躍と生きた通信

戰地に着いたのは十年三月中旬で、田原坂の戰爭最中であつた、ところが、軍人と官吏以外の者は絕對に交戰地帶へ入ることを許されない、幸ひ臨時熊本縣令事務取扱として、內務省から出張してゐた石井といふ人に賴んで、熊本縣御用係といふ名義だけの辭令を貰ひ、それで交戰區域に入ることが出來た、それから間もなく軍人に知己が出來て、野津旅團に居た。

に起臥することゝなり、熊本城連絡まで野津鎭雄少將の本營

各新聞社から待派された記者は、福地櫻痴居士を始めとし、何れも一流どころの大記者揃ひ

であつたが、それだけに平常贅澤な紳士生活に慣れて居り、戰地の不自由には餘程まゐつたものだが、犬養は貧書生の窮乏に慣れてゐるから、一向平氣であつたのみならず、二十三歳の血氣盛んなる時代のこととて、砲烟彈雨の中を縱横に駈け廻り、或時は兵士等と共に露營をやつたり、時には夜襲にも加はるといふ有樣で、戰地の實況を審かにし、所謂活きた材料に依つて軍事通信をしたものだから、彼の從軍記は世人の大好評を博したといふ、斯くて戰地に在ること約一ケ月、四月中旬熊本城の包圍が解けると同時に、社命に依つて一旦歸京した。

軍人志願と谷將軍の懇諭

此時犬養は、自分は將來軍人として身を立てようと思ひ立つた、元來彼は其少年時代に長州征伐などのこともあつて、世の中は再び元龜天正のやうな時代になるだらうと考へ、孫吳の兵書は無論の事、日本流の兵書を片ツ端から讀破して、只管乘ずべき機會を狙つて居たのである、然るに此度戰地に派遣されて、實際に戰爭の有樣を見るに及び、戰爭などいふものは素人でも出來るものだといふ確信を强めた、と云ふのは當時戰地に於て俄に軍人を志願し、相當に

用ひられた人が幾らもあつたからである、そこで犬養も一ツ軍人になつてやらう、死を恐れぬ勇氣さへあれば、誰だつて軍人になれる、それに學問だつて智慧だつて普通の軍人には負けないといふ自信があつたから、屹度立派な軍人になれるといふ腹であつたらしい、それに藤田の友人に沼間守一といふ人があつて、屢得意の戰爭談をして聽かせたものだから、軍人志望熟が一層高まつたのである、そこで犬養は沼間に自分の志望を打開けると、大に贊成して早速谷干城に紹介狀を書いてくれた、沼間は土佐藩の陸軍に洋式教練を敎へた關係から、谷將軍とは懇意な間柄であつた。

間もなく犬養は再び社命を受けて戰地に特派されることゝなり、軍人志望の彼は、以前と違つて喜び勇んだ、彼は谷將軍に面會し沼間の添書を出して熱心に志願した、すると將軍は、

『それは至極結構だが、戰爭は永く續きはしない、もう直きに濟んで了ふ、戰爭が濟んでは折角軍人になつても仕方がないから、矢張り學業を繼續した方がよからう』

と懇に諭された、而も將軍は、それ程戰爭が好きならば、吾輩に從つて戰爭を觀るがよからうとまで言つてくれるので、彼は軍人志願は中止したが、將軍の本營に起臥して、城山陷落

まで厄介になりながら、報知への通信を書き送つた。

報知と別れ飜譯文の添削

さて戰爭も愈々濟んだので歸京した、犬養は、また厄介な問題にぶつかつた、それは前にも述べた如く、從軍記者としての任務を果した上は、卒業までの學資を續けるといふ報知社との約束の下に、學業半ばにして戰地に赴いたのであるが、歸つて來ると報知社では、學資は續けるが、その代り月三回づつ論說を書いてくれといふ、それでは約束が違ふけれども、藤田の顏に免じて已むなく承諾した、ところが半年を經たぬうちに、藤田から更に月十回論說を書けといふ命令である、斯うなつては最早我慢が出來ない、直接社主と談判すると云つたところが、藤田は大に怒つて、自分を差措いて直接談判とは不都合であると言ふので、犬養も負けてはゐず、今日限り報知社との關係をおことわり致すと、到頭喧嘩別れになつてしまつた。

そこで又復た學資を得るの途が絕えて、一ケ月くらゐは、友人に借りたり、いろ〳〵苦面して支へたけれども、それから先きが何うにもならない、流石の犬養も大に閉口してゐるところ

へ、横濱商業學校の校長が、飜譯文の添削をやる仕事を見つけて來て呉れた、洋學が盛んになると共に、漢學の出來る學生が段々少くなつて、飜譯はあるが漢字も知らず、文章も拙い、といふわけだから、其れを添削するのである、二十字詰十行で一枚の添削料が二十錢乃至二十五錢といふ約束であつたから、犬養は實に有難い仕事だと喜んだ、彼は上京以來一日として安逸を得たことがない窮境にあつたが、此仕事によつて彼の窮狀も打開せられ、學費の心配から免れて、安心して勉强することが出來るやうになつた。

義塾をやめて新聞創刊

斯樣にして、上京以來國許からは終に一錢の學資も貰はず、獨力を以て學業を續けたが、卒業間際になつて、フトしたことから學校を廢めてしまつた、それはどう云ふわけかといふに、慶應義塾で犬養の一番困つたのは數學であつた、勉强の時間さへあれば、數學だつて他に負けない自信はあつたが、何を云ふにも自ら働いて學資を作るのだから、それが爲に多くの時間を費さなければならない、即ち數學を勉强する時間がない、そこへもつて來て、數學が得意

の伊藤欽亮が居て、どうしても競爭することが出來ず隨分困しんだものだ。

讀書は漢學の素養があるから至つて樂なもの、いつでも優等の成績であつた、その頃には試驗の成績に依つてドシ〳〵進級させたものだから、讀書の方で進級するのは容易いことだが、數學の方は突然上級の科目へ入つては出來べき筈がない、之が爲に餘計に骨が折れるので全く弱りきつてゐた。

試驗毎に讀書は最高點を得て、彼は大に心に誇つてゐたが、第二級時代の大試驗に初めて讀方で一點負けた、入塾以來一度も負けた事のないのに、唯一點でも負けたといふ事が、ひどく犬養の自尊心を傷けられた氣がして、彼はそれきり義塾を廢めてしまつた、そして豐川良平と共に『東海經濟新報』を創刊したのである。

塾中で平民のあばれ者

當時在京の學生は、十中の九までが士族の子弟であつたから、机の側には太刀を置くか、さもなければ行李の中に脇差か短刀ぐらゐは屹度藏つて置いたものだ、從つて平民の子弟といへ

ばまるで問題にされない、又實際に於て討論でも喧嘩でも、先に立つ者は士族の子弟に限つてゐて、平民は自ら屏息したものである。

ところで義塾の學生三百餘人の中に、平民の暴れ者は犬養と牛場卓造の二人しかなかつたので、福澤先生は不審に思ひ、段々と調べて見ると、牛場の家は帶刀を許された家柄であり、又犬養の家も、小藩ながら板倉家の家臣が事情あつて仕途を斃し、猶士分の取扱を受けた家柄だといふことが判つて、初めて成程と合點されたといふ。

堂々たる報知の論說記者

犬養は東海經濟新報の主筆となつて、大に保護貿易論を唱へ、自由論者の田口卯吉などと論陣を張つた、我國に於ける保護貿易論の先驅は實に犬養であつた、彼は其時既に經濟論者として重きを爲した、さうして明治十五年まで四年間雜誌記者生活を送り、大隈重信が改進黨を組織し、其機關新聞として報知新聞を買收すると、犬養は之に入社すると同時に經濟新報を廢刊した。

嚢には學資を得んが爲に報知社の一員となつてゐたが、今度は堂々たる論説記者として同社の重位に就いた、其時代に於ける同社の有力な顔觸は、矢野文雄を筆頭に、藤田茂吉、犬養毅尾崎行雄、箕浦勝人の五人であつた、此五人は報知の論説記者として却々威張つたものだ、ところが當時の五大新聞中、其第二位を占めてゐた報知新聞は、政黨の機關となつてから段々賣行減少で、經營頗る困難を感じて來たので、犬養は一方に侃々諤々の議論をやりつゝ、他方に紙代印紙代の工夫をして矢野を援けた、然るに居ること一年ならずして、彼は報知を去るの餘儀なき次第に立至つたのである。

朝野新聞に蟄す事八年

再び報知と緣を切つた犬養は、明治十六年四月遠く羽後の秋田へ去つた、これは改進黨の機關新聞として生れた秋田魁新聞に、主筆となつて入社するに至つたからである、彼は魁新聞紙上に、田舍には勿體ない名文を戴せて、東北の文壇に聲譽を擅にしたが、同時に狹斜の巷に出入して、名妓お鐵と艶名を聯かした、しかし犬養は決して遊治郎ではない、天も亦何時ま

でも此偉大なる人物を山間僻地に止めて置かない、彼は其年の十一月お鐵に別れを告げて東京に歸り、三たび報知社に其姿を現はすことゝなつた。

翌十七年、成島柳北の後を承けて、朝野新聞の經營と執筆と兩ながらやつてゐた末廣鐵腸に招かれて、犬養は朝野新聞に入つた、朝野新聞は五大新聞の一つであつて、柳北と鐵腸が相踵いで椽大の筆を揮つたものだが、犬養が入社すると尾崎行雄も來て、それが爲一層新聞の聲價を高めた、蓋し犬養が新聞記者として其精力を傾倒したのは此新聞であつた、八年の長い間彼は朝野新聞に盡したのである、然し彼は新聞記者として一世を指導するのは其本領でない、彼の本領は政治家となつて其道を行ふにあつた、故に彼は改進黨員として筆の外に舌を以て活動した、ところが彼の舌の活動の盛なるに反比例して、社運は段々に衰へ來り、明治廿四年の末遂に沒落の悲運に逢つてしまつた。

朝野は沒落し民報は廢刊

朝野新聞は沒落した、八年間の盡力も水泡に歸して彼は感慨無量、されど元來不撓不屈の精

神に富める犬養は、明治二十五年に復たもや一社を立てゝ、民報なる新聞を發刊した、しかし營業本位にあらざる新聞は今日といへども其維持が困難であるのに、況んや當時僅の部數しか發行しない其上に、議論本位と來てゐるのだから、どうして維持の出來るものでない、民報は一年にして遂に廢刊の已むなきに至つた、而して是れが犬養の記者生活に於ける最後の幕であつた、當時世間には既に營業の爲に新聞を作つた者があつた、然るに彼はそれをしなかつた、彼は議論の爲に新聞を作つたのである、己れの意見を發表する爲に作つた、眞に言論の機關として作つたのであるから、遂に倒れるのは理の當然である、とは云へ其倒れ方は名譽の倒れ方である、男らしい最期であると、彼自らも窃に之を誇りとしてゐるらしい、言論本位で度々新聞をブツツブした或記者が、一日犬養を訪ふた時、彼は曰く『新聞をツブす間は賴もしい』

侯爵 蜂須賀茂韶

德 幕府の下には三百の大名があつた、然るに維新後舊大名から出た大臣は僅に三人で、百人に一人の割合とは餘りに情ない、世人が舊大名を馬鹿殿樣と呼んだのも必ずしも無意味でないやうだ、三名とは誰ぞ堀田正養・岡部長職、蜂須賀茂韶である、而も大名三大臣の中に在つて、門閥と云ひ富貴と云ひ、其首位に坐するものは蜂須賀である、彼は志を立てゝ海外に遊學すること七年、歸朝して明治初年の外交に力を盡し、後文部大臣となり貴族院議長となり樞密顧問官となつたが、貴族院議長としての名譽は嘖々として今尙人口に膾炙されてゐる。

由緒ある家系と祖先の戰功

蜂須賀は弘化三年八月、江戸大名小路の藩邸に生れ、安政二年十一月、十歳にして世子となり名を千松丸と改めた、越えて萬延元年三月元服するに及び、將軍家茂より偏諱を賜はつて、茂韶と稱し、從四位上に叙し、侍從兼淡路守に任ぜられた。

抑も蜂須賀家は遠く淸和天皇の皇孫より出で、鎭守府將軍源經基の裔、蜂須賀修理大夫正勝の男、阿波守家政の後である、正勝は卽ち蜂須賀小六の名によつて知られた野武士で、木下藤吉郎の手に屬して戰功を樹てたことは、世に隱れない事實である、其子家政は少年の頃より武勇を以て稱せられ、十三歲にして姉川の戰に初陣をしたのを始めとし、織田右府の麾下に

隨ひ各所に戰功を奏し、天正十三年秀吉の四國征伐に從つて長曾我部元親を降してから、阿波國を賜はつたものである、正勝の死後封を襲いだ家政は、九州、關東、朝鮮の役にも參加し、慶長五年の役には、家政の嫡子長門守至鎭が東軍に屬して關原に戰ひ、大阪陣を經て元和元年功に依り淡路一國を加增し、其所領二十五萬七千石となり、至鎭より十三世を經て茂韶に及んだ。

征長の不可なる旨を献言す

蜂須賀が侍從兼淡路守に任ぜられた年に、彼の櫻田門外の變があつて、江戸八百八町の人心動搖し、何時如何なる變時が起るかも知れない狀態になつたので、父の齊裕は彼に勸めて歸國させたが、間もなく文久二年十一月京都に召され、宮闕守護の命を拜した、斯る間に廟議攘夷のことに決したるに依り、彼は更に朝命を受けて、淡路の岩屋及び洲本の海岸防守の任に當つた、偶堺町御門の變があつて、京都は漸く騷擾の兆を呈するに至つたから、蜂須賀は急に兵を率ゐて宮闕の守護に赴いたが、朝議漸く定まつたので暇を賜ひ歸國した。

元治元年左近衛權少將に任ぜられ、間もなく幕府征長の軍を起すに當り、父の齊裕に代つて之に參加し、慶應二年朝廷列藩の意向を聽かんが爲、諸侯を召された時も、父に代つて上洛し二條城に於て將軍慶喜に謁し、征長の事の不可なる旨を献言するところあつたが、やがて其說は用ひられて、長州征伐の事は沙汰止みとなつた。

領民の言に聽き內政の刷新

蜂須賀は夙に勤王の志を抱き、能く家臣の言を容れ、皇室を奉戴して其王化を助け、進んで藩屏の誠を致すべく、大に努力するところがあつた、偶鳥羽伏見の一戰に幕軍が敗れて、慶喜が江戸に還るに及び、朝廷は近江附近に於ける德川の領邑を沒收し、是れが管理を蜂須賀に一任した、此時高松藩が、四國に於ける佐幕黨の急先鋒として反旗を翻したから、朝廷は四條中納言に勅命を下し、是れが征討の任に當らしめた、時に蜂須賀は他藩に率先して兵を高松の國境に進め、示威運動を行つた爲に、高松藩は形勢の非なるを悟つて、戰はずして降るに至つた。

これより先、父齊裕は明治元年正月病歿したが、高松城が陷ると蜂須賀は舊封を襲ぐことを許され、同時に宮城宣秋門の守衛を命ぜられ、議定兼刑法事務局補に任命し、阿波守に任じ幾くもなくして從二位權中納言に陞任した、それから同年三月奥羽戰爭の第二軍に從ひ、家臣をして各地に轉戰せしめ、或は神戸を警備し、或は山科行幸に從ふ等、兵馬倥偬の裡に日を送つて、又故國を顧る遑もなかつたが、戊辰の後全く平定するに及び、彼は賜暇して國に歸るや、封内一般の庶民に向ひ、

『朝廷既に言路を洞開し、萬機公論に依つて裁決せん事を仰せ出でられし上は、政治の得失民人の疾苦、遠慮なく申出づるを忠とす』

との布令を發し、努めて領民の言に聽き、大に内政の刷新に努めた。

ハイカラ殿様大に持てた

明治二年朝廷に太政官を置かれると共に、蜂須賀は本官を以て民部官知事を兼ね、尋で東京宮城内八門の守衛を命ぜられ、間もなく德島縣知事に任じ、且つ朝旨に基いて、北海道日高國

新冠郡を管することになつた、明治四年八月少議官に任ぜられて居を東京に移し、翌年一月、德島縣大參事小室信夫等を携へて歐洲遊學の途に上つた、當時華冑の人にして自ら進んで泰西の新文明を研究すべく、志を立てゝ海外遊學の途に就くが如きは、實に異數のことゝして人人の目を欹立てしめた。

斯くて英京倫敦に留まること七年にして、明治十二年一月歸朝するや、歐米の事情に通じ、且つ交際術にも通曉してゐるところから、國賓の接伴員を仰付けられ、獨逸や伊太利の皇族、グランド將軍等の來遊には、歐洲仕込みの腕前を見せたものだ、又外務省御用掛、關稅局長等、苟も外國との折衝を要する役向については、悉く其局に當り、更に特命全權公使として佛國に駐劄し、葡萄牙、瑞西、白耳義四ケ國の公使を兼ねる等、西歐地方に對する我が國の外交は殆ど彼一人によつて代表さるゝ觀を呈した。

伯爵 山本權兵衛

山本は薩摩隼人の典型である、稜々たる氣骨と、潑溂たる才幹を具へ、兵學校を出でゝ海軍省に入るや、

漸次昇進して第二次山縣内閣の海軍大臣となり、引續き第二次伊藤内閣、第一次桂内閣の三代を通じて、前後八年間其職に留まり、海軍部内の革新に努力し、大に其才腕を認められた、而して後自ら内閣を組織することと二度に及んだが、一たびはシーメンス事件にて味噌をつけ、一たびは虎の門事件に祟られて、何等の抱負經綸をも施す能はざりしは氣の毒であつた。

父の施せるスパルタ式教育

山本は薩摩隼人の血を受けて、幕末尊攘論の沸騰せる時代に、鹿兒島城下に產聲をあげた、父親は『負けるな、死んでも勝て』との教則に依つて、飽く迄剛毅勇敢なる人物たるべく彼を養成した、寒氣肌を刺す嚴冬の朝、幼き權兵衛を井戸端に連れ行き、裸體にして端坐せしめ、前夜より汲み置きの水の氷を叩き割つて、手桶を以て頭上より數杯浴せかけ、ついで道場に連れ行き、打つ、蹴る、擲るの荒訓練を施し、然る後朝食を與へるを日課とせし如き、以て如何に父の教育法のスパルタ式たりしかを想はしめて餘りがある。

幼き時から斯の如き荒訓練を受けて育つた山本は、十二三歲の頃には、既に膽と腕とを誇る薩摩健兒中に傑出し、名題の惡太郎となつたが、年十六にして海事兵學寮に入つた頃には、益

益其の本領を發揮して、忽ちにして『喧嘩權兵衛』の名が校内を風靡するに至つた。

機智を發露した喧嘩の仲裁

或朝寮生が二人、炊事場でドタンバタン取ッ組み合ひを始めた、ソレ喧嘩だと云ふので寮生は大勢集つて來たが、喧嘩の勢が餘りに猛烈なものだから、傍杖でも食つては大變だと、誰一人仲裁する者も無い、と、そこへヒョツコリ顏を出したのが喧嘩權兵衛さんだ『山本なら何とか仲裁することも……』と思つたのか、皆なが言ひ合はしたやうに途を開けてやると、山本は突然飛び込むが早いか、組合つてゐる二人の頭をポカ〳〵ポカ！　これぢや仲裁るどころか喧嘩を買つて出たやうなものだ、二人が愕いて頭を抱へながら双方へ別れると、傍から山本は取つて付けたやうに笑ひ出したものだから、サア二人は怒つたの怒らないの『ヤイ、こらッ、山本！』『物をも言はず他人の頭を毆つた上に、ゲタ〳〵笑ふたア何事だッ』『ぢや俺どんが今毆いたのが惡いのか』『あ、あたりまへよ！』『ぢや貴公等放校處分になつても構はんと云ふのぢやな』『な、なんだと！』

『双方とも眞赤になつて激しい掴み合ひ、そんな時に溫和しく理窟なんか言つて、仲裁て見たところで止す譯のものぢやあるまい、と言つて喧嘩は寮の禁物だ、このまゝにしとけば無論放校處分……、それぢや可哀相ぢやで、俺どん、喧嘩兩成敗の意味で、今、有難涙のこぼれるやうな目覺しを一つどつ𠀋かしてやつたのぢやないか、それが惡いと云ふんなら、今度は俺どんが對手になつてやる、さア凸凹、何處からでもかゝつて來いッ』

言ひざま兩の拳にパッ〳〵と唾液の肥料をくれて、ヌッと突き出したものだから、喧嘩した二人は膽を潰して逃げ出してしまつた。

糞尿の賣溜金で慰勞の宴會

山本は雄辯家で、五分の蹠味と、五分の蠻調とを帶びた薩摩辯で、音吐朗々、右拳を縱横に揮ひ、議政壇上に獅子吼する時の如き、議員は何れも頭上を壓せられ、膽を奪はるゝの觀があつた、斯の如きは一には彼の天性にも依るのであらうが、その幼時に於ける家庭教育に負ふところも亦決して尠くない。

彼が海軍兵學寮に居た時分には、雄辯といふ利器を振り廻はして、教員いぢめや賄征伐、小使困らせなどには何時も發頭人參謀役となつては、雄を校内に擅にしたとか、それに就いて面白い話がある、中牟田倉之助が校長であつた時、校内の汚物は殘らず賣拂つて、金にして置くといふ仕來りであつたが、その金が積り積つて相當の金高になつてゐた、ところが其の當時は會計法なども完備してゐなかつたから、其の金を何うしようなどとの處分法も定めてある筈もなく、職員等が寄ると觸ると處分方の評議が出た、そして結局、教員連中の慰勞會を開いて、飲んでしまはうといふ事に定まつて、或晩教員一同は、兩國の料亭中村樓に會合して、盛んに飲み始めた。

校長を征伐した痛快な喜劇

寮の小使から此の事を聞いた山本は、直に廊下に駈け上つて『どいつも此奴も集まれッ』と蠻聲を張りあげて呼はつた、寮生一同は其聲を聞き、『ソラ喧嘩權兵衛が呶鳴つてゐるぞ、喧嘩はどこだ』と勢ひ込んで山本の周圍に集まつた、山本は靜に一同を制し、

『今日は喧嘩ではない、聞けばおい達がたれた糞を、おい達には一言の相談もなく、校長始め職員一同が勝手に賣拂ひ、その金で忘年會をしちよるといふことだ、不都合千萬ちやケンこれより現場へ押しかけて談判をせにやならん、酒の飲みたい奴はついて來い』

と言ひながら、寮の裏手からボートを仕立て、その中に糞尿を詰めた樽を積み、一同を率ゐて中村樓に着くと、糞樽を座數に擔ぎ込ませ、驚き呆れる校長に向ひ、

『校長閣下、聞けばおい達のたれた糞を飲んぢよるさうな、それならまだ大分寮に殘つてゐたから、序に飲んでいただかうと思ひ、わざ〳〵舁ぎ込みました』

と言ひながら、杓を揮つて樽の中を掻き廻はした、此の奇襲には校長も大に辟易して、

『それは御苦勞ぢや、しかし其れまでも飲まなくとも、まだ此處にお前たちのたれた糞が澤山殘つてゐるから、骨休めに十分飲むがよい』

と、忽ち兜を脱いだものだから、山本始め一同の寮生は、待つてゐましたとばかりに牛飲馬食、大荒しに荒しぬいて、凱歌を奏して引上げたとは、隨分ひどい惡戯もの。

小僧の爲に仇を報じた物語

山本の全身は、斯くの如く蠻骨と奇骨とで組み立てられ、常に垢面蓬髪、眞つ黑の顏に目ばかり光らせ、ところ〴〵紙撚で括つた短い袴の下から、無造作に毛脛をのぞかせ、俎大の薩摩下駄を引きずつて横行濶歩してゐたが、その稜々たる蠻骨の中に、温かい任俠の氣を宿し、弱者に對する態度の頗る溫情的であることは、寧ろ不思議なくらゐであつた。

或夏の夕方の事、散歩から寮に歸ると、炭小屋の前で一人の小僧がシク〳〵と泣いてゐる、これを見た山本が不審に思つて其の譯を聞いてみると、これは寮に出入する酒屋の小僧で、注文品を屆けに來る途中、一人の車夫に突き飛ばされて膝に負傷し、出血が止まらないので泣いてゐるものと判明した、と聞いた山本は持前の俠氣を出して、弱い者をいぢめて知らぬ顏をしちよるやうな奴は棄て置けない、一緒に來いとばかり、無理に小僧を連れ出して、負傷せしめた車夫を尋ね出し、人車諸共川中に投込み、小僧の爲に仇を報じてやつたことがある。

女郎屋の二階に田舍風の女

山本が士官學校を出た頃、南品川の三丁目に村田屋といつて、海軍士官の合宿所があつた、東京市内に家を持つてゐない連中は、みんな此家の表二階に寄宿してゐたものであるが、前年海軍寮を卒業して、一年餘りの久しぶりで明治九年七月、再び品川に歸つて來た山本は、矢つ張り此家に宿を取つてゐた。

すると此折、村田屋の直き向ひに箸屋といふ女郎屋があつて、そこの二階と山本が寄宿してゐる室とは、僅か道路一筋しか離れてゐないので、向ふの樣子は何から何まで殘らず分る爲め年少氣鋭の若人將たち、寄ると觸ると女郎の月旦、罪なき戯言に憂さを晴すを常としてゐたが、暴れ者と名の通つてゐたのに似ず、山本ばかりは友の話に耳を貸すさへ好まないくらゐであつたから、彼一人は何時も除けものにされてゐた。

ところが其後間もなく、向ひの二階に一人の美人が顯はれた、まだ田舍風の拔けないところもあつて、餘りに人馴れないらしい擧動が、何となく奥床しく、海千山千の、人を人とも思はぬやうな女郎の中に、一際目立つて見受けられたので、忽ち若い人達の話の種となつて、彼女は親戚から客にでも來てゐるのだらうとか、田舍から新たに抱へて來た代物だらうとか、いろ〳〵の評判をしあつて居たが、然し何れとも見分けかねてゐると、その娘は幾日經つても見世へは出ず、さうかと言つて又他家へ行く樣子もない、人の噂も七十五日、もう此頃は彼女の話も段々と薄らいで來た。

電光石火的に初物の占領

ところが意外なる珍劇は、意外なる人物によつて演じられた、それは外でもない、山本と彼の娘との關係事件である、女にかけては寧ろ冷淡であつた山本の此の行爲は、蓋し何人も目を見張る意外の出來事であらねばならぬ。

抑も事の起りは、前にも記した通り、他の連中が山本一人を除けものにしたのに基いたもので、我こそ先陣の功名を博せんものと、私に競爭をしてゐる連中の有樣を見た山本は、例のきかぬ氣から、自分一人を除けものにした腹癒せに、何かなして彼奴等の鼻を明かしてくれよう

と、此處に奇智をめぐらした末、或夜ひそかに箸屋の裏口から忍んで登樓し、遣手婆に新造に鼻藥をかゝせた上、主人にも承知させて、山本は彼の別嬢を我がものとしてしまつた、これぞこれ、後日の總理大臣夫人と呼ばるゝ光榮に浴した登喜子其人であるのだ。

世にありふれた身賣の經緯

登喜子は新潟縣蒲原郡菱潟村の百姓、津澤鹿助の三女で、萬延元年四月に生れ、明治十年十二月、十八歳の折、山本が少尉時代に公然結婚式を擧げたのであるが、登喜子が品川の箸屋へ賣られるに至つたまでの悲劇をば、茲にかいつまんで記してみよう。

登喜子の父鹿助は、菱潟村の水呑百姓で、人の田を耕す其の日暮し、もとより餘裕などのあらう筈もなく、やつとの事で一家數口を糊してゐたが、不幸にも彼は風邪が原因で重き病の床に就いた、さなきだに火の車の遣りくり算段で、漸く其の日を送つてゐた貧乏世帶に、稼人の父が病氣となつてからは、入る金はパツタリ止つた上に殖へるものは借金ばかり、藥の料さへ碌々に拂ひかねる悲慘な境遇を、見るに見かねたお登喜は、こゝにお定まり通りの身賣りの決

心、幸ひ國許から品川へ出て、女郎屋を營んでゐる箸屋の主人が、新妓抱へに來て居たから、そこで早速話し込んで相談だけは纏つたけれども、本尊のお登喜が年齡不足で、身の代金の幾分だけを當座に受取り、後はいよ〳〵突出しの日に渡すといふことになつて、彼女は箸屋へ見習ひやら手傳ひやらの形で身を置くに至つた次第である。

登喜女連れ出しの劇的シーン

話は前に戻つて、山本は男と生れた意地づくには、是非共お登喜を手活の花と眺にやならんと、飛んだところに心を突込み、智慧を絞つていろ〳〵と其の方策を考へた、そして一策を案じ出して手を拍つて喜んだが、さて其れを實行するには相棒を必要とする、それを探すのに又一苦勞、ところが此時實弟の盛實が東京に來て、自分と一緒に村田屋の二階に居たので、これだ〳〵と片腦萬事を打明けて手筈を定め、機會の到るを待ち構へてゐた。

すると或晩のこと、非常な雷雨があつたが、その土砂ぶりの眞夜中時分、黑裝束に身を固めた一個の曲者、箸屋の擔に覗ひ居るよと見えける程に、忽ち高塀をスル〳〵ツと攀登つて、見

越の松に手をかけると、ヒラリとばかりに難なく二階へ忍び入つた、すると二階では豫て用意がしてあつたものか、甲斐々々しく身を裝うた一人の乙女、これを見るより懷かしさうに走り寄り、一寸何か耳語けば、曲者は無言のうちに其手を取り、以前の場所へと引返し、乙女を抱へて松から塀へと現はれると、下にも怪しい黑影あり、上なる曲者の合圖を聞いて合點とばかり、おろす娘を受取つて、何處ともなく逃げ去つたが、後に殘つた曲者は、闇に四方を見廻して、人目のないのに安心したらしく、悠々として立去つた。

この曲者こそ言ふ迄もなく山本權兵衛で、塀の外に立つてゐたのは卽ち舍弟、後の海軍大佐太田盛實であつたのだ、斯ういへば連れ出された娘は、お登喜であることは勿論の話。

四十圓遣つて芽出度く嫁御

細工はりう〳〵、巧く仕上げた連出の一件、されど困つたのはお登喜の置き場だ、止むなく其の夜は或所で明かしたが、翌日になつて赤坂溜池邊の、或下宿屋へお登喜を隱しておいて、兄弟二人は何喰はぬ顏して村田屋に轉がつてゐた。

すると箸屋の主人は、翌日になつて山本の所へ談判に來た、誰に聞いても山本の所業にきまつてゐるから、主人は火のやうになつて吹鳴り込んで來たのだ、ところが山本は一向騷がず、御推量通り連出したのは我々に相違ない、が、しかしそれはお登喜の賴み故で、娼妓でもない身を客に出されるやうでは、此の行先が心配だと涙を流しての願、聞いた以上は此方も男の意地、實は非常手段に訴へて連れ出したのだが、それが惡いと云ふなら勝手になさるが宜しいと針を含んだ挨拶に、箸屋の主人もハタと答へに行詰つた。

それも其筈、お登喜だとて素々女郎になるは承知で來たなれど、其頃川路警視が警察權を握つてゐた折柄とて、娼妓についてもなか〳〵八釜しく、未成年者の營業は嚴禁されてゐた、それでお登喜も已に汚さるべき危い身を、幸ひ法律のお蔭で一時支へられてゐたのだが、山本の賴み默止し難く、算盤づくで情の切賣、一夜の客を許したのが抑も箸屋が一生の不覺であつたのだ。

そこを附込んだ山本の返答に、女郎屋の主人は傷持つ足の、悄然として引取つたのを、山本が知己の堀某といふもの、双方の間に入つて、ナーニとばかり强情を張る山本を宥め、別に

身の代とはせず、唯越後から連れて來たお登喜の旅費と見なして四十兩、箸屋へ渡して事落着改めて堀が媒妁人となつて、四海波靜にの謠と共に、今迄の縺れは奇麗にをさまつた。

將官の一言に深く反省す

兵學寮を出てから海軍省に入り、獨特の手腕と才幹とを認められて、漸次昇進し大尉となつた時、獨逸留學を命ぜられたが、亂暴なことは依然として變りが無い、獨逸は名に負ふビールの本場、時々ビール會などが開かれる、すると山本はそれを好き荒らし場として、一夜を飲みあかすくらゐは珍しくなかつた、そんな有樣だのに、能くまア彼れほどの亂暴男が、一回も決鬪をしないだけが不思議のやうに思はれてゐた。

或日のこと、獨逸將官某が、當時駐劄の我が公使を訪れて、四方山の話の折に山本の噂が出た、將官は先づ公使に向つて『山本さんはなか〳〵の才物であるが、惜しいことには未だ學問の値打を知らぬと見える、今日の軍事が如何に學術を基として立つかといふことを悟らぬと見える、何うも身を入れてやらないのが惜しいものです』と語つた、此の言葉が何時しか

山本の耳に入ると、大江匡房もどきの此の言葉が、如何に太郎ならぬ權兵衛を刺戟したか測り知れない、彼は飜然として悟るところあり、それ以來斷じて酒を禁じ、奮然として研學に精進し、其の後は放蕩の風もなければ、酒も飲まず煙草も喫はぬやうになつたとは、流石に薄志弱行の徒を愧死せしむるに足る傑物の操行として、感ずるに餘りあるではないか。

男爵 山田信道

裁判官から縣令となり、福島大阪の各知事を經て京都府知事となつた、此間功勞を以て勳一等に叙し、次で男爵を授られた、彼れは政黨政治には何等緣故を有たなんだが、鹿兒島出身の大官連とは昵懇であつた處から、三十年松方内閣の樹立に際し、松方に取り入つて一躍農商務大臣とはなつたが、山縣内閣の折に會計檢査院長で終つた。

彼の幼名と國典の熟究

熊本藩出身中の硬骨漢として知られてゐた彼れは、少壯時代にも矢張り其通りであつた、幼

時は名を十郎と呼んで、長じては國典などを好んで修讀し、水戸派の國學に心醉した、當時は尊王攘夷論が頭擡して來たので、彼れも藩の勤王家であつた住江甚兵衛、小坂秋月等と共に、島津三郎を、盟主として切りに尊王攘夷を主唱し、鹿兒島に赴いて島津家の參謀有馬謙助と結托し、そして大に藩論を喚起した。

處が偶々島津氏が伏見寺田屋の變に遭ひ、藩論は顚覆して彼れも其處に居堪らず、鹿兒島を脫して長州に走り、同地方の攘夷黨と相結び、盛んに尊王攘夷論を鼓吹した。

幕府から五年拘禁の苦嘗

其後文久二年彼れは親兵に選ばれて、隊長住江甚兵衛と京都に上り、禁闕を守護したが、薩摩と會津の兵が上洛して長州の兵を追つ拂ひ、薩會二藩の兵が禁闕を守る事となつたので、長州藩の兵は之に抗して發砲したのが、運惡くも砲彈が禁闕に飛んだといふので、爲に幕府は長州征伐に兵を出し、一方長州藩主の毛利公は罪を得るに及び、七郷と共に長州に下り、續いて他の藩士と拘禁せらるること五年、此間非常な苦を嘗めた。

硬骨が禍して左遷せらる

明治二年召されて彈正少忠に任ぜられた、硬骨漢の彼れは江藤新平が刺客に襲はれ奥を棄て遁れたるを、卑怯なりとして之れを彈劾した、此時岩倉具視等が調停の勞を執つたが、彼れ信道肯かばこそ、却つて之れが禍ひの種となつて江刺縣の權知事に左遷されてしまつた。

又も牢獄六ケ年獄中奇談

其後廣澤參議暗殺の大騷動が持上つた、之れが恰度明治の四年で、彼れは暗殺組に加はつて居るとの嫌疑で、免官されて位記返上を命ぜられた上に獄に繫がれること六ケ年の長年月、釋免後は司法に出仕する事になつて、彼れは再び浮び出た。

彼れ獄中に居た時の事だが、面白い逸話がある、例の剛情男の事とて獄吏などの命令には少しも耳を傾ければこそ、或日の事獄吏の命令に從はぬといふので、獄吏は彼れを鞭にてたゝきのめした、處が彼れは叩かれる儘に何を考へて居つたか、陰莖を直立させて居たので、流石の獄吏も呆れ返つて其儘打擲を止めたとか。

子爵 河野敏鎌

幕末に際して土佐藩論の因循姑息、或は佐幕に傾き或は尊王を唱ふる時に當り、敢然尊王論を標榜して國を脱し、王事に盡したるも志半ばにして永久牢舍の宣告を藩より受けたが、其明治政府の人となるに及んで、佐賀の亂に於ける一味徒黨を審理して名聲を博し、更に西南戰後、亂徒四萬三千人の獄を斷じたる名司法官であつたが、後農商務、司法、内務、文部の各大臣に歷任した。

其の節を變ぜざる尊王論者

河野は土佐國高知の城下に生れ、通稱を萬壽彌と云つた、文久元年修學のため江戸に上つて安井息軒の門人となり日夜研學に餘念なかつた、此時同藩士なる武市半平太も武術修業の爲に江戸へ來て居たが、武市は諸藩の名士と交つて、天下の時勢を察し大に雄飛せんものと勤王の同盟を結んだので、河野は率先して此同盟に加はり、同年九月武市と共に國へ歸つて、同志に檄を飛ばしたところが、忽ち數百人の加盟者を得た。

文久二年公武合體論者の參政吉田東洋が殺されて、土佐の藩論は忽ち勤王討幕主義に變じ、藩主は京都に上ることゝなつたので、河野も之れに扈從して入京したが間もなくして國へ歸つた、そして下士五十人組の一員となつて、容堂公の身の上が氣遣はしいから、護衛の爲に入京すると屆け捨ての上、國を脱して再び京都に着くと、同志と共に尊王攘夷のことに奔走した。

同盟を作つた罪で投獄さる

文久三年山内容堂が歸國すると藩論が又復た一變して佐幕に傾き、武市半平太は京より歸國を命ぜられ、尋で元治元年遂に獄に下された、河野以下の同志で武市の股肱となつてゐたもの十餘人も、皆前後して投獄せられ、一年餘りも糺彈されてまだ結着がつかず、同志の者は酷い拷問にかゝつて、骨は摧け肉は裂け、或は亂拷の下に即死するものさへあつた、然し何れも皆凛として同盟の節義を守り、口を噤んで決して白狀しない、當時の吟味後であつた川崎省三郎は、河野を詰つて「君等が同盟を結んだのは國禁なる徒黨の嫌ひがあるではないか」と、河野は之に答へて、

『私愚昧にして如何に昨年以來御諭しの處萬方に愚慮致しても、誓約の義に於ては仰いで天に恥ぢず、伏して地に恥ぢず、內心に愧ぢずと存ずる』

すると川崎又曰く、

『いづれ數々申合せ誓約したのは朋黨に相違ない、蘇東坡などは醇正の人ではなけれども、尙ほ國の害は朋黨より大なるはなしと云つた、よく〳〵朋黨に相違ないと云ふところに思慮せられよ』

といつた調子で、當時投獄された志士は皆一時の俊傑、從つて其吟味振りも悠揚迫らず底のものであつたことが知られるであらう。

江藤新平一味徒黨の裁判長

ところが種々と糺彈をしても、罪案を白狀する者は一人もなく、藩廳もほと〳〵困じ果て、遂に慶應元年には不得要領の罰文を以て、武市には切腹を申渡し、敏鎌等は總領役並に名字帶刀召放され、永久牢舍の宣告を爲し、一先づ其局を結んだ、これより敏鎌は獄に在ること兩

三年、明治維新に至つて赦免の恩典を蒙つた。

彼は明治政府の成るに及んで司法省に出仕し、進んで權大判事となつたが、明治七年江藤新平が亂を興して、一味徒黨の者皆獄に投ぜられた時、政府は九州佐賀に臨時裁判所を開き、敏鎌を其裁判長として大獄を斷ずるの任に當らしめた、四月五日に審問を開いて、九日にはすつかり罪案を決定し、そこで處刑擬律を造つて政府に申告し、其許可を受けて十二日に罪狀申渡し、十三日に刑を執行して事初めて落着を告げた、流石の大獄も僅に九日にして審理を終つた彼の敏腕は、當時世人の好評を受けたと云ふ。

西南戰爭後四万三千人の判決

越えて明治十年、西鄕隆盛の亂が起ると、政府は又九州臨時裁判所を福岡に開き、尋で長崎に移し、九月亂平いだ後、元老院內に九州裁判所事務局を置いて、河野敏鎌と玉乃世履とを裁判長に任命し、徒黨の審問をなさしめた、今度は江藤の時よりも遙に關係人員が多く、敏鎌等は日夜部下と共に其審問に從事して、判決を下したもの前後四萬二千七百四十人、口供書が

五十八卷といふ、新政府開始後未曾有の大獄であつた。

鍛鍊は性深沈にして果斷に富み、議論風發、人の肺腑を抉るの概がある、さうして其獄を斷ずるに當つては、片言を以て事實を摘發するに巧みなことは、全く神の如しとも云ふべき有樣で、佐賀西南兩役共に、司法の重官に任ぜられて、毫も非難なき判決を下したのであつた。

明治十三年、大學別當となり、十四年新設の農商務卿となり內閣に列した、十八年勳功に依つて華族に列せられ子爵を賜はる、明治二十五年第一次松方內閣の農商務大臣兼司法大臣となり、轉じて內務大臣となり、更に第二次伊藤內閣の文部大臣に任ぜられた。

伯爵 副島種臣

鍋島閑叟を載ける佐賀藩に於て幕末に國事に奔走したものに大隈重信、大木喬任、副島種臣、江藤新平等の諸士がある、その中江藤は彼の如き最後を遂げ、他の三者は何れも顯官の地位に上つて其名を歷史に止めた、副島は大隈と共に閑叟の煮え切らざる態度に憤慨し、重役等の度すべからざるに見切をつけて、脫藩して京都に上り、遂に藩の掟に問はれて禁錮に處せられたが、世は王政維新となり彼は赦されて直に新政府の要路に擧げられ、官位累進して內務大臣とまでなつた。

幼い時から學問が好き

舊佐賀の藩士で、文政十一年九月城下に生れ、幼名を二郎と云ひ、蒼海と號した、副島は小兒の時に餘程大きな身體で、後には天下の大勇士とでもならうかと誰しも思ふくらゐであつたのに、四歲の時に大患に罹つて、爾來少しも肥らぬやうになり、おまけに癪といふ持病の爲に至つて虛弱の體となつてしまひ、あんな痩せた軀幹の持主となつたのださうな。

六歲の頃から四書五經の素讀を始め、父親が師匠となつて每日の稽古や復習をやつた、元來小さい時から書物ずきであつた副島は、餘念なく勉強したから、漢學の力はズン〳〵進み、且つ記憶力に富んで居たから、後に京都へ遊學した折に、屢々人を驚かした程の漢學の力を養ひ得たのであつた。

粗末な貧物で學業を勵む

當時佐賀藩の學校は寄宿制度で、頗る嚴重な規則があつた、副島は長じて藩費に入學したが

朝は必ず明六ツ（現今の六時頃）から叩き起され、夜は四ツ（現今の十時）にならなければ眠らせない、その上、甘いものを食つて樂をして居たのでは、到底學問を上達せしめることが出來ぬといふので、食物と云つたらそれは〳〵實にもうお粗末なもの、朝は澤庵漬が僅に四切づつで、外にお菜といふものはない、晝飯には豆腐か又は蒟蒻を半片しか與れず、さうして間が好ければ七日に一遍くらゐ、鮪の煮付などが喰へることもある、ところで夕飯に至つては就中ひどいもので、名けて計り飯と云ひ、下僕が計つて、飯は椀に二杯限り、さうして菜としては食鹽ばかりで、それを飯に振り掛けて食ふといふ、唯ホンの生命を繋いでゐるばかりの待遇だつたが、當時は何れもそれに甘んじ孜々として勉强するといふ健鬪ぶりを見せてゐた。

藩から皇學修業を命ぜらる

このやうな粗末な物を喰つて、大に勉强の功を積み、副島は十三歳の折既に左傳くらゐは獨りで讀めるほどの學力を得た、十八歳の時には最早一人前の漢學者と自負するの進境を見た、又一方では弓馬刀槍の武術を學び、大隈重信、大木喬任、江藤新平などと同窓の友として、俊

才の聞えが藩中に高かつた。

その後間もなく、皇學修業の爲に京都へ上ることゝなつた、これは全く異例のことで、當時藩から皇學の修業を命ぜられたものは、後にも前にも副島一人であつたのだ、彼が才學に富んでゐたのは此一事でも明かではないか。

彼は京都へ上つて學校を物色したが、多くは私塾であつて鄕里の藩校の如きものがない、佐賀の學校で育てられた彼は私塾を嫌つて、一寸入塾しては直ぐ出てしまつたり、何先生の風采が氣に入らぬとか、彼の先生は敎へ方が拙いとか、勝手の熱を吐いて方々の儒者の家を叩き、冷評するのを樂しみにしてゐた。

記憶力に富んだ其の一例

此時分に於ける副島は、非常に記憶力に富んで居た、恰度其頃京都に新宮冷庭といふ醫者があつて、なか〳〵學問の出來た人物であつた、何時も書生が來ると、彼は諸葛武侯傳を諳讀させるといふことであつたから、副島は之を聞くと、そりやア面白い、一番新宮を驚かしてやら

うと、前々から諸葛武侯傳と、おまけに周瑜魯蕭の傳までも熱心になつて誦し、十分に自信が出來てから新宮の家を訪ねた、すると向うでは例に依つて例の如く、武侯傳を誦讀させて困らしてやらうとした、副島は來たなとばかり、朗々として讀み始め、武侯傳が終ると次には周瑜傳、また其れが濟むと魯蕭の傳までも誦誦したので、新宮は呆れて副島を賞めそやし、その後といふものは三日にあげず君を招いで、さうして御馳走をしたといふ話だ。

食ふ物を節して書物を買ふ

當時佐賀藩から給せられたところの學費は、一人につき十九圓であつたが、副島は京都その他へ遊學を命ずといふので、その他といふのに對して、別に金五圓を增給せられ、合計金二十四圓づつを貰つて居た、さうして此時分の書生は、小倉袴に藁草履、それから上衣は晴の時が花色木綿の紋附で、羽織は其頃割羽織といはれた木綿の無地であつた。

食料は何處に居ても、大概一ケ月二分ぐらゐで濟ませた、尤もこのくらゐで濟ませようとするには、勿論甘いものは喰へない、菜などは、油揚に醬油を掛けて食ふくらゐが御馳走の方で

時に依ると澤庵でお茶漬の簡易なところで濟ましてしまふこともある、このやうに儉約をしてその殘りの金をもつて、自分が學ばうと思ふ種々の書物を求める、その苦學の模樣は到底今日の學生達が及ぶところではなかつた。

維新後に於ける其出世振り

斯くて世は幕末騷擾の時となつた、副島は此風雲に乘ずべく歸藩して、大隈重信等と共に優柔不斷なる藩の重役を激勵したが、一向其甲斐なきを憤つて、大隈と共に脫藩し、遂に禁錮を命ぜられるに至つた、維新後赦されて參與となり、明治二年には參議に進み、四年には露國へ行つて樺太の境界を定めて來た、それから又外務卿になつたこともあり、明治六年には全權公使として支那に駐劄したこともある、それ等の勳功に依つて明治十七年伯爵を賜はり、次で宮中顧問官に任ぜられ、二十年には樞密顧問官、正三位勳一等となり、それから二十五年には品川彌二郎の後を承けて、遂に內務大臣の椅子に上ることゝはなつた。

子爵 仁禮景範

薩藩主島津齊彬は夙に海防問題に意を注ぎ、造船、造兵、製鐵等の工場を設けて艦隊を編成し、藩中の子弟を選んで、或は長崎に、或は遠く歐洲に遣はして、航海術の修得に努力するところ頗る多かつた、故を以て明治元年に於ける我海軍の先覺たる權威は薩藩の手に歸し、隨つて海軍部内に於て名を現はした人物には薩州人が多い、仁禮景範も亦其一人で、海軍省に立てる三基の銅像は、西郷、川村、仁禮の三功臣のそれである。

維新の政變には蔭の勇士

仁禮は天保二年二月、鹿兒島藩士仁禮源之助の次男として、薩摩國鹿兒島郡荒田村に生れ、幼名を平輔と稱へた、稍長ずるに及んで其俊秀の才を認められ、海外留學生に選拔されて、歐洲の各地に學ぶこと數年に及び、歸朝と共に藩の軍艦乘組員を命ぜられ、安政以後の幕末時代をば主として海上生活の間に過したものであつた。

こんな風だから仁禮は幕末の所謂志士論客でもなければ、さりとて實戰の勇士でもない、彼

は專ら謀を帷幄のうちに運らし、裏面に隱れて軍務を裁決する才能に長じてゐたから、彼の英艦が鹿兒島を砲擊した時なども、事務的方面に手腕を揮ひ、爾來引續き蔭の勇士として維新の政變を迎へた、そして彼が中央政府に仕へた時には、齡既に不惑の働き盛りであつた。

我が海軍の創設に貢獻した

明治四年九月、初めて兵部省六等出仕を命ぜられたが、翌年二月官制の改革があつて、兵部省は陸軍海軍の二省に分れた、海軍は川村純義が長官となり、仁禮は依然として六等出仕のまゝ轉任したが、間もなく横須賀提督府附を命ぜられ、海軍少丞に進んだ、何を言ふにも當時の我が海軍は草創の際であつたから、艦隊の編成、士官の養成、造船所及び製鐵所の設置、さては條例の設定などに頗る多忙を極めたので、仁禮は曩に親しく歐米先進國の實地を研究して得たところの、新智識を傾注して貢獻するところ尠くなかつた。

七年六月海軍大佐に進み、臺灣事件について伊東祐麿が大久保公を清國に送つた留守中、艦隊を代理指揮し、自ら軍艦高雄に乘つて九州に向ひ、萬一の變に備ふる等機宜の處置を執り、

次で江華島事件で黒田清隆が、特命全權辨理大臣として渡韓するに當り、我が政府は大阪、廣島、熊本三鎭臺の兵及び近衛二聯隊を附し、日進、孟進、高雄の諸艦を以て護送せしめた、此時仁禮は諸艦指揮の任に當り、公使を送つて仁川に赴き、無事其使命を果したのであつた。

謀を帷幄のうちに運らす

これより先、我が海軍の施設は着々と其歩を進めて、七年八月假提督府を置いてからは、順次海防の實も備はり、九年八月には横濱に東海道鎭守府假廳を開き、艦船水兵屯營及び水兵練習所をも管理せしめることゝなつた、其時仁禮は鹿兒島製造所長として赴任し、其年十月肥後に神風連の亂が起ると、直に鹿兒島暴徒征討巡務取調係に任じ、其征討に向ひ、尋で西南の役には長崎臨時海軍事務局長官として征討の事務に當り、戰後東海水兵本部長となり、幾程もなく海軍兵學校長となつた、十三年海軍少將となり、十八年伊藤博文に隨うて清國に赴き、天津條約を締結して歸ると中將に進み、二十二年には横須賀鎭守府司令長官となり、二十五年伊藤公の元勳内閣が組織された時、仁禮は海軍大臣として入閣し、翌年辭職と同時に樞密顧

問官に任ぜられた。

男爵 白根專一

明治二十四年十二月衆議院は解散となり、之に伴ふて行はれた總選擧に於て、政府は猛烈な干渉を行ひ、我憲政史上に拭ふべからざる一大汚點を印したが、之が采配をふつたのは時の内相品川彌二郎で、之を扶けた者は内務次官の白根專一であつたから、世人は白根を以て言論壓迫、選擧干渉の權化の如く思惟し、權謀術數を以て事とせる政治家として嫌忌するが、彼は實際に於て左程頑冥な政治家でもなく、又惡辣な策士でもない、理義堅に正直な男だ、そして彼は漁色癖があつた。

王事に奔走して維新後仕官

白根は山口藩士白根多助の二男坊で、嘉永二年十二月に生れた、幼名を專八といひ、幕末には天下の志士等と共に王事に奔走した、維新後中央政界に入つて司法省に出仕し、五年八月木更津縣の十二等出仕を命ぜられてから、主として地方官を稼いでゐたが、明治十三年六月秋田

縣大書記官から轉じて、再び中央に招致せられ、内務省少書記官となり、爾來同省權大書記官總理局次長、内務書記官、總務局文書課長等を歴任し、二十一年十二月、再び地方に出で〻愛媛縣知事となり、愛知縣に轉じ、二十三年五月、三たび内務省に入つて次官となつた。

當時政府は初期議會開會の前後で、頗る多忙を極めてゐたが、白根は渡邊大藏次官等と共に政府委員として敏腕を揮つた、ところが二十五年選擧干渉問題に祟られて現職を去り、宮中顧問官となつたが、間もなく大藏次官に任ぜられ、永く其職に留まつてゐると、二十八年伊藤内閣の遞信大臣に親任された。

好色家で金錢には淡白な人

白根の趣味は紅燈綠酒の裡に折花攀柳の樂みをなすといふ俗物的のもので、彼が内務次官時代に、妻子を連れて京都へ遊びに行つたことがある、久しぶりに俗務よりのがれて、山紫水明の地に入り、その山容水色に接して京美人の姿を見ると、例の勃々たる好き心、禁ぜんと欲するも能はざるものがあつて、低酌微吟の慾望に胸を燃やしたけれども、恐るべきは有名な嫉妬

家の夫人だ、之を同伴せる以上、公然とその慾望を滿たすの勇氣がなかつた。

そこで彼は一策を案じ、宿の女將に旨を含めて、豫てお馴染の一人の藝妓を、女中風に變裝させて忍び込ませ、風呂に入る毎に之を招いで、獨り悦に入つてゐたまでは宜かつたが、或日お孃さんを伴れて京の街をソゾロ歩きの時、其藝妓が盛裝して通つてゐるのに出會した、お孃さんは呆れて宿へ歸るとお母さんに物語る、惡事露見に及んで夫人の形相凄じく、一大捫着が起つて宿の女將も弱つたとか。

とは云へ、彼は女色に耽溺するといふ程の猛烈振でもなく、又濫獲するでもなかつたから、比較的艶聞は傳はらない、彼は金錢財寶に對しては頗る清廉潔白と言ふよりも、寧ろ無頓着の方で、隨つて得れば隨つて散ずといつた形、死んだ時には葬式の費用さへなかつたといふ。

内海忠勝

外務局の聽許掛を振出しに、大參事から知事、會計檢査院長を經て、明治三十三年には華族に列せられ、

三十四年六月内務大臣に任ぜられた、長い間の官吏生活で事務には通じてゐた處から、融通は利いたが取り分けて之れといふ手腕も見せなかつた、只モー敵はなく、無事息災に其職を守つたといふ丈のこと。

尊王攘夷の主唱と宣德隊

其生地を問へば周防國は吉敷郡、吉敷村といふ處に生れたのが天保の十四年八月、父祖代々山口藩に仕へたので、彼れも又幼時より藩に出仕し居つた、此頃は例の尊王攘夷論が四方に起つて、世は益々騒擾を極めたのである。

折りしも文久三年、彼れは宣德隊なるものを組織して、尊王攘夷説を主唱し、其勢ひ當るべからざるものであつた、元治元年正月奇兵隊に入つて、六月益田福原國司の三家老に引き連れられて京都に上り、宮闕を犯したといふので、却つて薩摩會津藩の兵に砲撃を受けて、ほうほうの態で陣を退いてしまつた。

維新後の彼れと官吏生活入り

慶應二年六月幕府が征長軍を起すに當り、彼れは長州の兵を率ひ奮戰の結果幕軍を敗つて意氣昇天の勢ひを示した、程なく幕府は政權奉還となり、遷都の大禮は行はれ、内亂も茲に終熄した、之れより彼れは長崎に赴いて蘭學を修めたが、後明治元年の六月には兵庫縣の監獄局に出仕する事になつて、始めて平穏無事の官吏生活に入つた譯である。

小松原英太郎

年少にして氣節を重んじ、常に是れが修養に努めたる小松原は、新聞記者となりて筆禍に禁獄二年餘、心膽を練磨し、諸書を渉獵し、修養を積んで出獄すると、山陽新報創立の業を全うし、時勢に鑑みて歐洲視察の必要なるを知るや、外務省に入りて遂に其志を成すを得、後埼玉縣知事となり、内務省警保局長となり、静岡縣知事、長崎縣知事、司法次官、内務次官を經て、貴族院議員となり、官を辭して大阪毎日新聞社長となり、第二次桂内閣に入つて文部大臣となつた。

幼時太閤記が無二の愛讀書

小松原は嘉永五年二月備前國御野郡青江村に生れた、家は代々農家であつたが、彼の父は中

年から商業を始めて鰻問屋を營んだ、青江村といふのは、岡山城下を一里ばかり離れた兒島灣の沿岸にあつて、住民の半ばは半農半漁であるから、そこで漁れた鰻を買取つて、小さいながらも自分の所有せる運送船で大阪に送り、大阪の問屋と取引した、こんな有樣だから小松原り家は相當餘裕のある生活向をしてゐたのである。

彼が七八歳の頃、岡山藩士の英賀某なる人が青江村に來て寺子屋を始めたので、そこへ通ふことゝなつたが、師匠夫婦は深く小松原を可愛がるところから、彼も朝夕出入して其家庭的薫陶を受けた結果、幼少の頃から仕官を志すに至つた、それから十二三歳の頃からは、從兄に當る人が藩黌の句讀師を勤めてゐたので、其人に就いて漢學を修めた、その傍太閤記義士銘々傳武勇傳、其他忠孝節義に關する小說傳記等を讀むことを無上の樂みとし、殊に心窃に秀吉が微賤より身を起して、奮勵努力、能く英才を發揮し、漸次一國一城の主となり、遂に風雲に乘じて偉業を成したといふのに感激し、好んで太閤記を讀んださうだ。

漢學を棄てゝ英語を勉强す

十五歳の春、前に言つた從兄の周旋で藩黌に出仕することゝなり、寄宿寮に入つて專ら漢籍を修めた、彼が特に藩の學校に出仕することを希望したのは、當時藩士にならうと望んでも、なか〳〵容易に其志を達せられない、獨り學校だけは學問が秀でゝ居れば、句讀師となり教師となり、遂に士分に取立てられることがあるからであつた、然るに翌年の秋、彼は激烈な赤痢に罹つて殆ど死に瀕し、親族等が枕頭に集つて末期の水を與へた、それに不圖氣付いて昏睡狀態から醒め、奇態にも漸次回復に向つたといふ不思議な話がある。

十八歳の時藩の句讀教師に擧げられ、二十俵二人扶持を給せられることゝなつたが、明治四年廢藩置縣の際、藩黌に大改革を施されて、從來の漢學を廢し和洋兼修の普通學校となり、英語科佛語科を置いて、慶應義塾其他より英佛語の教師を雇うて來た、當時一部の人々は之を憤慨し、漢學の廢すべからざることを主張して、遂に山田方谷を閑谷黌に聘し、別に一旗幟を樹てるに至つた、此時小松原は漢學を棄てゝ洋學に就き、英語科に入つて專ら語學を研究した。

盟約を立てゝ氣節を砥礪す

右の改革に依つて出來たところの普通學校は、明治六年に至つて、政府が財政上の都合により從來の特別下附金を廢止したので、遂に廢校の餘儀なきに至つたが、小松原などの同志は、此由緒ある名聲を廢絶するに忍びずとなし、種々苦心し協議した結果、生徒中の先輩たる小松原などが教師となつて、學校を維持すること〻なり、遺芳館と改稱して私立經營とした、そこで小松原は歴史其他一部の教授を擔任し、塾長を輔佐して風紀振肅の事にも當つた。

これより先、藩黌が改革されてから、生徒には兵式體操を敎へ、凡てが洋風化したが、小松原始め塾生の氣節を重んずる者十數名が、互に相結んで忠孝節義を尙び、廉耻を重んじ、義の爲には生命を鴻毛の輕きに比すること、國家に緩急あらば其急に赴いて、死生を顧みざる事等數條の盟約を立て、常に氣節を砥礪して居つたのであるが、遺芳館となつて以來、塾生を率ゐて一層實踐躬行の範を示さんと心掛け、且風敎に關しては時々當局者に建言等をして、岡山藩の名君芳烈公や、熊澤蕃山の志を繼ぎ、遺芳館の精神を發揚しようと努めたものだ。

藩黌時代不眠不休の勉學

彼が藩黌に句讀敎師をしてゐた時の動作について、同じ寄宿舍生活をして彼の敎へを受けた某は、當時の狀況を語ること頗る密なるものがある、曰く、其頃は書格行燈といつて、五寸四方に高さ一尺五寸ぐらゐの行燈があつた、夜分は之を銘々の机の上に置いて、燈心を二本にしたり三本にしたりなどして勉强したものである、寄宿舍の舍長格であつた小松原は、この行燈の下で孜々として勉强してゐた、然るに幼年者は机の上に居眠りしたり、机の下に頭を突込んで寢たりして兎角勉强しなかつた、そして睡むいものだから彼の勉强には實は閉口したのである、五月蠅くて耳さはりで隨分困らされた、だが彼は幼年者が床を敷いて寢た後も、獨り起きて讀書を續けてゐた、何時起きて見ても讀んでゐる、一向に寢る事がない、何時寢て何時起きたのか解らぬ、彼の寢たのを遂に見たことがなかつた。

こんな風で小松原の勉强には、同宿の者が大に憐まされた、それに彼の讀書は終始音讀で、時にはそれにお伽の樣に聞えて寢ることもあつたが、大抵は閉口してしまつた、そして音讀の調子が、其頃岡山地方で加持祈禱をする神作といふ男の調子にソツクリなところから、誰言ふとなく彼に神作さんといふ綽名をたてまつるに至つた、そして皆んなが神作さん神作さんと呼

んでも、唯口を大きく開けて、聲を出さずに喉で笑つてゐた、彼は少しも愛憎といふことがなく、喜怒を色に見さず、怒ることもなければ、面白くて堪らぬといふこともない、唯孜々矻々として晝夜の別なく勉強してゐたといふ。

無益の洋學が有益に早變り

彼は漢學を廢して洋學を研究すること二年餘に及び、文法から讀本、萬國史等を讀んだけれども、實に乾燥無味で何等の興味もない、殊に歴史を讀んで、時の君主に反抗して革命を起すなどの段になると、卷を掩うて嘆息し、洋學を修めたところで我國の政治に於て何の得るところなく、又益するところもない、寧ろ之を廢せんかなとの嘆を發したこと幾度なるかを知らない、其頃有志が森田節齋の弟月瀨を聘して、孟子及び史記列傳の講筵を開いたので、小松原等の遺芳館の塾生は其の聽講を請うた、月瀨翁は史記列傳を講ずるのに、節齋の口傳、書入れを用ひたものだから、其講義は恰も節齋其人の講釋を聞く如く、非常に感動を與へられた、彼は此講義を聞き、且維新の志士が愛讀した諸書を讀んで、其興味あり精神あり士氣が磨くに於

て益ある事を覺え、益々洋學の無益なるを感ずるに至つた。

此時偶々ウエーランドの修身書と經濟書とを研究して、東京から歸つて來たものがある、そして其說は大に味ふべく又益するところがあると聞いて、直ぐ其講義を聽きに行つた、成程、修身書の如きは往々儒教と合致するところがあり、經濟書に至つては未だ曾て聞いたことのない新說で、極めて有益の學だと悟り、茲に初めて洋學の益々研究せねばならぬことを覺り、其人に教を乞ふに至つたのである。

評論新聞社の編輯長となる

然るに明治七年、西鄕隆盛等征韓論を主張し、廟議破裂して天下の物論沸騰した、岡山に於ても征韓論を主張する者と、之に反對する者とが互に激論を戰はし、小松原等の同志は非征韓論の建議を政府に提出して、茲に多くの先輩有志と分離するの止むなきに至つた、そこで彼等の同志は相率ゐて鄕里を去り、東京に出でゝ大に學業を修め、天下の有志と交りを結ばうと云ふので、其年の九月上京したのであつた、其時兩親や親戚の人達は異議を唱へたけれども、

彼の固き決心に負けて、遂に許諾することになつた。

上京すると直ぐ慶應義塾に入つたが、其上級生に敎へるところは矢張りウエーランドの修身書及經濟書で、彼の既に研究したところのものだから、僅に一學期を經て退塾し、同志と共に芝烏森の下宿屋に集つて、專ら政治經濟の諸書を輪講研究することゝした、そして傍ら時事を論じた投書を曙新聞に寄せたのが緣となつて、末廣重恭と交を結ぶやうになり、曙新聞社より時々論說の寄稿を賴まれ、暫くすると末廣の紹介で評論新聞社に入り、編輯長となつて椽大の筆を揮つた。

意外にも西鄕黨の機關雜誌

當時彼は自由民權論を唱へたけれども、其議論は素より幼稚で極めて單純なものであつた、卽ち當時の自由民權論は、第一政府が讒謗律を制定して新聞記者の筆を檢束したのを憤り、言論の自由を唱へて政府を攻擊したものだ、末廣や小松原の主として論じたのも矢張り言論の自由で、其思想の淵源は主としてボックルの文明史などにあつた、そして評論新聞は西鄕黨の

一人なる海老原の經營せるものであつたけれども、彼は入社の際西鄕黨と海老原とが如何なる關係にあるのかをも知らなかつた。

非征韓論者の小松原は、固より西鄕黨の機關雜誌を編輯するの意志で入社したのではない、末廣の紹介で、唯言論の自由を唱へ、文明思想を皷吹せんとする單純な考へで招きに應じた譯で、彼は私學校討伐論を起草し、私學黨は文明の障碍物だから、宜しく之を征伐せざるべからずとの意見を發表せんとし、編輯局で社員に止められて、遂に揭載しないことにしたくらゐであつた、然るに社中の情況は西鄕に志を寄せ、私學校黨と氣脈を通ずる豪傑連中が常に出入し社員は槪ね悲歌慷慨の壯士で、西南戰爭が起ると、或は縛に就き、或は戰地に赴いて賊軍に加はつた。

新聞紙條例に觸れ禁獄二年

明治九年一月、小松原は評論新聞の論說に「壓制政府顚覆すべし」と題し、當時政府が言論の自由を束縛するの非を論じた、ところが其言論が過激であつた爲に、新聞紙條例に抵觸した

との廉で、東京地方裁判所は彼を禁獄二年に處し、鍛冶橋の監獄に收禁した、彼は不服で上告し、玉乃大審院判事の審問に對して痛烈に論辯したけれども、六月に至つて遂に原裁判通り確定した。

當時政府が俄に新聞紙條例を設け、其取締を嚴にして彼を獄に投じたのは、蓋し鹿兒島に於て私學校黨の情勢が益々險惡に赴くと同時に、各新聞紙に於ける政府攻擊の議論が、逐日激烈となつた爲めで、謂はゞ對私學校の關係から出たらしく、小松原などの入獄以前は、偶々新聞紙條例に觸れた者があつても、皆自宅で禁錮せられたものだ、然るに九年一月から俄に鍛冶橋未決監の一部に禁監を設け、彼が其處へ收監されたのを皮切に、引續き成島柳北、末廣重恭、杉田定一、箕浦勝人等の新聞記者が數十人も監禁された、彼は一月から夏まで、鍛冶橋監獄に拘禁せられ、それから市ケ谷監獄へ、十年秋には佃島監獄に移された。

心身を讀書と修養に傾注す

彼は友人から洋書を差入れて貰つて、獄中で靜に政治經濟の研究をした、世間の狀態や西南

戰後の經過等に就いては、時々新入獄者に依つて其概要を知ることが出來たといふ、そして彼が最も悲痛に感じたのは、當時地方の人達は、國事犯も普通の犯罪も區別せずに、入獄したものは誰でも惡人であるかの如く見做して、色々な評判を立てたものだから、彼が故郷に居る老親は實につらい思ひをしたことである、然し彼自身は獄裡に在つて、將來艱難に處して之に耐ふるの忍耐力を養つた、といふのは當時の監獄は、今日と違つて殘酷な取扱をやり、獄卒なども監獄へ入れば死ぬのが當然であるくらゐに考へてゐたのだから堪らない、眞に獄中は人間生活のドン底で、その覺悟と忍耐とを忘れないことが、後來修養上に利するところが多かつたとは彼自身が後日人に語つたさうだ、又彼は國事犯の嫌疑で數年間未決の儘に拘禁せられ、常に從容死に就くの覺悟で、裁判所から呼出しのある毎に、古びたれども紋付の衣物を着け、志士の品格を以て刑場に就くとの立派な態度を見、又其聲息に接するの機會を得て、心膽の練磨に大なる裨益を得たといふ。

彼と共に筆禍に祟られて、一年の禁獄に處せられた山脇巍が、刑期を終へて出獄するとき、小松原は左の一詩を賦して送別の情を叙べた。

西風拂樹葉。滿空浙瀝鳴。方此搖落秋。羈囚不堪情。況又逢君去。紛々愁緒縈。
君元同鄕客。愛國輕利名。偶降文字獄。獄窓同寄生。身屈數尺室。意氣橫大空。
千辛與萬苦。嘗盡一心淸。一朝歸期至。捨我向鄕程。鄕愁與別恨。鳴咽伴雁聲。

出獄して山陽新報を創刊す

明治十一年六月、刑期滿ちて佃島監獄を出でたる小松原は、直ちに朝野新聞の客員となつて末廣重恭などと共に編輯に從事した、ところが十一月になつて、岡山の親友が新聞を創刊するから、是非歸鄕して創立の任に當つてくれと言つて來た、そこで彼は承諾して鄕地に歸り、其社主たるべき人に會つて、

『新聞を發行して普通營利の事業とする考へならば、斷然止めた方が宜しい、若し愈々發行するとならば、祖先傳來の資產を使ひ盡すやうな狀態になつても、敢て後悔しない覺悟がなければならぬ、それから私に新聞事業を托する以上は、編輯の事は一切私に委任すること、以上御承知であるか否や』

と談じ込むと、社主は斷乎たる決心を以て、たとへ此事業の爲に資產を擧げて失ふに至るも悔ゆところあらずといふので、彼は早速準備に取掛り、十二年一月を以て山陽新報は生れた、其主義とするところは不偏不黨、地方民心の啓發と、實業の發達を指導する機關たることを任とするといふのである、爾來五十有餘年、今や全國有數の地方新聞となつたのは、蓋し小松原の力であるといつて可からう。

歐米視察を志し官途に就く

彼は山陽新報を創刊する時、先づ一年か一年半を期して新聞經營の基礎を定め、諸般の事を整頓して、自分は再び東京に出で大に雄飛しようといふつもりであつた、幸に新聞の事業も順調に發展したので、明治十三年、彼が二十九歲の春、當時岡山縣勸業課長であつた阿部浩に誘はれて共に上京した。

彼れつら〳〵思へらく、方今內外の情勢を察するに、將來有爲の材たらんとするには、其官にあると野にあるとに論なく、一たび歐洲に遊んで、親しく其制度文物を見、大に知見を廣め

ねばならぬ、依然として新聞社に居て、碌々筆硯に親しんでゐては、遂に海外に遊ぶの機會を得なくなるだらう、こりやア官吏となつて外務省に入り、歐洲視察の志を達成するのが上乗の策だと、斯う考へたものだから、上京すると末廣は再び新聞社へ入れと勸めたけれども、それを斷つて、花房義質や中井弘の推薦を得、時の外務卿井上馨の採用するところとなつて、明治十三年外務省御用係となり、月俸五十圓で本省勤務を命ぜられた、是が小松原の官界に入つた初めである。

子爵 野村靖

品川彌二郎と共に松蔭門下の双璧と稱せられ、幕末時代には長藩政治家の長老として畏敬されたに拘はらず、其政治生活に於て、輕躁たる伊藤博文や井上馨に比して及ばざること遙に遠く、第二流或は第三流の政治家を以て終らしめたのは、彼の性質が包容力に乏しく、同化性に缺け、融通の利かなかつた爲に、自然多くの敵を求めると共に、同僚にも疎ぜられ、敬遠されたに因るもので、第二次伊藤内閣の內務大臣、松方內閣の逓信大臣となり、樞密院に隱れて了つた。

品川と共に松下村塾の双璧

野村は伊藤博文より一ケ月早く生れた、天保十二年八月長州萩の城下で、山口藩士野村嘉傳次の次男として產聲をあげ、幼少の頃から松下村塾に入つて、維新改革の熱血兒吉田松陰の教授と感化を受け、夙に神童の譽があつて、同門生の品川彌二郎と共に深く松陰に愛された、時に世は幕末際し、長藩では改革の先驅者として王事に奔走する者多く、德川幕府からは恰も仇敵の如くに憎まれてゐたが、偶々老中の間部詮勝が京都に上らうとしたのを聞いて、長藩士のうちに途中で彼を要擊せんと企てた者があり、吉田松陰もそれに參與した、ところが長藩の家老で公武合體論者の長井雅樂が、此陰謀を看破した爲に、吉田等の計は水泡に歸し、松陰はそれが爲獄に投ぜらるゝに至つた。

十八歲の時既に國事に盡す

當時長州藩では俗論黨が勢力を占め、藩侯も亦公武合體論に傾いて、江戸に上らうとしたの

を聞いた松陰は、獄中に於て憤慨禁ずる能はず、何とかして藩侯の江戸出府を阻止しようと考へ、窃に野村の實兄入江九市に手紙をやつて、大に諭すところがあつた、然るに九市は此時重き病氣に惱まされてゐた母の看護をしてゐたので、野村は兄に代つて松陰の指圖通り斷行することゝなり、自分の地行を賣つて二十兩の金をこしらへ、闇夜に乘じて城下を脱出し、伏見に於て藩主の駕を喰止めようと計つた、然るに不幸にして事成らず、野村は捉へられて獄に投ぜられた、此時彼は僅に十八歳の少年であつた、後日松陰が野村の氣概に感じて左の聯句を送り其忠勇を激勵した。

酬國精忠十八歳。　毀家貧士二十金。

維新後召されて中央政府に入り、木戸孝允等を說いて廢藩置縣の實行を促し、四年宮內權大丞となり、幾ばくもなく外務大書記官に昇進し、岩倉具視に隨行して歐米各國を巡遊し、先進國の文明制度を視察した。

男爵　千家尊福

出雲大社の神主で、白哲柔和なる顏貌と、房々とした胸に垂るゝ長い白髯は、之を一見する時、さながら神の權化かと思はしめるが、實を云へば大の野心家で、或る目的を遂げんとするに際し、その運動の巧妙にして自在なること、活神の魔力を有するかと疑はしめた程で、初期以來貴族院の議席に列し、木曜會を創立して男爵議員の選擧毎に少壯派の當選に盡力し、會內の誰彼に恩を估つて、木曜會を踏臺に大臣の位に上らんと企て、美事に志望を遂けて司法大臣の椅子を獲得したなど、流石は千家の手腕と認められる。

其の名も高き日本一の舊家

千家の祖先は天穗日命にして、命が天日隅宮の祭司たりし神代より、世々出雲の國造となり相傳へて尊福に及んでゐる。

天穗日命十三世の孫が野見宿禰で、勅命により大和朝廷に於て、當麻蹶速と力を角し、蹶速を蹴殺し其肋骨を折つた剛の者、卽ち我國角力の元祖である、而して宿禰は其儘輦下に留任を

命ぜられたが、幾くもなく當時の一大弊風たる殉死をやめさせようと思ひついて、殉死に代るべき樹物を造つて朝廷に上り、且意見を奏上したところ、帝には之を嘉賞したまひ、宿禰に土師の姓を賜ひ、間もなく殉死禁止の令が發せられた。

宿禰の子來日田維穗命は、父の後を繼いで出雲の國造となつたが、偶垂仁帝の皇子譽遲別王が出雲大社へ御參詣のことがあつたので、來日田維穗命は、皇子の爲に假宮を作つておもてなしを致し、且つ皇子の行啓を記念する爲に、黑木橋を架けた、來日田維穗命の孫を游宇宿禰と稱し、祖先の後を承けて出雲の國造となつたが、後勅を奉じて韓國に使し、倭屯田長となつて彼地に駐劄した、外交官の資格を以て、我が朝廷より外國へ使節を派遣した嚆矢である

出雲國造の職掌が變更さる

それより三十八世を經て孝時に至り、元弘三年二月、後醍醐天皇が隱岐より伯耆の船上山に行幸あらせられた時、孝時に綸旨を下して王道の再興を祈らしめ、且同家に藏するところの寶劍を求めたまうた、仍て孝時は二振の寶劍のうちから一振をとつて行在所へ獻上したのであつ

た。

孝時には孝乘、清孝、孝宗、貞孝の四子があつたが、長子の孝乘には故あつた爲、次子の清孝が其後を繼ぎ、之を孝宗に傳へた、末子の貞孝は別に一家を立て、北島姓を名乘つたので、こゝに孝宗は前家と稱し、これより出雲國造は千家、北島の二家となり、年中の祭事を分掌することとなつた、即ち正月より始めて、奇數の月は千家家に於て掌り、二月より始めて偶數の月は北島家が之に當り、閏月は上半月を千家家が、後半月を北島家が分掌することゝなつた。

出雲國造の職掌は、往古は一國の祭祀と政治とを兼攝したものであつたが、中古に至つて祭祀と政治とは二分して、主として祭祀の事を掌ることゝなつたので、從つて其領土にも亦變遷があつた。

嘉永以後屢次祈禱の勅命

出雲國造たる千家の領土は、天正時代までは十二鄕七浦であつたが、豐臣秀吉の朝鮮征伐に

際し、孝宗十一世の孫義廣は、秀吉よりの出兵の命に應じなかつたので、七郷五浦を沒收せられて、僅に五郷二浦となつた、其後義廣の曾孫尊光に至り、應仁以來の戰亂によつて領地は次第に諸豪族に犯され、神殿の頽廢するも之を修理する金が無いといふ狀態になつたので、國主松平直政に訴へ、其援助を得て漸く舊領を挽回することを得た、時に德川幕府に於ても、特に金五萬兩を下賜して社殿を造營せしめ、尋で寛文七年には宣旨を賜はり、一社の事務は大小に拘らず、擧げて國主大名の羈絆を脱し、國造の處理に委すべきことを命ぜられた。

其後十世を經て尊孫に至り、嘉永年間外國船渡來して、國民は長夜の夢を破られ、世上漸く騷がしくならんとせし時、勅を以て國體安穩、寶祚永久を祈るべきことを命ぜられ、爾來天下泰平、五穀豊穣の祈禱を勅命せられたことが屢あつた。

神樣の權化からタダの人間

明治の初年、尊孫は齡古稀に達し、國事多端の時其職に堪へざるを理由として、長子尊澄に後を讓つた、千家の家法としては、前主死去するに非ずんば其子の後を繼ぐことを禁ぜられ、

斯くも舊き家柄でありながら、十三世野見宿禰が朝廷に召されて留任した時、來日田維穗命が其後を襲うたのと、それ以外には直治、尊孫の時の例があるばかり、尊澄は明治二年三月從四位下に叙し、四年十二月には特に華族に列し男爵を賜はつた、其年尊澄は職を長子尊福に讓つて隱退した。

尊福は弘化二年八月出雲の杵築町に生れ、幼名を國麿又は枝代彦と稱した、斯る舊家で大社の神官たる家に生れた彼には、何等記すべき青少年時代の物語もないが、資性沈毅にして且容貌魁偉、頗る才略に富んだ人物である、明治十七年十月大社教管長となり、二十一年六月元老院議官に任ぜられてから、政治運動に興味を覺え、祖先傳來の神職を嗣子に任せて東京に住し、文部省普通學務局長、貴族院議員、司法大臣等に任ぜられ、一時は東京市長たらんとして猛運動を試みたこともあつた。

彼が大社教管長として、神道擴張の爲地方を巡回した時は、沿道の人々皆路傍に薦を敷いて列坐し、手を拍つて彼を拜んだものだが、其政治運動に熱中するやうになつてからは、前には神樣の權化と思はしめた彼も、タダの人間であつたのかと値打を下げられて、一人として

拍手禮拜する者は無いやうになつたといふ。

男爵 岩村通俊

兄弟揃うて夙に勤王の大義を唱へ、戊辰の役に官軍に加つて奮戰功を奏して以來、明治政府に入りて地方官を勤めたのも兄弟殆ど同經路を辿り、而も其間兄は西南の役に鹿兒島縣令としての聲名を博し、弟は佐賀の亂に佐賀縣の牧民に任じたるなど實に珍らしい事例であつて、それから男爵に叙せられたのも同時、又共に貴族院議員となつたなど、餘り世間に其類を見ない海南健兒の立身談を作つた。

西南戰役當時の鹿兒島縣令

岩村は舊高知の藩士で天保十一年六月、土佐國幡多郡宿毛に生れ、夙に勤王の大義を唱へて維新の際には弟高俊と共に鷲尾卿を奉じ、高野山に據つて幕府に抗し、戊辰の役に際しては東山道先鋒總督に從ひ、信越奥羽地方等に轉戰して功あり、亂後賞典祿二百石を賜はり、明治政府に登用せられて廳訴司判事に任じ、尋で函館權判事、開拓判事等を歴任して、明治四年に

は札幌に赴き、移民輸出等の事業に從事して大に努力した。

明治六年佐賀縣權令となり、征韓論以來風雲穩かならざる九州の地にあつて、能く其職責を全うし、明治十年鹿兒島縣令となつたが、當時薩摩大隅の二州には西南戰役の擾亂が起つてゐた、元來鹿兒島地方は、島津の領有以來未だ曾て他國人に依つて統治されたことのない特殊の地方であるから、たとへ普通の場合と雖も、他藩出身の者が縣令として乘込むことは、縣民一同に好感を與へる筈はないのに、況して王師に向つて反旗を翻してゐる際、明治政府の遣はした官吏を憎むことは言ふ迄もない、彼の赴任は油を抱いて火に投ずるよりも危險なものがある。

兄弟同時に男爵を賜はる

しかし岩村の膽略は決して赴任を躊躇するごとき女々しき行動に出でしめない、彼は死を覺悟して政府の辭令を受け、家族一同と水盃を交はして、單身敵國にも等しい危險の地に身を投じた、果してあらゆる迫害は加へられ、幾多の危險に直面して、死地に陷るか如き場合に遭

つたこと屢あつたが、彼の機智と勇膽とは能く其等の危地を脱して紛擾混亂せる間に處して戰時戰後の縣治を處理し、毫も遺漏なかつたから、岩村の聲名は一時に揚り、亂平ぐと共に中央政府に招かれて元老院議官に任ぜられたるを始めとし、爾來會計檢査院長、恩給局長、農商務次官等を經て、明治二十二年黑田内閣に入り、井上馨の後を承けて農商務大臣となつた。

弟の高俊も亦兄と同樣の徑路を辿り、戊辰の役に從軍して以來明治政府に用ひられ、明治七年佐賀の亂の時には、佐賀縣權參事として戰地に乘込み、逆徒に襲擊されて城内に立籠もること三日の後、圍を突いて脱出し、辛うじて一命を全うし勇名を傳へた人、後諸縣の縣令を經て貴族院議員となり、明治二十九年、兄の通俊と共に維新以來の勳功に依り男爵を授けられた

大東義徹

彼れが司法大臣になつたのも、政黨に仲間入のお蔭、時は明治三十一年六月憲政黨内閣の成立を見るに至り、例の大隈重信が浮び出て總理の地位を占めた、彼は嘗つて司法省の權少知事をした事があつたので、多少の法律智識はあつた外に、彼れは大臣としての貫祿を有つてゐた、侯大隈は早くも玆に著目してか、

擧げて司法大臣の重任に當らしめたと聞く。

父に就て劍道の朝稽古

大東は舊江州彦根の藩士で、天保十三年七月生れ、先考は小西新左衛門といつて、砲術を以て遠く其名を知られ居つた、父は却々嚴格な人で、子の教育に付ても夫れは〳〵極めて嚴重にやり居つた、朝早く起きては俗に朝稽古だといつて劍道の稽古に數番を試み、終つてから食膳に着くといつた風、夫が濟むと漢籍の素讀、斯くして毎日規則違はずやつたものである。

彼れ幼名は勘藏といひ、又大藏とも呼んだ、後に親戚の大東姓を冒して名も義徹と改めたのである、此時分藩には弘道館と名くる藩校があつて、藩士の子弟は何れも之に通つて勉强し居つた、偶々萬延元年に主君が櫻田の變に遭ふて、倒るるといふ大不祥事が勃發した、此時彼れは封事を奉つて大に奔走努力した、やがて維新革命後彦根縣の權少參事などになつた、彼れが官途に踏み入れた第一歩であつた。

早くも海外に着眼遂に洋行

役人となつて巾は利かしたものの、元より大志を抱く彼れは、これしきの事に滿足して居られない、將來有爲の地位に就くには、海外の事情を知つて置かねばならぬ、然かも漢學で練りあげた彼、コンナ事では融通が利かなくなるとかふ考えたのは流石卓見、折しも岩倉が全權公使として歐米に出かけると聞いて、先輩某を介して岩倉に賴み込み、漸く隨行役を仰付つた。

今では誰にも歐米視察なぞは金に任せて出來るが、其頃は政府もやかましくて容易に許さなんだ、處が日頃の念が叶ふて岩倉隨行を命ぜられたので、此機會こそ余が歐米の新空氣を吸收すべき時なりと、彼地に着いても隨行役はソツチ除け、彼方此方と飛び廻つて種々の調査研究同行の通辯をどの位困らしたか知れない、視察も終へて歸朝した時の彼れの面目、歐米の事情を知るは我一人と許り、到る處で見えを切つたとか。

西郷に與みしたとあつて獄に投ぜらる

明治十年には例の西南戰爭がオツ始まつた、朝野擧げての大騷ぎ、此時どうしたものか彼れは西郷の徒に與みしたといふ嫌疑を以て、とふ〳〵監獄にブチ込まれてしまつた、併しさう疑はれたのも無理はない、彼れは切りに西郷を崇拜し、西郷部下の秀才とも親しく交を結んでゐた、それが抑も嫌疑を受ける原因とはなつた。

嚴重なる取調べも濟んで漸く靑天白日の身となり、漸く赦免の恩澤に浴した、夫れから後は政治の爲に運動したが、やがて二十三年國會開設と伴ふ代議士選擧に、逸早くも立候補の名乘を揚げて首能く當選致した、由來改進黨から進步黨、憲政本黨と、對自由黨政友會を向ふに廻はしての政黨に、一廉の旗頭となつて力を致したのが、抑も大臣の地位を贏ち得る緣でもあり功でもあつた。

伯爵寺内正毅

寺内は一面に於ては、嚴正そのものゝ如き性格の人であつたが、他の一面には亦仁愛の人であり、公私の

利を明にした純粋の軍人肌の政治家であつた、彼が少壯幕府の征長軍と戰うてより、元帥の榮職に上るまで、出ては朝鮮統治の大任に當り、入りては内閣組織の大命を果し、至誠一貫國家の爲に、一身を抛つて御奉公申上げたのは、武人としても亦典型と言はねばならぬ、彼は第一次桂内閣の陸軍大臣となりしを始めとし、三たび陸相となり、次で朝鮮總督となつて、日韓併合を完成し、遂に總理大臣となつた。

頗る義氣に富んだ餓鬼大將

寺内は嘉永五年二月、山口縣吉敷郡平川村に生れ、幼少時代から他の村童に比べると脊丈高く、膂力があつて頗る剛情な腕白小僧であつた、それで平川村の餓鬼大將といはれ、年嵩の少年が皆甘んじて彼の命に服し、凧揚げの助手ともなれば河遊びの籃持ともなつた、春は群童を指揮して戰鬪の遊戯を爲し、夏は河童となつて同輩を深淵に苦しめ、或は脇差を拔いて他家の七夕竹を切り倒し、或は木登りをして其の輕妙を誇るといふ有樣、そして其の頃から豪膽の氣象が現はれて、子供喧嘩をしても勝たねば止まない、川で泳ぐ時なども、他の兒童は淺い所で泳いでゐるのに、寺内は必ず他の者よりも深い所を選び、又打集うて木登り遊びをする時には必ず上部の枝に上り決して下部に止まるやうなことはしなかつたさうだ、さうして自分等の惡

戯を咎めるものがあると、彼は自ら進んで其責に當り、未だ曾て罪を他の少年に嫁したことは無く、頗る義氣に富んだ性格を現はしてゐた。

何事にも其の特性を發揮す

家は極めて貧乏で、子供等のために銘々新しい衣物を造つてやることが出來ないので、母親は長子の舊い衣物を仕立直して寺内に着せた、寺内はこんな衣物は嫌だと不平滿々、食膳に就いても袖を引張つて見たり、襟をこすつて見たりして、いくら促しても箸を執らない、父親は其の剛情を矯めんが爲め、突然彼の襟首を掴んで庭前へ抛り出した、彼は庭前に轉んで擦傷を決して出血したが、默つて泣きもせず座に戻り、急ぎ飯をかき込んで門外へ遊びに行つた、爾後なりしと、兩々相對して眼に視るが如き感がする。

斯の如き剛情勝氣なる彼も、謹嚴なる母親に對しては極めて柔順で、能く其の訓へを守り、家庭に於ける彼は、戸外に於ける餓鬼大將とは思はれない程の、順良なる美少年であつた、彼

は手近なる氏神の神官に、商賈往來や實語經の素讀を習ひ、又村の儒者に就いて庭訓往來、中庸、論語の句讀を授かり、山口町の神官に經書を學び、習字を教はつたが、其の剛情勝氣なる性質は、學問に對しても人後に落ちるを恥ぢ、一生懸命に勉強したのであつた。

御楯隊に入りて文武を勵む

時恰も尊王攘夷の論四方に起り、多年勤王主義を把持せる防長二州に於ては、多くの志士が蹶起して京都に上り、藩内にありては士となく農となく、苟も憂國の志あるものは競うて銃を執り國難に殉ずる覺悟をしてゐた、幼少なる寺内は齡未だ志學に達せざれども、進んで農兵の群に入り、英武太皷を學んで、多くの壯丁に交り調練に餘念なく、暇があれば角力や擊劍などを勵んで、專ら體力の養成に努めた、多治比隊に入隊して俗論黨を討ち、始めて戰爭の氣分を味つてからは、品川彌二郎の御楯隊に入隊した。

元來長藩には尙文尙武の美風があつて、士家の子弟は明倫館で修業することゝなり、村田清風が政務に當るようになつてからは、一層斯學を奬勵して文武兩道の人才を養成した、故に

御楯隊に於ても、調練の餘暇には少年隊士に論語、孟子、詩經などを授け、これが監督には明倫館若くは松下村塾出身の青年を配して、文武の研修を怠らしめなかつた。

第一教導隊を卒業して任官

慶應二年正月幕府が長藩再征の軍を起すや、寺内は御楯隊士として小瀨川口に出陣し、大に奮鬪して幕軍を懾ました、そして本國に凱旋すると、三田尻の陣屋で專心文武を研修し、彼が漢書の素養と精神的鍛練とを積んだ、斯かる間に天下の形勢は急轉直下して、維新回天の端緒を開いた。

明治元年六月、朝廷奥羽征討の師を起すことゝなり、長藩に命じて在國の諸隊を海路奥羽に赴かしめた、此の時寺内は整武隊中の一戰士として、蝦夷遠征軍に加はつた、そして明治二年六月東京に凱旋して、一ケ月ばかり滯京してゐると、兵部省から佛蘭西式歩兵學修業を命ぜられ、京都河東の練兵場内假屯所に入る、それから大阪傳習所の新築工事が落成したので、そこに轉營することになり、始めて第一教導隊と命名された、彼は明治三年六月教導隊を卒業し

て、七等下士官を命ぜられた、當時に於ける卒業生の任官は、考科の如何によらずして、多くは其の人の年齢と、從前の階級とによつて決定せられ、彼より後れて入營したもので、一躍大尉に任ぜられたものなどあつたが、彼はまだ二十歳に達せないから下士官を命ぜられたのである、しかし當時の陞進は極めて速く、十一月には軍曹となり、翌四年正月には權曹長となつた。

留學を熱望して休職を強請

これより先、朝廷にては雄藩の壯丁を募つて、御親兵を編成するの計畫があり、薩藩の步兵四大隊と砲兵四隊、長藩の步兵三大隊、土藩の步兵二大隊、騎兵二小隊、砲兵二隊を以て御親兵となすに及び、寺内は御親兵五番大隊附に編せられ、同年八月には陸軍步兵少尉に、十一月には中尉に、更に五年二月には大尉に陞級した、時に彼は二十一歳で、此の榮位を贏ち得たのは異數であつたが、當時有爲の士官は海外留學を熱望して、小成に安んぜんとするものはなかつた、彼も亦海外留學を理想とせる一人で、東京に召集されてからは、新橋の或る床屋に下宿

して、築地に居留せる外國人に就き、熱心に佛蘭西語を研修し、約一ケ年の後には略ぼ會話も出來る程度に達したから、いよ〳〵佛國に留學しようといふので、山田兵部大丞の邸宅を訪れて休職を願ひ出た、すると大丞は切に其の不心得を諭したけれども、彼の操志は堅くして何うしても承知しない、そこで大丞も已むなく彼の軍籍を兵學寮に移し、休職として任意の行動を取らしめることゝした、彼は喜んで横濱に赴き、一意語學の修業をしたのであつた。

素志を達する見込は絶えた

ところが休職となつて一文も金の入る途がなく、故郷から學費を貰ふことも出來ず、僅の貯金で自活の道を求め、多くの洋書を買ふといふ譯で、語學の進歩すると反比例に懷中は益々不如意に陷り、京濱鐵道の乘車券を買ふ餘裕すらなきに至つた、以前整武隊の戰友であつた兒玉如忠等は、彼の窮境に同情して屢汽車賃を呉れたり、時としては料亭へ伴つて一夕の慰安を與へたりしたさうだ。

此の時代の寺内は、慷慨淋漓四邊を憚らざるの青年で、淺酌低唱、花に吟じ月に歌ふの多情

多恨の才子ではなく、牛飲馬食、寧ろ新橋の阿嬌を驚かした程の不粋漢であつた、そして物に感じて悲憤すれば、熱涙交々下りて帝國兵制の不備なるを痛嘆し、歐米各國の軍隊が横濱駐屯して、治外法權の下に我を輕蔑するを語りては、大聲歔欷して折角の酒興を白けさすことも度々あつた、そして何等の貯へもなき身の、自力を以て留學するなどとは、到底爲し得べからざるを思うて、彼は快々として樂しまざること幾月にも及んだ。

復職して士官學校の一幹部

豫て寺内の前途に望みを屬してゐた山田兵部大丞や品川彌二郎は、この機を見て懇々彼を説諭し、六年八月兵學寮中に戸山出張所を創設するに及んで、口を極めて復職を説き勸めると、寺内も先輩の恩義に感じて戸山學生となり、約一年勉學の後、七年七月陸軍士官學校の創設と共に、同校附に選拔せられ、十一月には同校生徒檢査官を命ぜられ、八年一月同校生徒司令副官に補せられて、西南戰役まで勤續した、即ち寺内は士官學校創設時代の第一次學生で、又士官學校創始時代の有力な一幹部であつたのだ。

彼は士官學校に就任すると、その職責としてまた慷慨悲憤の態度を持續することは出來ない身を以て範を示し有爲の士官を養成せねばならない、故に其の間臺灣征伐の事や、佐賀熊本の暴動ありしにも拘らず、頗る冷靜の態度を持して、一意育英の任に當つた、然るに西南の戰役起るに及んで、陸軍幹部の缺乏を訴へ、已むを得ずして士官養成の任務に當れる佐尉官をも狩り出して、一時出征軍又は補充部隊の幹部に充てることゝなり、十年二月、彼は後備歩兵第六大隊長心得に補せられた。

征討軍に加はり戰線に出た

此の任命を受けた二月二十八日は、西南戰爭の火蓋は既に高瀨口に切られて、第二旅團司令長官三、少將の負傷した翌日だつた、この後備歩兵第六大隊といふのは、大阪鎭臺出征後の補充大隊で、專ら紀州方面の壯丁を新募して編成したものだから、先づこれに新兵教育を授けその成熟するを待つて戰地に差遣する順序であるから、軍事教育に經驗ある寺内の如きは最適任者であるが、しかし寺内にしてみれば、國家有事の日に際して、何等訓練なき生兵を教養す

ることは、當年方に二十六歳の、血氣最も旺盛なる彼に取りては、眞に脾肉の嘆禁ずる能はざるものがある、そこで頻に先輩の間に運動して出征せんことを懇望し、在隊僅に一日にして其の職を辭し、神戸から乘船して出征總督府の後を追ひ、征討軍團附を命ぜられ、近衞歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊長として、始めて田原阪口正面の戰線に出た。

田原阪は敵が全力を盡して防禦せる自然の要害であつて、守るに易く攻むるに難く、而も敵軍一たび此の天險を失はゞ、熊本の包圍は忽ち敗れるところから、彼等の智將と仰げる篠原國幹が、この方面で戰死したにも拘らず、壘を高うし濠を深くして、殊死して防戰した次第で、征討軍も寄手の全力を此處に集中したけれども、戰況が少しも捗らない、然し之を突破して熊本城を救はねば、谷少將以下を見殺しにするやうな形勢に陷る、如何に多くの犧牲を拂つても此の天險を攻陷すべく軍議を決したのであつた。

敵壘に突進して彈丸に傷く

寺内の向つた田原阪の攻擊正面は、最も不利なる地形であつて、號令一たび下れば萬死を覺

悟し、彈丸雨注の難路を攀ぢ登つて、賊壘に突進しなければならない、其の困難は實に言語に絶したものがある、しかし寺内は此の困難に處して益々勇氣を鼓舞し、六日六夜連戰奮鬪の後軍團司令部から總攻擊の命令が下つたから、彼は部下中隊の眞先に進み、右手に軍刀を振り上げつゝ阪上目がけて突進する刹那、敵の射出した一彈は忽ち彼の右上膊を貫いて臂骨を粉碎し覺えず軍刀を取落した、急いで之を拾はうとしたけれども、もう右手は痙へて用をなさぬ、やつと左手を伸ばして拾ひ取らうとする折しも、復たもや一彈飛來して彼の右胸鎖骨を挫き、鮮血迸つて戎衣を染めたので、茲に始めて其の身の負傷したのに氣づくと共に、最早右手の自由も失つてゐるので、大隊長の切なる勸告に從ひ、戰線を離れて一先づ假繃帶所に退いた、當時の假繃帶所は唯出血を止めて繃帶を卷くだけで何等の手當も加へず、負傷せる將卒は附近より强制徵發した農夫に命じ、畚に載せて之を軍團病院に後送する、其の間に疵は爛れて手術をせねばならぬやうになるのが多い、又軍團病院といつても甚だ不完全のもので、重傷者なると高瀨船で一旦患者を長崎病院に送り、更に病院船に載せて大阪臨時病院に送り、そこで手術を行ふといふのだから、大抵疵が膿化してしまふ有樣であつた。

武人金錢を愛する勿れ主義

かくて寺内は三月十七日に負傷して、四月十日に大阪臨時病院に收容されたので、將に右手を切斷せられんとする場合に立至つたが、石黑病院長監督の下に、佐藤博士の執刀で膿化した局部を切開し、粉碎せる骨片を除去して之を癒合せしめ、幸に大手術を免るゝを得た、寺内が不具の身とならずして現役に留まるを得たのは、全く佐藤進博士の措置其の宜しきを得たが爲めである、彼が入院中、後備歩兵大隊長心得であつた人々は、皆少佐に陞叙されたので入院將校中には不平を唱へる者が多かつたが、彼は之を慰めて曰く、

『進級の遲速は決して氣にかけるには及ばない、功勞のあるものは早晩擢用される時があるから、諸君靜に其時機を待ちたまへ』

と、同僚をして其の宏量に悅服せしめた、間もなく亂平いで、十月二十二日退院すると東京に歸り、近衞歩兵聯隊附を免ぜられて、士官學校生徒司令副官に復職し、翌年六月西南戰役の功に依り、勳五等に叙し金五百圓を下賜された。

爾後寺内は右手の自由を失ひ、擧手の禮も左手でやる狀態となつたが、建康は全く舊に復し一時金は飲んで食つてしまつた、武人錢を愛するは彼の最も擯斥するところで、此の主義は大臣大將になつた後までも毫も渝るところなく、其士官を養成するに當つても、切々として此點を訓誡したさうだ。

伯爵 平田東助

第一次桂内閣の農相となつて、農相だけの新らしい試みをやり、次で第二次桂内閣の内相となつた時は、内閣の中心人物として活動し、その後しば〳〵平田内閣の出現說さへ傳へられたが、惜むらくは蒲柳の質、自ら進んで難局に立ち離きを知りて之を避けた、彼は家計豊かならざる士族の家に生れ、半ば苦學して獨逸留學生となるの道を開き、ドクトルの學位を受け、法學博士の肩書もあり、學者としても立派に成功する人物であつた。

成長を危まれた幼時の虛弱

平田は舊米澤藩士で、幼名を榮二といひ、嘉永二年三月、羽前國米澤信夫町の伊東家に生れ

七人兄弟の六番目である、八歳の時藩醫平田亮伯の養子となつたが、後故あつて、明治十一年兩家合意の上離籍し、別に一家を立てたので、彼の家は東助が始祖となるわけだ。

生家の伊東家は伊豆の伊東から出で、其子孫が上杉景勝に仕へ、上杉が轉封の時、之れに從うて會津から米澤に移住したのである、伊東家は代々醫者で、平田の父は文政年中長崎に遊學し、當時和蘭の醫官として來朝せる獨逸人シーボルトに就いて醫術を學び、併せて西洋の文化を玩味した新人であつた。

平田は幼時極めて虛弱な體格で、おまけに度々病氣に罹り、生命に關する程の大患にも罹つたが、十歳前後から段々健康體となつて、兩親も大に安堵したといふ話だ、斯んな風に身體は弱かつたが、天性穎悟、一を聞いて十を知る底の神童と云はれ、平生の擧動は恰も大人のやうな落ちつき振り、然も友達などが不德のことをやると、毫も假借するところなく理非を說き聞かせて、其領會するまでは承知しなかつたさうだ。

父に隨うて修學の爲め上京

七歳の時興讓館に入學した、此の學校は鷹山公の時細井平洲を聘して再興したもので、士族の子弟を敎育し、年々其の學業を試驗し、藩主自ら講堂に臨んで、試驗及び褒賞を行つたものだが、平田は在學九年の間、何時も優等賞を受けた、卽ち十五歳まで此校に學んで、左國四卷及び歷史綱鑑補を修め、又本朝の歷史などを讀み覺えた、ところが元治元年父は上杉公の近侍に登用せられ、其頃藩主は江戸在勤中であつたから、米澤を發して上京することゝなつた、そこで平田は此の好機會に於て江戸に出で、尙ほ一層の修學をしたいと考へて、頻に父母に乞うて漸く許され、父と同道して米澤を發足した。

九月の末江戸に着して、上櫻田にあつた藩邸に入つたが、其隣なる毛利邸が恰も三日前に幕府の手に依つて燒き拂はれ、金穀までも沒收されて、留守居及び家來が自殺したやうな譯で、一面の燒跡には、尙ほ諸所燃え殘りの煙があがつてゐたくらゐで、卽ち幕末騷擾の際であつた

幕末騷擾に災されて歸藩す

平田は着京の翌年三月、父の許しを得て古賀謹堂の門に入つた、そして其の年十二月まで

在塾したが、其の間僅に十ケ月に滿たない短日月ではあつたけれども、彼の生涯に取つて非常の利益を受けた、十六歳の少年で、然も足一たびも國境を出たこともない身にして、今は普く各藩の人と交り、互に切磋琢磨し、坐して天下の形勢と各藩の事情とを聞知することを得、又書を讀み文を作るの外に、日常接觸した事物の頭腦を刺戟した其感化は、頗る大なるものがあつた。

これより先、父は藩主に扈從して米澤に歸つたが、母親は是非一度歸省せよと申越すので、彼は遺憾ながら十二月に古賀を辭して一應歸藩し、慶應二年十八歳の春再び江戸に來た、此の時に當り薩長の連合成立して討幕論盛に起り、幕府は諸大名の歡心を買はんが爲に、これまで人質として其妻孥を江戸に居住せしめた制を解き、國許に歸らすことゝしたけれども、今更こんな緩和劑で膏肓に入つた大病を救ふに由なく、物議騷然、人心安定を缺き、各藩の大名並に諸臣も、皆私に國許へ引上げるといふ有樣であつたから、平田も亦それに倣うて、二たび米澤に歸ることゝした。

洋學修業の建議書採納さる

明治二年米澤藩は大に藩政の改革を行ひ、洋學を奬勵して將來發展の策を立てたるが、平田は時勢に察するところあつて、國老千阪高雅に建議書を出した、其要旨は、

『我藩曩に順逆を誤つて王師に抗し、藩の歴史に大なる汚點を遺し、殊に近年の變局に際して容易ならざる失費をなしたるも、更始一新の今日、徒に往事を咎むるも益なし、今や宜しく大に文明の學術を講じ、他の長を採つて我が短を補ひ、以て將來の回復發展を期せざるべからず、米澤は東北山間の僻地にして、一藩の富力を進めんには、鑛業開發を措いて他に策あるなし、而して鑛業の開發を圖らんと欲せば、泰西の技藝を講ぜざるべからず、之を爲すがためには、洋學を開くを以て急務となす』

といふのであつた、ところが幸ひにして彼の建議は採納せられることゝなつて、藩論一決、平田と内村良藏の二人が選ばれて、洋學修業の命を受けた、時に平田は二十一歳であつた、これより以前戰時中に洋學修業の議があつて、偶江戸から來た渡邊洪基を聘し、假に十數人の

書生を選び、英學を修めさせたが、平田は其のうちの一人に選ばれてゐた。

大學の南校に入り英學を修む

明治二年五月上京して麻布飯倉の中屋敷に入り、藩から聘したところの教師に就いて英學を學んだが、此時には四人の同學生がゐた、當時我國に於ては英書に通ずるもの極めて少く、蘭書を讀むものが、僅に其大約を辭書に依つて講究するといふ有樣で、平田の如きも鄉里に於て渡邊から少しばかり學んだくらゐに過ぎない、そして當時主として修業すべき所は、大學南校か又は福澤の塾より外になかつたから、遂に藩の許しを得て大學南校に入つた。

當時の大學は漢學、洋學、醫學の三部に分れ、漢學部は昌平黌を以て之れに充て、單に大學と稱した、洋學部は開成所を以て之れに充て、大學南校と呼ばれ、又醫學部は醫學校を以て之れに充て、大學東校と稱せられて居た、南校の主宰者は大學大丞加藤弘之で、將來是等が合して大學となり、卽ち今日の東京帝國大學の本體となつたものである。

少舍長に任ぜられて大阪へ

その時分の同級生には佐賀日向の人が多く、天下國家を論じて、時には夜を徹することも珍らしくはなかつた、其頃佐賀の人士中、舍長の職に在つたものが二人、日向飫肥伊東の藩士小倉處平なる者も舍長であつて、殊に平田と懇意であつた關係からか、平田は翌三年の春計らずも少舍長に任ぜられた、彼は其の不意に驚き、且學業に專心せる際に、斯る職を奉ずるのは不本意であるから、固く辭退したけれども聽されないので、仕方なく其の命に從ふと、小倉處平と共に大阪開成學校勤務を命ぜられた、この學校はもと何禮之及び其の高弟たる星亨等が、私塾を開いて英語を教授した校舍を、新たに政府直屬の學校とし、平田は博士となつて、星も教授の列に加はり、南校の舊名たる幕府の開成所なる名を移し唱へたもので、校長は中島永元であつた、平田は此の學校に勤務中特に記すべきこともなかつたが、舍內に於て頻々と起る盜難事件を摘發して、自己の責任を全うしたことがあり、それは彼が始終推測を以て押し通し、大岡裁判を實地に試みて成功した痛快事であつたさうだ。

學制改革を主宰者に强請す

此年の秋平田は東京に召還されて南校に勤務すること丶なつた、時に同僚には井上毅、丹羽龍之助などが居た、小倉處平も亦南校に召還されて彼と同僚であつたが、何と云つても井上は同僚中の首席で、且つ才學と云ひ人物と云ひ、同僚中の白眉で殊に年長者であつたから、平田は井上を畏友として最も親懇な交りを結んだ、此の年の七月には政府が大に文明教育を施さんとして、各藩から十五萬石以上三人、五萬石以上二人、五萬石未滿一人づつ、十六歳以上二十歳までの人材を選拔し、貢進生と稱して南校に入らしめたので、南校は一時天下人才の淵叢、文化の源泉たる盛觀を呈した、小村壽太郎、鳩山和夫、古市公威、穗積陳重等知名の士が、貢進生として始めて新教育を受けた。

平田は井上毅と相談して、三百名の學生を團結し、學制改革の議を首唱し、南校の主宰者に强請したが、其の團結力頗る强く、頑然固執して動かず、主宰者も殆ど持餘し、何時如何なる椿事か爆發するやも知れざる有樣となり、一時風雲頗る急なるものがあつたから、山口中辨が太政官より派遣されて鎭撫の事に當り、平田と井上は共に一團の學生を代表して應接し、舌鋒頗る鋭く、終日論難したが、終に何等の決を見ずして相別れた。

舍長の職を辭して南校を退く

間もなく大學から海外留學生を派遣することゝなり、平田よりは下席の丹羽と小倉の二人が其の選に中つて、此年十二月舍長の現職を以て洋行を命ぜられた、平田は豫てから海外遊學の志望を懷き、遊心方に勃々たる際とて、何とかして其の選にあづからんものと、諸方面に必死の運動をやつたが成功しなかつた、すると或人から、山口中辨に賴むのが一番宜からうと言つて紹介狀をくれたものだから、早速山口を私邸に訪問したが、不在と稱して面會謝絶、然し平田は根氣よく訪問すること六回に及んだのに、何時も空しく門前拂ひを食はされるばかり、それでも彼は面會せざれば止まざる決心で、一夜新橋の宿屋泊つて、まだ夜の明けないうちに起出で、提灯で道を照らしつ丶、山口の築地の私邸へ辿り着き、曉露に曝されつ丶門前に立つて、門の開くのを待つてゐた。

間もなく夜が明け放れて門も開いた、面會を申入れると、山口も朝がけの不意討には拒絶の辭なく面會を許した、然も猶口を公用の多端に藉りて、爰時ならでは面會せずとのことに、流石辛抱强い平田も此處に至つて堪忍袋の緒が切れた、彼は取次の者を睨めつゝ、

『予は前後六回も訪問して、毎時門前拂の辱めを受けながら、猶ほ之を忍んだ所以のものは自分一身の爲のみにあらずして、國家に關するものがあるからだ、今日は實に七回目の推參で、やつと面會を承引されたるも、國家の大事は寸分の時間にて論じ盡されるものではない、爰時の面會ならば當方よりお斷りいたす』

と言ひ放つて、決然として辭し去つた、これは前に山口中辨と學制改革問題で論判し、山口に屈せざりし平田をば危險視した結果であらう、斯くて平田は不平滿々、一日も現在の位地に安居するを欲せず、將來の大成を期して舍長の職を辭し大學南校を退いたのは、明治四年五月であつた。

露語研究に志した彼の眞意

それから彼は前途の開展を講じ、露國語を學ばうと志したが、幸に外務省に於て洋語學所を設け、英佛獨露等の外國語を講じ、露國人をも聘して居たから、平田はそこへ入學を出願すると、都合の好いことには所長が渡邊洪基で、先年米澤で英學の手ほどきをしてもらつた緣故のあつたところから、渡邊に會うて彼の志望を打明け相談したが、渡邊は深く同情の意を表し、大に盡力しようと言つてくれた。

平田は英學の素養があり、且つ大學南校で舍長たりし經歷もあるので、渡邊は平田を英語科の教師とし、且つ生徒監督を兼ねてくれとて、其の就職を勸誘した、しかし平田は前途の爲め深く決心するところがあつたから、固く辭退して露語科の學生となつたが、渡邊は切に前言を繰返して懇に依頼したものだから、平田も遂に其の言に從ひ、露語研究の傍、英語教授の依囑に應じて毎月二十圓の報酬を得、之を學資に充てゝ勉學にいそしんだ。

元來彼が露語の研究に志した所以は、當時露國南下の勢ひ益々甚だしく、黑龍江一帶の地方は既に之を占有して、東方經營に餘念なく、殊に幕府以來の宿案たる樺太境界論未だ決せず彼は一介の書生に過ぎざるも、東方問題いよ〳〵緊迫して、何時破裂するやも測られざるを憂

慮し、彼國の事情を究めて、他日有事の日に備ふるところあらんとの、遠大の考へから出たものであつた。

北門に鎖鑰論と露國留學懇請

然れども國内に蟄居して單に露語を研究するだけでは、隔靴搔痒の憾みがあるので、如何にもして彼の國に留學し、實地に就いて研究せんと焦慮したが、時機未だ到らずして荏苒時日を經過するうちに、恰も好し岩倉具視が特派大使として歐米に派遣さるゝことゝなり、その準備の事務は外務省で執つて居たから、平田は好機逸すべからずと爲し、一篇の『北門鎖鑰論』を草して、深く其の室に入りて其の直相を究めざれば、鎖鑰の鞏固得て望むべからず、宜しく大使の一行と共に、留學生を露國に派遣せらるべしと論じ、渡邊所長の手を經て大使に建言し、且つ自分が留學生の選にあづかんらことを請うた、而して一方には井上馨を私邸に訪ひ、東方問題を論陳しようとしたが、紹介狀も持たないでは面會が出來るかどうか判らない、頗る不安に思ひつゝ訪ねてみれば、意外にも直ぐ引見されて、平田は大に勇氣を得、慨然として北門鎖

鑰の急務なるを說いたところが、幸にも井上は平田の說を容れ、且つ彼を留學生として推薦することの請願をも快諾してくれた。

それから四五日經つと、岩倉大使から召されたので、平田は雀躍して參邸すると、岩倉は平田の說を嘉して、露國へは舊公卿の子弟中より俊秀の青年を選んで、留學せしめることに決定してゐるから、其の監督者として隨伴留學を命ずる旨を約束した、但し事未發に係るから、深く秘密にして置くやう諭されて岩倉邸を辭去した。

先輩の忠告で留學地を變更

斯くて明治四年十月、太政官より露國留學の命を受け、岩倉大使一行に隨つて出發することとなり、舊公卿の子弟にして露國留學を命ぜられた清水谷實英の保護監督を內命された、大使の一行は岩倉大使を始め、木戸、大久保、伊藤、山口尙芳の副使及び、大使附屬書記官並に各省理事官等、大小官吏四十八人、歐米各國留學生は五十餘名で、大山捨松、津田梅子等四名の婦人も一行と同伴したのであつた。

一行は桑港に着し、それから英國に渡り、更に佛國より獨逸に向ひたるが、時に平田は二十三歳で、舊公卿の子弟は皆年少者、姉小路の如きは十三歳の坊ッちやんであつたから、一行の保護役たる平田の骨の折れること夥しい、そして無事伯林に着いたので、代理公使の青木周藏を訪問し、又留學中の品川彌二郎や大山巖に會つて、いろ〳〵話を聞いて見ると、依然未開の域を脱せざる露國に留學するよりは、新興の勢ひ隆々たる獨逸に留まるのが、賢明な處置であると悟つた、それで伯林に留まつて文明の科學を修得し、露國の如きは學成りて後、巡遊視察すれば十分だと決心したが、しかし官命があるので勝手氣儘に變更は出來ない、どうしたものだらうかと相談すると、青木と品川が、うまく岩倉大使に具申してやらうと引受けてくれてやがて大使一行が倫敦に着し、兩人は召命によつて訪問することゝなつた際、都合よく話をしてくれたと見えて、數日の後、駐英辨務使の名を以て、留學地變更の辭令を呉れた。

恩師の一言は彼が終生の箴

いよ〳〵伯林に留學することゝなつて、明治六年の夏までは語學と普通學とを修め、秋になつて伯林大學に入り、先づ政治學の研修に着手して、當時有名の碩學グナイスト、ワグネル兩博士の教を受け、翌年の夏にはハイデルベルヒ大學に移り、冬にはライプチヒ大學では、是等諸科の外、商法國際公私法民法政治財政經濟の諸科を學んだ、但しライプチヒ大學に轉じ、を學び、又經濟學は當時有名な經濟學の泰斗ロッシエル博士の講義を聽いた、それから八年の春には再びハイデルベルヒ大學に入り、其の年の冬試驗を受けて、第二等の及第でドクトル・フイロソフイーの學位を授けられた、ハイデルベルヒ大學の教授ブルンチュリー博士は、當時歐洲に於ける政治學國際公法學の大家として、名聲一世に高く、その著書は各國語に譯せられて、何れの國人も知らざるものなき程の碩學で、平田は特にその愛顧を受け、常にその邸に出入して、講義以外の教へをも受けた、平田が歸朝するに際し、將來の訓戒を博士に求めたところ

『國家の事は飜譯にては不可なり』

との一語を與へられた、平田は此の語を體認服膺して自ら箴め、事に應じ物に接して此に注意するを怠らなかつたといふ。

品川子の高義て恙なく歸朝

明治九年一月業を卒へて、ハイデルベルヒを辭して伯林に至り、品川彌二郎と同行して歸朝した、當時獨逸に留學する者前後八十餘人、醫學を除くの外、政治の學に於てドクトルの學位を得たのは平田が第一人者であつた、その時獨逸の各新聞は、日本人にして我が大學の政治科を卒へ、學位を受けたのは獨逸の名譽だと言つて、口を極めて稱揚した、品川は伯林から祝電を發し、相伴うて歸朝すべきを約したのであつた。

元來平田は、太政官から辭令を受けて留學したのだが、其の後留學生は文部省の管轄に移され、次で朝議一變して留學生を召還することゝなつて、平田も亦受命者の一人であつた、ところがモウ一年經てば卒業するのに、中途退學するといふのは甚だ殘念だ、九仞の功を一簣に缺くに忍びないと、同志諸友と謀り、如何なる艱苦を冒すも業を卒へざれば歸朝せずと誓つて、鄉地の父親に手紙を送り、決心の程を述べて學資の補助を乞つた、すると父も喜んで之を許し、七百圓だけ送つて來たから、これと政府から歸朝旅費として貰つた金とを以て學資に充て、極

めて費用を節して殆ど一年半を支へ、芽出度く卒業した、これより前、歸朝旅費を學資に充てれば、卒業を歸朝の曉に旅費の出所がないからといふので、伯林へ行つて青木公使に訴へ、恩借を申込んだが、制規が許さぬからと言つて言下に拒絶され、全く弱つてしまつて品川彌二郎の所へ相談に行くと、品川は、君が卒業は間もないことで、卒業さへすれば旅費の如きは心配いらぬ、俺が引受けるとの厚誼に、平田は勇氣百倍して學に勵み、能く好成績で學位を受くるを得た、平田は品川の高義に感じ、自分の成功を得たのは全く品川のお蔭だと感佩して居たさうだ、彼の夫人は品川彌二郎の養女である。

貴口達かりし平田ドクトル

當時我が國にては英佛の學問が盛んで、獨逸の文物は未だ深く邦人に知られず、政府も世人も、獨逸は唯だ兵學醫學のみが發達し、其他の學術に至つては遙に英佛の下風に立つものとして、之を顧みないといふ有樣であつたから、獨逸の大學で政治法律の學を修めたドクトルは、容易に政府に採用してくれない、仕方がないから平田は一時親父の脛をかぢつてゐたが、偶、

衛生局長長與專齋から、衛生警察の飜譯を頼まれたので、浪人生活の無聊を慰めるべくそれに從事してゐた。

其頃華士族の祿制を改め、俸祿を公債に換給するの議起り、其制度方法に關して木戸內閣顧問は深く心配し、品川彌二郎に相談した、すると品川は大學雇教師の獨人マイエットを推薦して調査に從事せしめ、平田をその通譯として採用すべく勸めた、そこで彼は品川に誘はれて始めて木戸顧問に面謁し、これより木戸とマイエットの間に介して通譯もやり、又諸種の事項を調査したこともあつた、尋で內務省御用掛から大藏省御用掛となり、飜譯課長となつた。

柴田家門

酢屋の悴に生れ、學問が好きで周防の山口から長州の萩へ引移つたといふ程の熱心家、おらが首相の田中義一と同塾に學び、學事は何時も一頭地を拔くの田來榮に、負け嫌ひの田中に妬まれて、ひどい目に遭つたことさへある、彼は始め軍人を志願したが、其體格に顧みて心機一轉、苦學精勵能く大學を卒業して、官界畑の人となり、內閣書記官長に累進し、遂に文部大臣の榮職に就いたが、今少し天壽を保たせてやりたかつた。

田中義一と同塾に學んだ

柴田は文久二年周防國山口町の近郊大內村に生れ、幼名を甚之丞といつた、家は代々近在に聞えた豪農であつたが、彼の父親は維新後山口町に出て酢の製造を始めた、そして山口酢と名づけて一時は非常な勢ひで賣り出してゐたが、開店後久しからずして父親が病死し、まだ十五歲であつた甚之丞が、その後を繼いで經營してみたが、なか〳〵思ふやうに行かないので、到頭思ひ切つて閉店し、一家擧つて萩町に引越し、平安古に住居して、柴田は學問で身を立てようと決意した。

當時萩町には、同町出身の傑物といはれた石部誠中が漢學の私塾を開いてゐた、柴田は其門に入ると一つ年下の田中義一、後の政友會總裁內閣總理大臣となつた男も同塾に居て、此二人は誰れよりも能く氣が合つて、所謂刎頸の交りを結んだ、彼は隨分の才物で、學問にかけては何時も田中より一頭地を拔いてゐた、それに商家に育つて、幼少の頃から父親の代理に賴母

子講の入組などの會席にも勤めて來てゐるので、人を扱ふ呼吸も知り、如才なく立廻るから、塾の先生にも可愛がられてゐた。

活きた學問と身體の鍛錬

石部誠中は幕末に於ける勤王の志士で、王政復古の大業に馳せ參じて功勞のあつた人、後明治政府に仕へて岡山縣權令兼判事とまで累進したが、先輩たる木戸孝允と折合が悪しく、遂に官を辭して鄉里萩町に歸り、鬱勃たる雄心を押へて靜に世態の推移を窺つてゐた、彼は公爵桂太郎の從兄に當り、達識高邁の君子人として鄉人の崇敬の的となつて居た、其時はまだ三十八といふ働き盛り。

石部は塾生を敎養するに細心の注意を拂ひ、死んだ學問は何の役にも立たぬとて、時々刻々に起る社會の活事實を捉へては、聖賢の遺言を引證して講義するといつた風で、又これからの世の中に立つには、體格が劣つてゐては國家の休戚に任ずることが出來ないといふので、體育の奬勵に努め、米搗き薪割りなどを自分が率先して遣り、前庭に土俵を築いて、閑があれば塾

生を相手に相撲を挑み、氣が屈すると所かまはず高聲に詩を吟じて、塾生にもこれを勸めた、又彼の前任地なる岡山で、小松原英太郎が主宰して發行してゐた近時評論といふ、民權思想を皷吹した雜誌を愛讀し、其文中の記事を引用して講義を聞かせ、中にも小松原自身の執筆した『卑屈社會の眠りを覺ます』といふ一文の中にあつた『生きては雄圖四海を蔽ひ、死しては芳名萬世に傳はる、是れを之れ眞男子と謂ふ也』といふ句を引いて、男子の本懷須く斯の如きであらねばならぬと敎へた、柴田は十七八歳の時斯る敎養を受けたのであつた。

日本の將來を憂ふる大見識

或日のこと、柴田と田中義一と今一人の學友山田作熊といふ三人が、將來如何にして身を立てるかと云ふことに就いて相談した、石部先生の如く文官として身を立てようといふものもあり、イヤ立身するには陸軍に限るといふのもあつて、種々議論を鬪はした揚句、結局軍人として國家に御奉公申上げるといふ事に一決し、之を先生の石部に諮ると、石部が言ふには、

『貴公等が敎導團に入るといふことも惡くはあるまい、併し靜に世の中の趨勢を察するに、

現在の儘推移するとしては、日本と支那とはどうしても確執を免れまいと思ふ、七百年の變態の政治が、天朝樣の御聖德で、親政に復し、今や漸く中央政府の基礎は確立し、國民は泰平に惠まれてゐると考へたら大間違ひだ、

東亞の形勢は時々刻々に險惡化しつゝある、殊に最近に至つて朝鮮が殊更日本に向つて楯突かんとする態度が仄見える、これは支那が背後にあつて暗々裏に尻押しをして居るからだ、さうして支那は朝鮮に對して思ふ三昧の暴狀を振舞うて居る、恰も屬國扱にしてゐるではないか、若し朝鮮の獨立を他國から脅かされることがありとせば、日本に取つては由々敷大問題である、

斯る現狀に直面して居りながら、政府當路の人を始めとして、國民一般が此事に無關心のやうに見える、日本の將來を脊負うて立つべき青年は、然も日本の安危休戚に意を致すものは支那の實體を研究し、實情を極めて置く必要があるではあるまいか、我輩は貴公等にさうせよと指圖する譯ではないが、今此際に教導團へ入つて御奉公するといふよりも、寧ろ暫く志を屈して支那に赴き、隱忍以て彼の國情を究め、一朝國家有事の日に、此方面から御奉公申

上ぐるといふことも亦男子快心の事ではないか、今に於て此處に着眼して置かねば、所謂國家百年の大計を誤るに至ることは明らかだ、

幸に支那には全權公使として宍戸璣が駐劄してゐる、宍戸は此萩町の出身ではあり、殊に我輩とも舊知の間柄ぢや、若し貴公等が乘出して行くとなれば、相當な便宜は與へてくれるであらう、又支那に行くとしても、當分は長崎あたりへ行き、新しき文物に觸れて置く必要がある、何と云つても長崎は海外の新空氣を吸ふ咽喉の地である、今日にでも君達にその意があるといふなれば、長崎にも友人が居るから、彼地の便宜を計つてあげる』

言々剴切、石部が始めて三人へ打明けた前途の指示は、時勢を達觀し日本の將來を憂慮した大見識であつた。

藩公の學僕に召されて上京

餘りに突然に起つた此大問題に對して、それを決行するか否やで、毎日の如く三人は額を鳩めて協議した、しかし思ひ切つて支那行を決するまでには、若き人達の胸に樣々の前途が畫か

れて、容易に定まらないところへもつて來て、東京高輪の毛利邸から木戸家へ向けて、心利いた相當教養のある學僕が必要だから、誰か適當の者を寄越してくれとの通知があつた事を聞いて、柴田は或は勉學の便宜がありはせぬかと心得、毛利家の召に應じて上京した、年上の柴田を失うた田中と山田は、生れてからまだ兩親の膝下を離れたことがなく、躊躇してゐた折柄だつたから、支那行は一時立消えの姿となつた。

東京に出れば勉強が出來ると思つて、喜び勇んだ柴田が毛利家に仕へてみると、朝夕來客の迎接に忙殺されて、勉強などは思ひもよらぬ境遇に失望し、到底留る場所でないと考へて、それでも半歳ほど勤めると、今少し鄕里で勉強してから再び上京しますと、暇を貰つて歸つて來た。

支那行の前提に先づ長崎へ

恰度其時田中義一は、父親の勸めによつて石部先生の意見に從ひ、支那行を斷行することゝなつて、先づ長崎へ行かうといふので旅行の準備も終へ、出發の日柄を相談してゐるところで

あつて、山田作熊も一緒に行くのだと聞いた柴田は、君達が長崎へ行くとあれば、僕一人が萩に留まつて居ても仕方がないから、僕も長崎へ行かうと言ふと、田中は、それでは先生に紹介狀を貰つて來たまへと勸めるので、柴田は、

『イヤ、それは先生に心配を掛けさせに行くやうなものだ、旅費は僕の手で何とか出來るし又長崎へ行けば、僕の緣者に長崎裁判所の判事をしてゐる人が居るから、僕はそれを便つて行くことにする』

といふので、忽ち相談は纏まり、直ぐ旅行の支度にかゝつて、明治十二年四月、彼が十八歳の時、長崎をさして出發したが、三人の中で旅に慣れてゐるのは柴田一人で、彼は此一行道中の指南役と云つた態であつた。

頼る人なく福岡へ引返す

當時の長崎は日本に於ける泰西文化の吹き入るゝ唯一の窓口で、世界の新文明に接し、世界の大勢を知らんとするものは、皆悉く長崎に學んだものだ、そして在來の東洋の學問にのみ

拘泥し、世界の大勢に通曉せずして說を爲す者を固陋派と云ひ、又世界の新文明に觸れて泰西の學に通ずる者を開化派と呼んで、兩々相持して論難攻擊したものであつた、石部先生が支那行に事よせて、長崎へ三人を赴かせたのは、長崎に於て世界の大勢を知るの便宜を得させようとの意中であつたことは明らかで、支那の研究は第二の目的に外ならなかつた。

無事長崎へ着いた三人は、宿舍に旅裝を解く暇もなく、直に目的の人を訪ひ、長崎滯在中の身の振方を賴まねばならなかつた、そこで各々目ざす家を訪問して、田中と山田は石部の紹介してくれた家に落ちつくことになつたが、柴田の緣者といふ人は、福岡裁判所へ轉任の後であつたので、他に賴るべき知人もなく、暫く福岡へ引返して再擧を計ることにし、兩人に別れを告げて長崎を引上げた。

心機一轉して大學に入る

柴田は福岡で勉學して、機會の來るのを待つてゐたが、意外にも支那駐劄の宍戸全權公使は急に歸朝することになつて、支那には他に便るべき人がなかつたので、支那行の希望は水の泡

と消え去つた、そこで柴田は福岡を去つて再び上京し、遂に大學に入つたのであつた。

彼は石部の塾で軍人を志望してゐたが、どうも其體質が軍人に不向であることを悟つて、心機一轉、東京に出でゝ志を立て、未來の大臣宰相を胸中に畫いて苦學精進の結果、其初志は報いられて內閣書記官長となり、文部大臣の榮職にも就いた、彼は官僚畑の人として、其晩年は頗る振はなかつたが、天若し彼に假すに今暫くの壽を以てせば、尙且偉大なる功績を國家の爲に貽し得たかも知れない。

子爵 堀田正養

堀田が貴族院議員から第一次西園寺內閣に入つて、遞信大臣となつたことは、稍舊大名の爲に氣を吐くに足るものがあらうが、有體に言へば、同內閣が堀田の手腕才識に惚れ込んで、無くてはならぬ人材として入閣を懇請したといふ譯ではない、言はゞ上院操縱の傀儡師として、便宜上雇入れられたに過ぎない感がある、彼は明智なれども學問なく、機敏なれども大政治家としての一定の識見抱負あることを聞かぬ、彼は徒に名利に汲々として、一伴食大臣の空位を擁するを辭せなかつたのではあるまいか、

小さいながらも城持の大名

堀田家は加賀正威を祖とし、それより七代を經て正養に及んでゐる、初め正威は武州川越の城主であつたが、後信州松本に移され、更に下總佐倉に封ぜらるゝに至つて、祿十二萬石を賜つた、然るに上野介正信の代に至り、幕府を非議した爲に所領を沒收されて、一時民間に流浪することになつたが、其子駿河守正朝の代となつて、幕府から特別の思召を以て、江州宮川に封ぜられ、祿一萬二千石を賜つて、漸く家名を再興することが出來た、正朝は必ずしも英明の資といふにはあらねど、深く幕府の恩に感じ、人材を登庸して藩政の改革を行ふと共に、幕府に對して努めて忠誠を勵んだところから、次第に將軍家の御覺えも目出たく、小藩ながらも藩風が稍振ふに至つた、さうして正朝が歿して以來、歷代の主いづれも英明にして能く中興の業を守つた爲に、何等の過失もなくして正養に及んだ。

陰謀家で虛名を得るに汲々

由來江州の地は、風光の美によつて天下に其名を稱せられてゐるが、その風光を作る琵琶湖の存在によつて、國內自ら東西南北の四區に分劃せられ、人情風俗各特質を異にしてゐる、卽ち湖西人の質朴なるに反し湖東人は敏捷にして才氣に富み、所謂近江商人の本場となつて居り、又湖北人は山間的氣分を負うて、多少猜疑の念が深いのに比し、湖南人は京都に近く、其感化を受くる結果として、自ら人情の浮薄なる等、一國中に於て斯の如く別個別樣の趣を有し、而も其區別の截然として明かなるは、他府縣に見る能はざるところである、彼の增島六一郎や、大東義徹や薩摩治兵衞の如きは、湖東人の氣質を遺憾なく發揮し、杉滿文臺道士が湖西膳所の出身で、其名利に恬淡にして、事を處するに眞面目なるに比して、東西人の氣質の餘りに輕輕あるに驚かされる。

然らば湖東と湖北との殆ど中間に位する、堀田家の舊領宮川の人情如何と言ふに、隣藩彥根の感化を受けたものか、其內柔外剛なるところ、貯蓄の念に厚きところ、事に臨み自我的にして極めて冷靜なるところ、殆ど湖東人と擇ぶところはない、斯る雰圍氣のうちに人と爲りたる堀田正養は、其身城持大名たりしに拘らず、湖東人として通有性なる氣質に富み、政治家とし

ても二六時中何等かの陰謀を策し、虚名を得るに汲々たりし跡は蔽ふべからざるものがある、彼は大名の出にして大名らしからず、貴族たる氣品を自ら傷けたこと夥しい。

勤王の浪士に無形の後援者

堀田が封を襲ぐと間もなく、櫻田門外の變があつて天下の人心愈々動搖を來し、諸藩浪士の京都に集るもの續々と加はつて、各勤王、佐幕を唱へて暗鬪日夜絶えず、流血の慘風が輦轂の下に起るの情勢を呈した、此時宮川藩は夙に勤王の大義を唱へ、時機の到るを待ちつゝあつたが、隣藩には德川四天王の隨一彦根藩があるので、若し一たび倒幕に左袒したとの故を以て其强大なる威力を加へられたならば、如何なる事態を惹き起すやも測られしなかつたので、努めて輕舉盲動を避け、何等積極的の行動を取らずして、單に勤王派の浪士の爲に、無形の後援者として成行を注視するに止まるのであつたが、問もたく王政維新の大詔煥發せられ、尋で諸侯の版籍奉還となつて、同時に堀田は宮川藩知事となり、廢藩置縣に際し官を罷めて東京に出たそして華族令の發布と同時に子爵を賜はつたのであつた。

子爵 加藤友三郎

蒼廣島藩の小祿の家に生れ、海軍々人としての閲歴のみを有する一介の武辨が、總理大臣の榮位に上るに至りたるに於ては、實に異數に感ぜられるが、彼は勝氣で强情な性質を承け、先天的に非凡の頭腦を有してゐたものと見える、武將として戰功を樹つること多く、海軍大臣となりては、我國海軍今日の强大を見るの策に盡瘁し、遂に宰相となりて治績を擧げ、子爵を授けられ、大勲位元帥の稱號を賜はつた。

撲直剛毅の父と女丈夫の母

加藤は文久元年二月二十二日、加藤七郎兵衛の第三子として廣島城下に生れた、家は代々安藝藩主淺野侯の臣であつて、七郎兵衛は步行組を勤めてゐたが、其學識才幹は忽ち藩主の認むるところとなつて、學問所の助教授に登庸された、其人と爲り樸直剛毅、身を持すること謹嚴、常に人才を愛して後進の指導に力を盡した、又勤王の志厚く、尊王攘夷論で幕末多事の際には率先して大義名分を說き、有爲の諸生を鼓舞激勵するに努めたが、文久三年江戸藩邸に滯在中

病死した。

加藤は三歳にして父を喪ひ、爾來母タケ子の手に教養された、タケ子は膽力人に優れ、武術の心得もあつて、男優りの女丈夫であつた、或日七郎兵衛の外出不在中、星野某といふ同藩の士が來て、お歸りを待ちませうと客間に通つた、星野は國事に關して七郎兵衛と意見を異にし、大に議論を闘はしたが、七郎兵衛の大義名分に甚く正論に深く感動し、忽ち己れの謬見なるを覺ると、自責の念抑へ難く、一死以て陳謝しようといふ覺悟で訪問したのであつたが、タケ子は敏くも星野の顏色擧動の常ならざるを看て取り、ひそかに隣室で容子を窺つてゐると果して星野は切腹しようと身構へたので、直ぐさま飛込んで其短刀を奪ひ取り、生命に別狀なからしめたといふほどの氣丈な婦人であつた。

勝氣て强情な友公時代

加藤の長兄種之助は、明治元年討幕の師が起つた時、藩命に依つて小隊長となり、備中を平定してから江戸に赴き、彰義隊の討伐に參加し、續いて奥羽の戰ひに功を樹てゝ凱旋すると、

祿二十石を給せられて神機隊の副奉行となり、明治四年陸軍中尉に任ぜられ、西南の役に戰功を奏し、後海軍に轉じて大尉となつた人で、漢學の造詣深かつたと傳へられてゐる。

加藤は幼時に長兄より漢學を敎はり、又高木屋と稱する私塾で勉强したが、明治五年二月、長兄に伴はれて東京に出ると、共に築地本願寺の寺中に假住ひして、英語數學漢學等を私塾に學んだ。

加藤の幼時に關しては、彼が首相拜命の當時、竹馬の友たりし某氏の談として、都下の新聞に載せたる記事を左に掲げる。

私達は幼い時から、友さんの家の近所に居りまして、よく知つて居ります、其頃友さんの家の界隈は士屋敷が澤山ありまして、子供の遊びは戰爭ごつこでした、刀はもう持たれぬ時代でしたが、友さんだけは赤鞘の長い刀を一本打つ込んで、二言目にはそれをスラリと拔き放ち、廣島言葉で「打つた斬るぞ」とおどし、お山の大將をきめこんで居ました、その頃は鉛筆が珍重されてゐて、友さんはそれを種に、ワシントン會議の駈引よりもつと上手に、私達子供をあやつつて、相撲をとらせる、駈けつこをさせなどして、とどのつまりただ一本の

鉛筆をくれるくらゐでした、今こそ友さんは蠟燭の燃え殘りと言はれて居りますが、若い時は却々隅に置けぬ人でした、或屋敷のお孃さんが好きで、仲がよかつた、友さんが戰爭ごつこに飽いて、例の長い赤鞘に左の手を掛け、グツと反身になつて、そのお孃さんの方へ行くのを、私達子供連中が大勢ではやし立てると、ムキになつてギラリと長いやつを拔き放して私達を追つ拂ふといふ、却々面白い場面もありました。

幼時の加藤は却々の腕白で、其勝氣と强情とには尠からず家人を手古摺らせたが、母親に對しては意外に從順で、能く其訓戒を守つたといふ。

彼が十歳の時、兄の種之助は彼の膽力を試めしてやらうと、或夜、彼よりも年上の甥と一緒に暗くて淋しい道を、各々異れる方面から單身迂回させた、すると年下の加藤が見事に勝を得たさうだ、又上京して築地のお寺にゐた時、或日近火があつて皆な周章狼狽いたにも拘らず種之助は平氣で酒を呑んで居り、加藤も其傍で落ちつきすましてゐたが、到頭火の手がまはつて來たので避難したといふ、加藤が幼より母と兄の薫陶を受けて、柔弱の少年でなかつたことは、以上の事柄で想察される。

優秀の成績で兵學校卒業

明治六年、加藤は十三歳で海軍兵學寮の募集に應じ、入學試驗を受けて同年十月入學した。同寮では從來生徒の年齢を十五歳乃至二十五歳としてあつたのを、此年正月改定して、十三歳より十五歳までを限つて入學せしむることゝした、其時五十五名の合格者中、彼は最年少者であつたのだ。

海軍兵學寮といふのは、今の海軍兵學校の前身で、東京築地の幕府海軍教授所跡に創設されたもの、それが明治九年に海軍兵學校と改稱し、二十一年八月廣島縣江田島に移つたのだ、當時兵學寮は豫科と本科に別たれ、豫科を修了してから本科に進むの制度であつた、加藤は豫科生徒として入學し、明治九年九月本科に進んだ、彼は在學中敢て勉强家といふ程でもなく、又別に秀才だとも思はれず、他の學生と何等異るところはなかつたやうであつたが、先天的に非凡の頭腦を有してゐたものか、最初のうちこそ成績普通であつたのが、歳月を經るに從つて學業が漸次に優秀となり、遂に第二位を以て卒業するに至つた。

首相となるまでの閲歴

遠洋航海を卒へて、明治十三年十二月海軍少尉補に任ぜられたる加藤は、更に海軍兵學校通學を命ぜられた、當時海軍兵學校にては、特に通學士官といふ制度があつて、卒業後にあつても尚ほ所定の學科を修習させたものだ、加藤は其翌年から軍艦に乗組んで、海上作業の實習に從事し、二十三歳にして海軍少尉に任ぜられ、二十六歳にして大尉に陞進した、而して二十九歳の夏、海軍大學校の第一期卒業生たる肩書を得て、淺間艦に乗組み鋭意砲術の練習に努めたる以來、彼は軍人としての生活を送つて、日清戰役に功を樹て、日本海々戰には海軍少將で聯合艦隊參謀長に補せられ、東郷司令長官を輔佐して、世界の海戰史上に未曾有の大捷を博した。

明治三十九年西園寺内閣の成立に際して、加藤は齋藤實の後を承けて海軍次官となり、大正四年大隈内閣に入りて海軍大臣となりたる以來、彼は政治家として大に活躍し、遂に總理大臣とまでなつたのである。

男爵 奥田義人

其學生時代に於ては元氣旺盛、敢て人後に落ちざる活潑な青年であつたが、一たび身を立つるに及んで謹嚴實直、友誼に厚く、後進の指導誘掖に心を勞し、而も學深く才高く、輕佻浮薄の徒輩多き現代に於て、稀に見る君子人である、伊藤博文は能く彼を識つた、而して能く用ひた、斯くて奥田は其手腕を揮うて官位累りに進み、文部次官となり、法制局長官となり、宮中顧問官となり、遂に文部大臣となり司法大臣を兼攝するに至つた、蓋し大臣として第一の人格者と云つて宜からう。

上京して大學豫備門に入る

奥田は鳥取藩士奥田鐵藏の三男で、萬延元年六月に生れた、幼い時は極めて虚弱な身體で、そして非常に神經質であつたが、天資頴悟、所謂双葉の時から香しいものがあつた、明治十年彼れが十八歳の時、こゝろざし志を立てゝ東京に上つた、母が手織の木綿絣に同じ羽織を着て、小倉袴に足駄を穿いた質樸な田舍漢、着京しても地理は分らず、彼方此方と彷徨うて、警官には怪

まれ、車夫には劍突を喰ひ、イヤハヤ種々樣々な憂目に遭つたが、やつと知人の紹介で神田神保町の安下宿に泊り込んだ、これからは一生懸命に大學豫備門の入學の準備に取掛つた。

當時の學生は何れも天下國家を以て念とし、熱烈なる意氣は驚くべきもので、貧乏などは屁とも思はぬ豪傑肌のものが揃つてゐた、奥田も素より貧書生、國許から送つてくる學費は極めて僅少で、安下宿に生活するの外はない、その室といつたら全く木賃宿よろしくで、障子の紙は黐ずんでボロ〳〵切れて居れば、壁は方々に膏藥を貼られ、陰氣な氣持の惡い室だ、そして此四疊半には今一人の同宿者が居た、奥田はそれと一緒に此城廓に閉ぢ籠もつて、一心不亂に勉強した効あつて、美事に入學試驗をパスした。

試驗に病缺して苦悶懊惱

さて豫備門へ通ふことゝなつたが、僅の學資で殆ど遣り切れない、餘計な小遣などは一錢も使はず、入浴も錢湯に行くかはりに冷水浴で濟まし、理髮は四月目に一度といふ始末、他は推して察すべきであらう、斯うして勉強に怠りなかつたが、茲に彼に取つて眞に氣の毒な事が出

來た、外でもない、豫備門から大學へ昇級する試驗の際、彼は病氣に罹つて應ずることが出來なかつたので、到頭一年といふ月日を空過せねばならない譯になつた、實に殘念で堪らない、折角準備も出來て大に期待するところがあつたのを、病氣の爲に挫かれた彼の心中、その懊惱の程は察するに餘りある、彼は煎餅蒲團の中にくるまつて、飲まず食はずに悲憤の涙を絞つた上、京以來非常に世話になつた久保田讓にも面目ない、鄕里に對しても誠に耻かしい、此上は一ツ大發奮して、一年遲れた不覺を挽回せねばならぬと、非常な覺悟を懷いた彼は、病の癒ゆると共に、到底常人の企及し能はざる黽勉努力をなすに至つた。

江木博士には一歩を讓つた

そこで彼は大學校構内の圖書館に通ひ始め、朝はイの一番に、夜は最後の一人となるまで、風の日でも雨の夜でも、彼の姿を圖書館に見出さない時はなかつた、そして再度大學へ入るべき試驗期日を迎へたが、前回の耻辱を雪ぐは此時ぞよとばかり、勇躍して試驗に臨んだ結果は最優等の成績を擧げた、彼の屈せず撓まざる努力は茲に報いられて、教員も其未曾有なる成績

に驚嘆した。さうして教員等が協議の末、奥田を貸費生とする破格の命を下した、奥田は胸を撫でおろして、今までの陰欝であつたものが打つて變つた快活の人となり、多數の學生仲間には大に敬意を拂はれるやうになつた、かくて彼は自然多數の生徒を統率することが出來て、在學中は同窓間に牛耳を執り、首領と謳はれてゐた。

然るに茲に彼の爲に恐るべき勁敵が現はれて、決死の勇を鼓して勉強したに拘らず、彼は遂に最優等者たる地位を占領し得なかつた、勁敵とは誰であらう、外でもない、後年辯護士として法曹界に赫々たる名聲を馳せた江木博士であつた、博士は學生時代から博覽强記、教師に教はる前にチヤンと名論卓説を吐き、時には教師の所論を攻擊して、グーの音も出させなかつたくらゐであつたから、流石の奥田も隨分奮闘したが到底敵はなかつた、そこで奥田は、自分が人を操縱する奇智に富めるものから、江木の敏才を一ツ利用してやらうと試み、うまく江木をけしつけて、奥田は學生中の棟梁、江木は其參謀といふ格、寄宿舍に於ける生徒間の規則みたやうなものは、何でも彼でも奥田の裁決を經て頒布したさうだ。

友情の厚きに敬服せらる

奥田が斯の如く學生間に尊敬されて居たのは、彼が溫厚なる友情を持つてゐた爲で、江木は學識に於ては優秀だが、亂暴もすれば酒も飲む、金さへあれば寄宿舍を飛出して、酒を呷り暴行をやつつける、奥田はそれを見ると、

『江木、又飲んだのか、そんなに飲んでは第一身體を毀してしまふぢやないか、何うも仕ようがないなあ』

と云つて何事を棄てゝも介抱してやる、これは獨り江木に對してのみならず、友人には誰にでもこんな調子で、或日の如きは、江木が花見酒に醉うて『醉うては枕す美人の膝』を吟じながら歸つて來たのを、奥田は『江木、貴樣は又醉つぱらつたのか、乃公に脊負され』と、大の男を脊負つて寄宿舍の二階の寢室へ寢かせたこともある、かう云ふ親切は度々の事で、江木も衷心彼の友情の厚きに敬服し、恰も兄弟の如く親密に交つてゐた。

奥田の同級生は、全校中で一番傑出してゐたもので、卒業試驗には受驗せず、卒業論文も出

さず、又教室に入つても殊に講義も聴かずして、唯教師と議論を闘はしては、教師連がヘコむのを見て愉快がつてゐた、それも其筈で、奥田等の親分株は、毎日圖書館へ入つてゐて、あらゆる參考書を讀破しては、教師攻撃の材料を造つたものだ、其頃議論を吹きかけられた教師には、穂積陳重のやうな洋行歸りのホヤ〳〵もあつた、生徒連は唯無邪氣に、何でも新智識連を打負かしては、非常に豪いと誇つてゐたものだ。

舍監虐めの惡戯手段三ツ

奥田等の豪傑仲間は、同級生間に浴尿の處刑とかいふ新處罰令を設けたことがある、これは意地の惡い舍監に對する制裁法で、其方法は、夜中先づ舍監を誘き出す爲に、生徒一同が寄宿舍内で頻に笛を吹くと、舍監はそれを取締るべく提灯を點けて窓の前まで來る、其處を能く覗いてゐて、二階の寢室の窓から小便を浴せる、それにも構はず尚もやつて來れば、東西の寢室から交る〳〵笛を吹き鳴らすので、舍監が狼狽へて東西に駈け廻る、そのうちに疲れてしまふのを見て、大勢が二階の梯子段から轉がり落し、そして氣絶させたものだ、これが惡戯手段の

最も深刻なもの。

次に少し罪の輕いのは、就眠後洋燈を消す規定に對して、こんな虐め方をやつた、それは時時洋燈を消さずに眠つた振りをして寢に就くと、舍監が見廻りに來て、洋燈を消さうとして室内へ入ると、扉の鴨居の所へ石を乘せて置いて、突然それが舍監の頭上へ落ちて來る仕組をしたり、時には洋燈の下に繩を張つてひつくりかへさせたものだ。

今一つは寄宿舍のどの室にも、壁に大きな穴が開けてあつた、其頃大分トランプが流行して喝さへあれば室内でやつてゐた、舍監が來るとワツと鬨の聲をあげる、そして壁の穴から隣室へ逃げたものだ、教員や舍監が發見して新しく壁を塗つても、直ぐに窓の鐵の棒を捻ぢ取つて、それで大きな穴をあけてしまふ、冬寒くなつてストーブを拵へるのが遲いと、奥田や江木等が相談して、雨戸を取り外しては庭前に持出し、滅茶苦茶に叩き壞して、それに石油を注いで火をつけ、暖を取りつゝ快哉を叫ぶ、彼等の勇壯さ加減と云つたら、全くお話しにならぬ。

紺足袋組と白足袋組の反目

當時大學生間に、紺足袋組と白足袋組との二組があつて、紺足袋組は奥田や江木が領袖となり、平常木綿の衣物に木綿の兵兒帶、羽織の紐は必ず紙撚で結び、紺足袋に麻裏草履を穿いて例の握り太のステツキを片手に、肩をいからして豪傑風を氣取り、盛んに議論を闘はしたもの、そして絹布を被たり白足袋を穿いてゐる、學生を罵倒した、彼等は雨天の時は五六名で足駄一足を買つて來ては、それを代りばんこに穿いたものだ、ところで白足袋組の首領は高田早苗、石渡敏一等の面々で、白足袋組が紺足袋組を『田舍漢』と冷笑すれば、紺足袋組は白足袋組をば『腐れ女』と罵倒して、負ず劣らず惡口三昧、とう〳〵卒業するまで反目をつゞけた。

いづれの學校でも、下級生は上級生から壓迫を受けたものだが、奥田等の同級生は公明正大たとへ上級生といへども遠慮はしない、苟くも非立憲的の行動があれば、毫も假借するところなくそれに抵抗したものだ、嘗し上級生に專横の處置があつたので、相談の上愈々一思ひに彼等上級生を毆打つてしまふことに決した、江木等は眞先に立つ方であつたが、偖困つたことには、上級生中には奥田の同鄕人が居る、それ等まで毆打るのは本意でないとあつて、餘儀なく決行を中止したさうだ。

退學處分を受けた事件の顚末

ところが奥田が卒業の前年大變な騷ぎが起つて、奥田外百四十六名が退學處分を受け、おまけに全國の官公私立の凡ゆる學校へも入學させぬといふ、前古未曾有の制裁を受けた、左に其顚末を詳述しよう。

其時分大學の慣例として、卒業式が濟むと內外朝野の貴紳を招待して夜宴が開かれる、卒業生でない學生卽ち寄宿舍生活の學生は、此日は晝飯も食はずに夜まで空腹を我慢してゐたものだ、といふのは夜宴が散會の頃になると、ソレ時分はよしとばかり、ドカ〳〵と宴席に乘り込んで皿小鉢を片づけ、德利を始末する態に見せかけて、實は殘酒殘肴を片ツ端から運び出すのだ、ビールごされ葡萄酒ごされ、ハム御參なれ、チキン又辭するところにあらず、何でも彼でも手當り次第に寄宿舍へ擔ぎ込む、さアこれから吾輩等の天下だといふ譯で、一同飲むわ食ふわ、何でも構はず詰め込んで、それから唄ふ、呶鳴るの大騷ぎ、斯くして一夕の歡を盡すのが年中行事の一つであつた。

然るに明治十六年十月の卒業式に限つて、あれは何うも體面を汚し且風紀に係はるといふので、突然取止めとなつて、さうして夜宴は午前に繰上げられた。

不平が勃發して大變な亂暴

實を云ふと、夜だからさういふ事も出來るので、如何に何でも晝日中では手が出せない、意地汚い話だが、一木調子な學生の不平は、期せずして此一些事に集中し、『どうも怪しからん、吾々は吾々で別に趣向を立てようではないか』と評議一決、當日は飛鳥山の手前の某寺の前で運動會も開く事となつた、そこで卒業式には一人の學生も列席せず、悉く運動會に出かけてしまつた。

會場では四斗樽の鏡をぬいて、盛んに冷酒を呷る、何が偖漢學仕込みの當時の學生の事だ、痛飲淋漓、劍を拔き地を斫つて莫哀を唄ふといふ有樣、悲憤熱狂の感慨を酒に托して、歌ひ、舞ひ、跳ね狂つた、さうして日の暮れる頃一同寄宿舍に戻つたが、學校當局に對する餘憤は未だ去らない、何がな當り散らさなければ氣が濟まない、『おい賄、飯だ』と、到頭飛ばッちりが

賄方に向つた、『今日は運動會ださうで、夕飯の仕度はしませんでしたが……』糞ッ、さういふ賄方があるか、飯を出せ、早く出せ』、苛り立つて食卓を叩く、羽目板を破る、窓硝子を毀す、大變な亂暴を働いた。

有名な奥田義人の畢丸演說

元氣に任せた一同は、まだそれだけで治まらず、遂に校舍を破壞し、舍監室にも押しかけたので、一時は非常な騷ぎであつた、之を聞いた警察では大勢の警官を大學構内に急派し、警察力を以て學生を鎭撫しようとした、併し時の總長加藤弘之博士は斷乎として之を斥け『大學内の事は不肖が取締に任ずる、唯失火等の心配があるから、數名の警察官が其點を警戒して下さればよろしい』と、總長自身が鎭壓の任に當つて、結局其夜はそれで治まつたが、治まらぬのは是等亂暴學生の始末である。

文部省では嚴重に學生を處罰するやうにとの内訓を與へたさうだが、總長始め教授連は、首謀者だけを處罰して穩便に解決する考へであつたと見え、學生側に其意嚮漏らした、ところ

が學生達は決して承服しない、奥田義人はテーブルの上に飛びあがつて『諸君、畢丸があるか』と大喝一聲、有名な畢丸演說をしたのは此時だ。

『苟も、股間の一物尙ほ健在ならば、男子約を背くなかれ、吾々に罪ありとせば、甲乙丙丁皆同罪だ、某は首謀者にして某は雷同者なりなどと、そんな區別がつくものか、運動會に臨んだ諸君は、悉く是れ首謀者でなければならぬ』

かう言つて學生の結束を堅めた、そこで事態頗る面倒となつて來た。

退校處分と全國學校入學禁止

加藤總長は止むなく審問委員を任命して、學生の一人々々につき、罪狀の有無輕重を取調べさせた、其結果法理文三科の學生過半數、百四十七名が退學處分を受けた、此連中のうちには奥田義人、平沼騏一郎、中橋徳五郎、柴田家門、小松謙次郎、三上參次、萩野由之、松方幸次郎などの知名の士が澤山居た、無論是等の人々は首謀者といふわけではない、殊に奥田などは左に記せる公文書に、鳥取縣士族奥田義人外百四十六名となつてゐるので、如何にも彼が首謀

者であつた如くに世間から見られたのは氣の毒だ。

しかのみならず、退學處分發令後、時の東京府知事芳川顯正の名を以て、各郡區役所、戸長役場、學務委員に宛て次の如き布達を出したものだ。

『別記鳥取縣士族奥田義人外百四十六名今般東京大學並ニ同豫備門ニ於テ不都合ノ所爲有之退學セシメ候處右ハ自今文部省直轄官立學校及ヒ公立私立ノ學校ヘ入學禁止相成候ニ就テハ其郡區内私立ノ學校ヘ入學セシメサル樣取計ラフヘシ此旨相達候事』

私立の學校へも入れぬといふのは餘りに殘酷だ、所謂死屍に鞭つもので、折角最高學府まで進んだものを殺してしまふのかと、自分の惡い事を棚に上げて、學校當局の處置を怨みつゝ、悄然として校門を去つた。

師弟愛の深き加藤總長の涙

昨の得意に今の失意、境遇は全く一變した、何の面目あつて父兄に見ゆるか、どの面さげて鄕黨の人々に會へるか、悔恨の情はひし〳〵と胸に迫る、此時加藤總長は、校門が眞下に見え

る校舍の二階の窓へ椅子をもつて來て、追はれ行く學生の群をヂツと見てゐた、前途多望な青年が血氣にはやつた一旦の過失の爲に、九仞の功を一簣に缺き、悄々と校門を去り行く姿の哀れさよ、總長の眼からはポタリ〳〵と熱い涙が落ちた。

元來加藤總長は、此度の事件に對して文部省の手前、又校則の手前、罪は罪として斷然たる處置には出でたものゝ、何時かは折を見て復校させようとの肚があつたので、官公立は無論のこと、私立の學校にまでも入學を禁止せしめたものであつて、それを所謂親の心子知らずで、何れも總長を恨んだり呪つたりしたのであるが、總長は文部省への斡旋に努力し、退校處分を受けた學生は、間もなく嬉々として再び校門をくゞる事となつた。

伊藤の炯眼能く奥田を見た

その翌年が愈々卒業期、江木は第一位を占め、奥田は次席の成績順で芽出たく法學士の稱號を受けた、奥田の才識は深く認められて居たので、官途に就かうとの志望を聞いた大學の副總長服部一三は、一通の紹介狀を添へて伊藤博文の所へ奥田を遣はした、其頃伊藤は憲法制定の

爲に獨逸に赴き、今や歸朝して憲法取調に專心從事してゐた、服部からの紹介狀を見ると、

『何十名の人を使ふよりは、寧ろ一人の奥田を採用しては如何』

との振つた面白い文句、至極簡單にして然も奥田の爲に大に氣を吐いたもの、伊藤は笑ひながら直ぐ樣採用して呉れた。

伊藤が奥田に接してみると、成程服部の言つた通り、決して凡庸の器ではない、將來必ず成すあるの人物なりと看破した、彼は太政官の制度取調局に雇はれ、井上毅や金子堅太郎等の部下にあつて働いた、それから內閣官報局長、樞密院書記官、山林局長、特許局長、拓殖次官、農商務次官等に歷任し、三たび歐洲に漫遊した、尋で文部次官、法制局長官となり、法學博士の學位を授けられた、偶々衆議院議員などにもなつたが、後宮中顧問官たること十餘年、山本內閣成立の時文部大臣の椅子を占め司法大臣を兼攝した、後東京市長となり市民の聲望を擅にしたが、彼は一面後進の誘掖指導に努め、暇さへあれば中央大學へ行つて、監督やら教授やらに盡した。

高橋是清

高橋の一生は偶然より偶然への連絡であつて、常に豫期せざる運命の波に揉まれたかの觀がある、亞米利加の奴隷時代から、教師時代、新聞の寄稿家時代、特許局長時代、ペルー鑛山失敗事件、日銀時代、大臣稼業、總理大臣、貴族院議員と子爵を振捨てた一平民、盛岡の總選擧、政友會總裁投出し、隱居、三度の大藏大臣等、その經歷を辿ればすべて變轉極まりなきフイルムの如く、而も悉く運命的である點は、頗る不思議に感ぜられる。

彼の出世は養祖母薫陶の賜

高橋は安政元年七月を以て、江戸芝露月町に生れた、父は幕府の御師範役川村庄右衛門といつたが、幼時故あつて仙臺屋敷なる高橋某に貰はれた、然るに間もなく養家に男子出生せし爲め、爾來養祖母に引取られて養育された、養祖母の喜代子は夙く夫や兒にも先立たれ、尼となつて法名を保壽と稱し、頗る薄倖の婦人であつたが、實子が未幼少の頃、漢籍の稽古から歸つ

て來ると、姑が之れに復習させてゐるのを傍で聞いて、其の讀方を書き留めて置き、後日復習の時、我が子の誤れるを正し、其の忘れた所を敎へたために、自然に四書は暗誦してゐた。

彼女はまた稀に見るの女丈夫で、財政頗る困難な中から高橋を寺小屋に通はせ、餘暇を以て四書を寫本して彼に與へ、或は論語を復習せしめ、夜は英雄偉人の物語りを聞かせる等、彼の敎養については、實子にも劣らぬ愛情と熱心とを以て誘導啓發に努めた、其寫本は現に高橋家の寶物として、鄭重に保管されてあるとの話だ。

寺奉公をやめて横濱へ留學

保壽尼は毎月十八日には必ず淺草の觀世音へ參詣するのが例となつてゐて、高橋を連れて往還する路上、論語の諳誦をやらせたものだ、或時鎌倉建長寺の僧侶が保壽尼を訪ねて來て、フト高橋の顏を見ると、いろ〳〵と面白い物語を聞かせた末、此の兒は將來必ず榮達しますぞと賞めて、懷中から半紙一枚を出し、それに耐忍の二文字を書いて與へ、人間一生守るべきことは此の二字であると諭した、保壽尼はそれを深く肝に銘じて、養孫の高橋に折に觸れては戒

め聞かせた。

高橋は九歳の頃から、大崎の持昌寺といふ寺の徒弟に往み込まされた、そこで二年餘り神妙に奉公してゐたが、偶仙臺藩から二名の徒弟を簡拔して、英語研究の爲横濱へ留學せしめることになつた、それを聞き込んだ高橋は、直ぐ樣藩廳に願書を差出したところ、幸に採納されて、鈴木知雄と共に横濱に出で、ヘボンとバラの兩婦人に就いて、英語を研究することになつた。

當時の横濱は多くの浪人が各所に徘徊し、物情騷然たる有樣であつたから、保壽尼は可愛い孫を獨りで手放すに忍びず、此上は藩に願ひ出で、留學生二人の炊事役として共に横濱に下り直接監督をすることにしようと、そこで藩の許可を得、行つて見ると塾舍といふのは、幕府の通事太田某の邸内の一隅、全く見る影もない小屋同樣のもの、そこで保壽尼は夜になると種々の訓話をして二人の少年を教養した。

隨行員として渡米を許さる

然るに慶應二年の大火に、塾舍も教師の邸宅までも燒き拂はれたので、一時中絶の餘儀なきに至り、一先づ江戸に歸つたが、求學の慾念止むべくもなく、再び鈴木と相携へて横濱に赴いた、時に幕府は、頻はしき外交問題を惹起せんことを恐れ、浪人の横濱に入るを防がんが爲め關所を設けて諜者を放ち、一々通行人を誰何して、嚴重に警戒しつゝあつたから、帶刀しては迚も入れない、そこで二人は外國商館の給仕に變裝し、漸く關門を通過して横濱に入り、尙ほ勉學を續けつゝあつた。

兎角するうちに慶應三年となり、勝安房や富田鐵之助が歐米視察の途に上るに際し、勝の悴と高木三郎といふ二人の少年が、之に隨行して渡米するといふ話を聞いて、自分も是非共隨行員に加へてくれと懇願した、すると藩廳では彼の熱誠に動かされて之を許し、且つ米國の商人ヴアンクートに、着米後の高橋を保護監督してくれるよう賴んだ、此の時彼は十四歳の少年であつた。

冷血漢の米人少年を酷使す

いよ〳〵出立するに臨んで、養祖母の保壽尼は、懇々と彼に訓戒し、且つ一振の匕首を餞別として與へ。

『男子もとより忍耐が第一である、しかし外人の間に入つて、彼等の辱めを受け、爲に日本武士の面目を傷けるが如きことあらば、この匕首を以て切腹せよ』

と諭し、又彼が漢籍の師匠も、

大海のそともの國に出づるとも
わが日の本の内を忘るな

の一首を短冊に書いて彼に與へた、此の二品を肌の守として、雄々しく萬里波濤の旅に上り無事米國に着して早速ヴアンクートの許を訪ね、其の家に寄寓することゝなつた。

然るにヴアンクートの老親といふのが、酷薄無情の冷血漢で、高橋少年は殆ど牛馬の如く冷遇酷使せられ、早朝から深更まで鞭韃罵詈、學校へも通はせず、獨學することをも禁じ、食物の如きも犬猫同様の物を與へらるゝ有様は、祖母に戒められた忍耐の教を守りきれず、日夜悲憤煩悶を重ねつゝあつた。

奴隷に賣られて憂き艱難

ところが或日老人から、突然、オークランドのプラオンといふ家に轉ずべき旨を言渡された、プラオン家は其の地方の富豪として、高橋も豫て其の名を聞いてゐたから、これは何等の幸福ぞと、喜び勇んで其の邸に移つた、しかしながら彼の期待は、此處でも亦見事に裏切れ、朝は五時から叩き起されて、夜は十時過ぎるまで酷使されて、勉學するなどのことは思ひも寄らなかつたので、かさね〳〵の不幸に悲嘆の涙に暮れてゐる折しも、プラオンは清國駐劄公使に任ぜられて任地に赴くことゝなつた。

高橋は此の機會に於て暇を取らうとしたところが、何ぞ計らん、身はヴアンクートの爲に、奴隷として三年間プラオン家に賣渡されてゐることが判明した、こゝに於て彼の小さい胸は、煩悶懊惱して解くべくもあらず、自暴自棄、ことさらに主命に抗して亂暴を働き、これによつて追出されんことを計つたが、その計畫も畫餅に歸して、却つて桑港方面へ轉賣さるゝことゝなつた。

このことを漏れ聞いた高橋は、最後の手段として遁走を企て、あらゆる危險を冒してブラオン家を脱出し、危き虎口を逃れて兎も角も桑港へ行つてみると、計らずも富田鐵之助に邂逅して事情を訴へた、そして名譽領事ブルワックスの裁きによつて、やつと自由の身となることが出來た。

歸朝して汁粉屋樓上に潛伏

それから彼は桑港で、一日本雜貨店に雇はれ、店員となつて忠實に勞務に服する傍、英語を研究しつゝあるうち、宇和島藩士城山某の歸朝するに際し、之に隨行して日本に歸つたのが明治三年で、初めて米國の地を踏んでから四年目である、即ち高橋が十七歳の時であつた、然るに横濱に上陸してみると、仙臺藩は朝敵の汚名を蒙り、舊藩士の身邊は不安だと聞かされて、彼は商人風に身をやつし、物に上京して牛込邊の或汁粉屋の二階に潛伏し、殆ど三月ばかり人目を忍んでゐたところが入京の際計らずも知合の髪結床の小僧に出會つたものだから、この小僧の口から彼が歸朝してゐることが傳へられ、到頭仙臺藩廳にまでも分つてしまつた、養祖母始め一族の者は非常に喜ぶと共に、彼の身の上を心配して、百方手を盡して探査した末、やつとのことで汁粉屋の二階に隱れてゐることが分り、玆に久しぶりで彼は養祖母の許に歸つたのであつた。

大學小教授から再び學生へ

その後彼は傳手を求めて、森有禮の食客となつた、森は高橋の尋常の材にあらざるを看て取つて、いろ〳〵と目をかけてくれて、彼を大學南校に入らしめた、當時の南校は語學の教授に全力を注ぐの有樣であつたが、高橋は既に英語の本場を踏み、實地に就いて數年間研究したのであるから、儕輩にして彼と肩をならべる者なく、幾くならずして擢でられ大學小教授となつた。

然るに當時尙ほ和學者の勢力優勢にして、洋學の徒は頻に排斥せられ、時には迫害さへ蒙るの狀態であつたから、森の入智慧で、政府部内に勢力ある薩摩藩士と自稱し、塙和吉郎と名乘つて、漸く彼等の迫害から免れるの道を講じた。

兎角するうちに、唐津藩で耐恒寮と稱する英語學校を立てゝ、適當な人物を校長に聘せんと探してゐた、恰度よいところであつたので、彼は森の世話で校長となり、一年餘り教鞭を執つたが、再び東京へ歸つてブルペツキの家に身を寄せ、またもや元の學生に復つて、開成學校に入學した、此の學校は大學南校の組織を變更したもので、勿論程度も餘程高くなつてゐた、彼は此の時分、一家の生計を多少共助けねばならぬ責任を持つてゐたので、勉學の傍寫字をしたり、外人に日本語を教へなどして幾分かの收入を得た、ところがブルペツキの家へ時々やつて來る末松謙澄と懇意になつて、相談の末、外字新聞の記事を飜譯して、それを東京日日新聞に載せて貰ふことゝし、其の原稿料は末松と二人で折半し、これで家計の一端を補つてゐた、我邦の新聞へ外國記事の飜譯物を載せたのは之れが嚆矢である。

官に就いて大臣となるまで

こんな內職をやりつゝ學生生活を續けてゐたが、森有禮が淸國公使を辭して歸朝したのを幸ひに、早速自身の將來に就いて相談に行くと、森は、何時までも書生で居らずに、役人になつ

たらどうかと勸められ、其の盡力に依つて明治七年文部省の役人になつた、こゝでも英語の長所は矢張り重寶がられて、上官にも受けが好く、同僚にも重んぜられ、間もなく大阪英語學校長となり、明治十四年には農商務部に入り、調査課長、商標登錄所長、權少書記官等を歷任し、十八年官制改革と共に專賣局長官に任じた。

斯の如く、彼の官界生活は農商務畑に始まり、明治二十二年三月東京農林學校の創立さるゝや、其の校長をも兼ね、商標登錄、專賣特許の創始者として、漸く名を知らるゝに至つたが、偶〻獨逸人に欺かれて鑛山事業に失敗し、暫く轗軻不遇の境遇に呻吟したが、日本銀行總裁川田小一郎に拾はれたのが運の開ける端緒となり、日本銀行副總裁に勅任せられ、日露戰役に際しては財務官として、十億の外債募集に成功し、華族に列せらるゝと共に日本銀行總裁となり、第一次山本內閣の大藏大臣となつた。

林有造

或は公武合體論を唱へ、或は佐幕說を唱へて、幕末に於ける山內容堂の藩論は一定しなかつたのをもどか

しがつて、決然脱藩して王事に盡くしたる弱年の林有造、彼は果斷に富んだ男であり、國事に盡すを以て其モットーとする志士であつた而して彼は西郷隆盛と相呼應して大阪城を乗取らんとする陰謀を企て、事前に發覺されて終身禁錮に處せられたこともある、而も彼が板垣を輔けて我國憲政の發達に努めた功は蓋し沒すべからざるものがある、大臣となること二度、一たびは遞相、一たびは農相。

明治初年に於ける彼の策動

林は土佐國幡多郡宿毛國老伊賀氏の世臣岩村有助の次男に生れ、幼名を助次と云ひ、兄の通俊、弟の高俊と共に、土佐の三偉才として知られた人で、幼時林茂次平の養子となり林姓を冒すに至つた。

慶應三年、彼は脱藩して尊王攘夷を唱へ、明治戊辰の役には奥羽に出征して戰功を奏し、凱旋後高知藩參事となつた、明治四年大山巖、品川彌二郎等と共に歐洲に赴いて、親しく普佛戰爭の狀況を視察した、翌年歸朝して外務省出仕に任ぜられ、全權大使副島種臣に從つて清國に赴き、大使を輔佐して大に日清間の友誼を厚くするに努め、樽俎折衝頗る盡すところがあつた、六年征韓論が破裂して板垣退助が參議を辭したとき、彼も亦官界を去つて片岡健吉等と

相計り、海南義社を設けて、共に進退を同じうせんことを誓つて、後進の子弟を嚮導しつゝあつた。

此際世上の風雲たゞならず、國運正に多事なるを看て、林は薩摩に赴き西郷隆盛に面會すると、隆盛は何うしても政府との衝突は避け難い旨を說き、開戰の時機に就いて種々と相談を受けた、七年江藤新平が佐賀に亂を起し、敗れて土佐へ逃げて來た時、林は片岡健吉等と江藤に面會して、種々善後策を勸告したのである、さうして更に立志社を立て、世の風雲が如何に動くかを窺ひつゝ、時機の到るを待つてゐた。

擧兵の陰謀發覺して捕はる

明治十年、林は東京に居て西郷隆盛が兵を擧げた報を聞くと、時こそ來れりといふので、直に同志の大江卓と共に京都へ行つて、木戸孝允に面會した、ところが木戸は西郷が蹶起したとは誤報であらう、屹度その股肱たる桐野や篠原の所爲に相違ないと云ふ、林はイヤ西郷の擧兵は事實に相違ないと斷言し、豫て西郷から聞いてゐた事情を語つて遂に木戸を說伏たさうだ。

林は其時政府に向つて、豫て買上げの約束が出來てゐた白髪山の代金十五萬圓を公債で受取り、それを三菱の岩崎彌太郎に正金九萬圓で賣渡し、それを軍用金にあてゝ、窃に立志社の同盟を語らひ兵を擧げんとした、彼は壯士三千人を率ゐて、一擧大阪城の空虛に乘じ、之を占領する計略であつた、然るに此陰謀が漏れて林は事前に捕縄された。

翌十一年、林は判事玉乃世履の糺問を大審院で受けた、玉乃は『斯る大事を企つるに就いては、必ず一人の首領があるに違ひない、想ふに汝等は板垣退助又は後藤象二郎の如き先輩を推して主領とし、其指揮の下に此企てをしたのであらう』と詰つた、すると林は故らに怒氣を帶びて大言して曰く『板垣後藤彼何物ぞ、是れ皆維新の風雲に際會して今日あるを致せし徒輩ではありませんか、有造不肖なりと雖も、若し大阪城を乘取つて天下の者が幸に響應するやうにならば、其時貴公方は此有造を何と見らるゝであらうか、有造の眼中固より板垣後藤なし、貴公方は吾輩を見るの明がありません』とやつた、此快い答辯は當時裁判官中に傳へられて評判であつたとか。

波瀾多き彼の政治的生活

斯くて林は首領といふので、大江卓と共に終身禁獄を命ぜられ、岩手監獄に入れられた、さうして明治十七年出獄を許されると、板垣退助を輔けて自由黨に入り、其領袖となつて力を憲政施設に竭くした、それから二十年條約改正問題の起つた時、林は同志と共に極力之に反對し、政府に建白して大に其非を鳴らした、尋で彼は保安條例によつて東京退去を命ぜられ、二十二年赦された。

明治二十三年帝國議會の開設に際し、林は鄕里から選ばれて代議士となり、三十一年憲政黨の組織された時其總務委員となり、隈板内閣の時遞信大臣に任ぜられ、三十四年伊藤博文が政友會を組織した時には其總務委員となり、尋で伊藤内閣の下に農商務大臣に任ぜられたが、幾くもなくして辭職した、三十六年には千葉縣から選ばれて衆議院議員となり、尋で片岡健吉と共に政友會を脫し、無所屬議員となつたが、間もなく政界を去つて、鄕地宿毛に閑雲野鶴を友としてゐる。